今日でも蕪村の句を正しく理解せぬ人々は、その夢幻的浪漫調を見ることができず、寫生主義の作家となして論じてゐる。所謂史家や學者といふ人達が如何に出鱈目なことを並べ立てゝ史實を歪曲し、後進を誤つてゐるかの好い見本であらう。なるほど蕪村生涯の句の中には少數の寫實的なものもなくはないが、全體を通じての浪漫的な作風は蔽ふべくもない。殊に蕪村は人も知るやうに南宗畫家であつて、その俳句と繪畫が彼此影響し合つてゐることは彼の春泥句集序に離俗の法として「詩を語れ」と教へ、「畫家に去俗論あり、曰く、畫去レ俗無二他一、法一多讀レ書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣、學者其愼レ旃哉。それ畫の俗を去るにも、筆を投じて書を讀ましむ。況や詩と俳諧と、何の遠しとする事あらんや、」と說いてゐることによつて明らかである。即ち南宗畫の主張として『玉洲畫趣』(註4)は「形にあらず意にあり」「千里の道を行き萬卷の書を不讀は、筆蹟に俗趣生ず」など說いてゐるが、その關係を明らかにしてゐる。南畫の主とするところは形似でなく神韻であり、寫實でなく寫意であり、「其形に似ん事を求むる時は清韵生じ不申」(註5)といふのがその主張である。隨つて其影響を何ほどか俳句にうけてゐる蕪村は却つて形似を離れようとさへした。

――其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日々此四老に會して、わづかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水に宴し、酒を酌みて談笑し、句を得ることは專ら不用意を貴ぶ。如レ此する事日々、或日又四老に會す。幽賞雅懷初めの如し。眼を閉ぢて苦吟し、句を得て眼を開く。忽ち四老の所在を失す。知らず、何れの所に仙化し去るや。恍として一人自らイむ。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是れ子が俳諧の鄕なり(註6)――

その態度を知るべきであるが、彼の作品にはこの態度が相當具體化されてゐる。これが芭蕉が卽實的な態度をとり、身自らそれを見聞しなければ句にしなかつたのとは趣を異にしてゐるところだ。

またその外に蕪村の句の特色に故事古語の援用と、漢土の風物を詠みこんでゐるのとがある。前者は彼の古典的な學殖と所謂「書卷の氣」を現はさうとしたものであり、後者は此時代のインテリゲント特有の支那崇拜と、南畫が支那の風物を雅となしたのに基づいてゐる。南畫なるものは御用藝術となつて生氣を失つた北畫と、町人的な卑俗とに滿ちた浮世繪を止揚すべく、士大夫儒者の中間層を基礎とし、所謂「士人の思想を含んで」(註7)發達したものであつた。そしてそれらの階級層が多く漢籍に親しんだ結果として支那崇拜に傾いてゐたが、蕪村のその影響をうけた俳句が古詩古語を夥しく援用したのもさういふ關係を示すものであり、同時に子規が漢籍に親

しんだ士族の子弟としてそれに傾到する因子はそこにもあつたらうと思はれる。けれども南畫なるものは、當時の新興町人階級の浮世繪に對して起つた反動的なものであり、その階級的基礎は沒落に瀕しつゝあつた中間層であつたゝめに、甚だしく浪漫的であり唯美的であつたのである。だから子規がこれと結びついたことは、過去に偶像を求めたばかりでなく、彼の進歩性の喪失を示すものでなければならなかつた。

蕪村の句が配合によつて成立つてゐることも子規が發見したことである。「配合」とは蕪村が南畫の構成主義を句に移したものに他ならないが、子規が蕪村によつて「配合」主義を學んだといふよりも、子規の當初の季題趣味の認容が、さういふところに落着くべき可能性を有してゐたのであるが、これが子規の寫生に重大な影響を與へ、初期の純粹な寫生から配合の寫生に赴いたのである。即ち「配合」なる言葉の發達過程を見ると、二十六年の鳴雪・古白の句合の判詞に、「槍扇に招ぎ返さん揚雲雀」なる鳴雪の句を評して「雪雀を取合せたるは平入道の知らぬ所云々」と云つてをり、こゝではまだ「取合せ」なる言葉を以て表現してゐるが、それが「配合」と同じであることは明らかである。二十八年の「棒三昧」には、蕪村の「日は斜關屋の槍に蜻蛉かな」の句を評して「意匠の新、配合の和共に妙を見る云々」と云つて、こゝではじめて配合なる言葉を用ゐてをり、同年の『俳諧大要』でも許六の取合せの說を引用して題詠の秘訣を說いてゐるのは注目すべきことであるが、二十九年の「文學」では飄亭の句を評して「吾人は梅とか鶯とか言へる一題を取りて其題ばかりを形容し一句を爲さんと企てしに飄亭は早く三箇以上の材料を配合し來れり。吾人は僅かに二箇の陳腐なる材料を取りて其配合の方法に多少の新意を出さんと、企てしに飄亭は早く三箇四箇の材料を取りて之を一句の中に打ち込み云々」と云つてゐる。隨て此のことは、子規が蕪村調への轉向を二十九年とする說(註8)を覆へし、二十八年の『俳諧大要』の記事と照し合せて二十八年以前に配合主義へ漸次的に遷りつゝあつたと見るべきで、二十九年彼が新花摘に感じて蕪村崇拜者となつたことは、その漸次性の中斷・飛躍をなして反對物へ轉化の過程を示すものであつた。

「同じやうな心境變化を彼は此年の「我が俳句」に於ても語つてゐる。

——物を空中に釣つて之を强く右に向つて振れば、其物必ず左に向つて亦强く振れ戻るべし。而して左右に振ること數次、漸く平を得て本の位置に復す。我の一時西洋の事物を尊崇したるや、其反動は終に西洋を輕侮し、日本の事物をのみ尊崇するに至り、其結果は美術文學の上にも及べり。頓て年を經るに從ひ、美術文學の嗜好には邦土古今の區別消滅し、只々美不美の二」

あるのみとはなれりしより、油畫なるがために卑しからず、日本畫なるがために高からず、横文字の文學なるがために善からず、堅文字なるがため惡からず感じたり。我の纖巧を捨てゝ雄壯に傾き、空想を捨てゝ寫實に傾けるが如き、一時は雄壯の一方に趨り、寫實の一方に趨るを免れずとはいへども、稍時を經るに從ひ兩者自ら平均して、一句の中に兩者の調和を見る事もあり、然らざるも兩種の句は相併立して毫も相戻らざるに至る——

この彼の言葉の限りでは誤つてゐるとは思はれないが、要は彼の「西洋の事物を尊崇」した其程度にある。彼は少時「西洋」の自由民權に熱中したやうだつたが、それも「天コククワイを現はさんとす」程度で制限的な國會開設に滿足すべきほどのものであつたし、洋畫の影響による寫生といふのも極めて不徹底なものであつた。しかもそれさへ幾何ならずしてかゝる反動を招來せねばならなくなつたのである。

彼が蕪村の句の何に感じたかといふことは、彼の口から直接に聽くことは出來ないが、彼と鳴雪・虚子・碧梧桐等でなした蕪村の句の輪講が間接にそれを語つてゐる。そこではもはや寫生は「寫生らしく」作ることに解されてをり、それに反して「配合」といふことが强調され、唯美主義に對して彼らの一門が陶醉的境地にさへ陷つてゐる。例へば「鶯の日枝をうしろに高音哉」について鳴雪は、「——比枝といふ大きい山とその山を後ろにして高音を出して氣を張つて啼いてゐる小さい鶯と大小の掛合はせの一つの俳諧手段である。實地の景色も善く現はされてゐる」と云ひ、「公達に狐化けたり宵の春」で子規は、「公達は貴公子の事で高位高官の人の息子、それに狐が化けて宵の春といふので、矢張なまめいた春の鹽梅を見せ」た浪漫的な手段を稱揚し、「山蟻のあからさまなり白牡丹」で碧梧桐は、「山蟻の勢の强い所、卽恐ろしいといふやうな感じが牡丹によく調和」すると調和的美を認め、「白梅や墨芳しき鴻鸕館」では子規が鴻鸕館の說明をなしたのち、「此句も支那趣味がある。硯に墨の磨つてあるその薫しき匂ひと梅の匂ひとが掛け合はしてあるので、潔い新しいやうな一種の趣をいつたものであらう。白梅と墨との色の配合もある、それも潔い感じだ。」などとその取合手法に感じ、「卯の花のこぼるゝ蕗の廣葉哉」に鳴雪は、「卯の花の白いのと、蕗の青いのとで、そのこぼれて居る花がはつきりと見える、色の配合もわるくない」などと云つてゐる。配合・取合せ・空想的な句に彼らがどういふ考へをもつてゐたかゞわかる。

かゝる中に在つて子規はなほ理論としての寫生を說いてをり、三十二—三十三年の「隨問隨答」で寫生の方法を質問されたに對して

——寫生に行きたらばそこらにある事物、大小遠近盡く詠み込むの覺期なかるべからず——大

きな景色に持て餘さばうつ向いて足もとを見るべし。足もとに萠ゆる草、咲く花を一つ一つに詠まば十句や二十句は立處に出來るわけなり。蒲公英あらば蒲公英を詠め、嫁菜あらば嫁菜を詠め、麥畠あらば青麥を詠め。豆の花咲きをらば豆の花を詠め。畑打つ人を見つけたら畑打を詠め。芽を吹く樹を見つけたら木の芽を詠め。霞んで居たら霞を詠め。うらゝかな天氣であつたらうらゝかやとやるべし。日永、長閑、暮春、夏近、桃花、楊柳、摘草、踏青、燕、孕雀、材料は捨てる程にぶらついて居るなり——

などと云つてゐるが、材料だけが句になるわけはなく、「捨てる程ぶらついて居る」材料も彼自身の行詰りの前には何にもならなかつた。

——僕ハ此頃非常ニ苦吟スルヤウニナツタ、句合ノ十句ヲ考ヘルノニ三日半カヽツタ、今日ナドモ一句ノタメニ朝半日費シタ、ソレデドンナ名句ガ出來タノカト思フトイヤハヤオ話ニモナランノデ、ドーシテモ實景ニ遠ザカツテハダメデス（註9）

だが實景に遠ざかつて句が出來なくなつたのは形式の束縛があるからで、もしそれが幾分なりとも自由であつたならもう少し壽命を保つことが出來たであらうことは、此時代にも彼は短歌では可なり寫實的・印象的な作品を作つてゐるので、全く俳句といふ詩型の窮屈さが行詰りに至らしめたものであることがわかる。もちろん此行詰りは彼の意識に上つた三十一年に初まつてゐるのではなく、ずつとそれ以前より漸進的な、殆んど慢性的なものであつたことは、彼の作品によつて證せられる。

汽車道の一筋長し冬木立（二十五年）
汽車道の一段高き冬田かな（二十八年）
汽車道に鳩の下りゐる枯野かな（二十九年）
冬川の茶屑喙む家鴨かな（二十七年）
冬川や家鴨四五羽に足らぬ水（二十九年）
水鳥や茶屑に連れて二間程（同　）
汐落ちて氷の高き渚かな（二十九年）
上げ汐の氷にのぼる夜明かな（同　）
枯蘆に氷をのこす夜汐かな　苔　翠）
冬枯や巡査に吠ゆる里の犬（二十六年）
唐人を吠ゆる犬あり桃の村（二十九年）

（商人を吠ゆる犬あり桃の花　蕪村）

霜枯や狂女に吠ゆる村の犬（三十一年）

のどかさや千住曲れば野が見ゆる（二十九年）

のどかさや障子あくれば野が見ゆる（三十一年）

曉や白帆すぎゆく蚊帳の外（二十八年）

のどかさや白帆すぎゆく垣の外（三十年）

鱗散る雜魚場のあとや夏の月（二十五年）

砂濱に雜魚うちあけて月涼し（三十年）

棚經や小僧面白さうに讀む（二十八年）

朝寒や小僧ほがらかに經を讀む（二十九年）

狼の糞見てさむし白根越（二十九年）

狼に逢はで越えけり冬の山（同　）

行春や女のせたるいくさ船（二十九年）

春風や嫁をのせたる飾り馬（三十二年）

芽狩や鳥鳴いて女淋しがる（二十六年）

一むれは女ばかりの芽狩（二十九年）

芽狩山淺くいくちばかりなり（二十七年）

芽狩の歸らんとする女かな（三十年）

熊手持つ女案内す菌狩（同　）

たゞに類句の堂々めぐりを演じてゐたばかりでなく、故人の句と等類になつてゐるものも尠くなく、曾て彼の揭げた「陳を去り新を求むる」精神はもはや見らるべくもなくなつた。

少年行

1 春雨や蓑の下なる戀衣　几董

春雨や蓑の下より赤い花　子規

2 寂として客の絶間のぼたんかな　蕪村

しんとして牡丹崩るゝ夜中かな　子規

3 女俱して內裏拜まん朧月　蕪村

女連れて春の野ありき日は暮れぬ　子規

4 山蟻のあからさまなり白牡丹　蕪村
　白菊に蟻はひ上る日和かな　子規

5 大雪となりけり闘の閉し時　蕪村
　大雪や闘所にかゝる五六人　子規

6 雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨　芭蕉
　雁さわぐ冬の田面や月もなし　子規

7 霧ながら大きな町に出でにけり　移竹
　樵夫二人だまつて霧にあらはるゝ　子規

8 雪やつむ障子の紙の音更けぬ　太祇
　雪ふるよ障子の穴を見てあれば　子規

これ等の句は等類でもあるが、概して古句より句柄が悪くなつてゐるやうである。即ち1は戀衣といふやうな抽象的なものでなく、赤い花と云つたところに子規の句らしい現實味があるが、それだけ句に働いてゐるところがない。2は故らに蕪村の句と離れるために上五を「しんとして」などしたものであらうが落着かない。座五の「夜中かな」もあまり説明的すぎる。3は古句とは相當違つたところへ赴いてゐるし、今までのやうに古句より劣つてゐるとは思はれないが、やはり模倣の跡は蔽ふべくもない。4も「日和かな」が蛇足である。5、「大雪となりけり」と切つて「闘の閉し時」といふ敍法が景とよく一致してゐるが、子規の句は「大雪や」で切つたゝめ焦點が散漫になつてゐる。6も芭蕉の句は一字一句の懈弛をも見ぬ佳句であるに比して、子規の句は「月もなし」といふ座五で失敗してゐる。7、移竹の句を子規が推稱したことは『仰臥漫錄』の記事で分るが、「だまつて霧を」は人工臭い。但し此句が初期の二十五年のものである點に恕すべきところはある。8も子規の句は太祇に比してあまりに平凡でもあるし、少しも字が働いてゐず、平面描寫の弊を早くもあらはしてゐる。

かくて子規の寫生は初期の純粹なそれより配合的なものになつたことは明らかになつたが、三十二年の「俳句と聲」なる文では、所謂單純な寫生と配合によるそれとを鹿・時鳥の聲、鐘の音等の古句を以て説明し、單純な寫生體が平凡に陷ること、「平凡を避けんとするには事物の配合を爲す。配合に三種あり、聲と配合する者、形と配合する者、事と配合する者云々」とて、實際の作法に亘つてこれを力説してゐるが、そこには句を作るためには手段を擇ばなくなつてゐる彼が見られる。

いづれにしても此時代の俳句における行詰りは蔽ふべくもなかつた。『病床六尺』で彼は或る人の芳野紀行を讀み、その想像によつて芳野の句を十句作つてゐるが、それは寫實的な平凡な句を拾はうとしてゐた時のものとは似ても似つかぬ作品であり、彼が實際に遠いか平凡な句が多からうと云つてゐることが的中してゐる。

六田越えて花に急ぐや一の坂
芳野山第一本の櫻かな
花見えて足踏み鳴らす上り口
花の山藏王權現鎭まりぬ
指すや花の木の間の如意輪寺
案内者の楠語る花見かな
案内者も吾等も濡れて花の雨
南朝の恨を遺す櫻かな
千本が一時に落花する夜あらん
西行庵花も櫻もなかりけり

蓋しこれは、想像によつて事實に違ふまいとすれば勢ひ概念的なものとなり、ありふれた着想しか出來ぬことは明らかであるが、かゝる手段で句を作つてゐるところに實景に飢ゑて焦燥してゐる彼をも見ることが出來るし、また寫生から空想的になつてゐる彼をも見ることが出來る。いふまでもなくこれは寫生といふリアリズムと古典的形式の相叛逆を彌縫せんとするみじめな努力にすぎない。

「かくて晩年の彼は、俳句においては蕪村崇拜者たると同時に、配合唯一主義者となつてゐた。從つてその門流たちも彼と同じく配合的・調和的な句作を唯一の生命とするやうになつてゐた。『病床六尺』に、梅に鶯・竹に雀とともに柳に翡翠といふは陳腐な繪畫の配合であるが、それにも拘らず、美しいといふ感じが強く感ぜられて柳に翡翠十句を作つたと云つて其句を記してゐるが、そこに唯美的になつてゐる彼をも、俳句の配合的創作に焦慮してゐる彼をも見ることができる。

虛子曰、今迄久しく寫生の話も聞くし、配合といふ事も耳にせぬでは無かつたが、此頃話を聽いてゐる内に始めて配合ととといふ事に氣が附いて、寫生の味を解したやうに思はれる。規曰、僕は何年か茶漬を廢してゐるので茶漬に香の物といふ配合を忘れてゐた(註10)——

こゝで配合を說いてゐるのは、其前後の筆致で見てもわかるやうに俳句のことで、俳句は配合でなければならないと云つてゐるのである。さうして配合と稱して全く空想的な句を作つて樂しんでゐることも前に見た通りだが、一方に寫生といふことは他の文章のことにすり換へて說くやうになつてゐることも注意せねばならぬ。三十三年の「敍事文」に「實際の有のまゝを寫すを假に寫實といふ。又寫生ともいふ。」と云ひ、「こゝに云はんとする所は世の中に現はれ來りたる事物（天然界にても人間界にても）を寫して面白き文章を作る法なり」と云つていはゆる寫生文の作り方を說いてをり、『病床六尺』ではそれを一層詳しく說いてゐる。

――寫生といふ事は、畫を畫くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、此の手段によらなくては畫も記事文も全く出來ないといふてもよい位である。これは早くより西洋では、用ゐられてをつた手段であるが、併し昔の寫生は不完全な寫生であつた爲に、此頃は更に進步して一層精密な手段を取るやうになつて居る。然るに日本では昔から寫生といふ事を甚だおろそかに見て居つた爲に、畫の發達を妨げ、又文章も歌も總べての事が皆進步しなかつたのである。それが習慣となつて今日でもまだ寫生の味を知らない人が十中の八九である。畫の上にも詩歌の上にも、理想といふ事を稱へる人が少くないが、それらは寫生の味を知らない人であつて、寫生といふことを非常に淺薄な事として排斥するのであるが、その實、理想の方が餘程淺薄であつて、とても寫生の趣味の變化多きには及ばぬ事である。理想の作が必ず惡いといふわけではないが、普通に理想として顯はれる作には、惡いのが多いといふのが事實である。――之に反して寫生といふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化してゐるだけ其れだけ寫生文寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄のやうに見えても、深く味へば味ふ程變化が多く趣味が多い――

誰でもこの文を讀めば容易くわかるやうに、こゝに彼が說いてゐる寫生はもはや俳句のためのそれではなく、「記事文を書く」「寫生文寫生畫」のためのそれであることは文中に俳句などの語のないことによつて證せられる。「詩歌」とか「歌」とかの語を道伴的に用ゐてはゐるが、前の空想的な句作法と併せ考へて、俳句では寫生は習作の手段位にしか考へてゐなかつたのであらうと思ふ。

右は彼の俳句における唯美的・浪漫的な一面の發展であるが、寫實的なものも全く其病床周圍の寫生のみとなり、身邊雜事のトリヴヰアリズムに陷つてゐた。三十四年の三月左千夫に贈られた鯉三尾を盥に入れて病床の傍らに置き、それを十句俳句にしたのはまだ寫實が外面へ向はうとしてゐた方で、

芍藥の衰へてあり枕許
臥して見る秋海棠の木末かな
病床のうめきに和して秋の蟬
病間あり秋の小庭の記をつくる
我病んで花の句もなき句帖かな
首あげて折々見るや庭の萩

然してその自然を見る眼も初期の科學的であつたに引かへ、虚無的な要素が強くなり、「モルヒネを飲」みつゝ草花の寫生をやることを唯一の「樂しみ」にするやうになつた。この晩年の到達點を從來の史家は子規の俳句の「圓熟時代」となし、「空想的の作の多かつたのが、實感の作が多くなつた」(註11)となし、晩年の寫生文のための寫生の奬勵を、俳句・短歌の行詰りよりの脱出路と見ずに、「寫生は實に彼の心の隅々まで行盡し」(註12)たとなす如き、全く皮相の見解にすぎないが、これはこの史家達の立場を明瞭にするもので、定型を止揚した人に在つては、例へば碧梧桐氏の如き子規の門流であつても後にはそれを正しく批判し得てゐるし、井泉水氏の如きも其モルヒネを飲みつゝの草花の寫生を、「一種の反動藝術」だ(註13)と指摘し得てゐるのは、定型を固執する人々に比して當時に在つての進歩性が見られる。

要するに子規の晩年の俳句は、一、配合　二、空想　三、身邊雜事的描寫がそのすべてとなつてをり、その作品は多く固定化し、陳腐・類型の跡蔽ふべくもないが、其實例は先に示した彼の句によつて一斑がわかると思ふ。これは病苦に呻吟しつゝあつた彼としては蓋しやむをえざる到達點であつたらう。我々も彼の病苦に同情を禁じえず、その到達點を是非なきものとは思ふが、多くの史家・子規研究家が、その彼の苦悶を見ずして、この唯美主義への轉落を何か意義あるものゝ如く論じてゐるに對して、我々は其誤謬と出鱈目な見解を指摘せずにはゐられないものである。

註1　「寫生・寫實」
2　『獺祭書屋俳句帖抄』序
3　同上
4　桑山玉洲著、岩波文庫『論畫四種』所收
5　同
6　「春泥句集序」
7　關衛氏『日本繪畫史』

8　井手逸郎氏『明治大正俳句史』
9　三十一年十一月二十四日附佐藤紅綠氏宛書簡
10　『墨汁一滴』
11　藤川忠治氏『正岡子規』
12　志田義秀氏「現代俳句」（岩波日本文學所收）
13　井泉水氏「子規の寫生主義」（改造社子規全集附錄）

三、理智性の排擊

子規の俳論・歌論を讀むと、理窟といふ文字の多いことに誰でも氣附くであらう。理窟といふのは彼が月並排擊に用ゐたもので、その俳句・短歌の理論の重要な部分を占めるものであり、作品における理窟的な要素を發見したのは、俳句における宗匠達のものに於てゞあつたことは今更いふまでもあるまい。

月並俳句に於ては感情より理智的な要素が多くなつてゐる。これは膚淺な民衆教化的な縲絏の下に俳句が甘んじてゐた餘波であるが、幕末の勸懲文學の影響をもうけて、淺薄な封建的道義觀念を盛つてゐたもので、それは子規出現以前の俳壇の項で述べたやうなものであつたが、子規は身分制度から解放された新時代のインテリゲントとして、何よりもその道義的な面を打破し、個々人の感覺を以て事物に接し、その感激を直接に俳句に盛らうと意圖したもので、そのため彼は理智と感情を機械的に分離し、理智を卑しめ感情を尊び、それがやゝ極端にまで走らざるを得なかつた。

彼におけるいはゆる理窟とは抑もどういふことであらうか？　私の解するところでは、彼の排斥した理窟とは內容におけると表現におけるとの二つに分けられるやうである。內容における理窟とはたとへば

人之性善　沾德

折つて後もらふ聲あり垣の梅　春澄

の如きであり、これについて彼は「意匠卑俗にして取るに足らず」「此句の價値をいはゞ一文にもあたらず」（註1）といひ、或は

つゝしめや火燵にて手のさはること

について、「理窟ばかり並べたるは無趣味の極度なり。ある人はこれを教訓の句として珍重すれど

も教訓といふは理窟の内なれば文學にては取らず云々」（註2）といへるが如きそれである。これらの句は内容の月並であるから、どう表現してもその道義臭を蔽ふことは出來ない。これに反して表現上の月並は、言葉の上だけの理智的なものであるから、その部分を直せば月並を脱することが出來るものだ。それは例へば

懐の紙貰はるゝ堇かな

の如きがそれで、彼の言葉を以て云へば、

――此句などこそ彼俗俳諧の俗の極に達したるものなれ、此意義は人とつれだちて郊外をありくにつれの人路端の堇一もと二もとを掘り取り内へ持ち歸らんとするにそを包むべき紙を乞ひければ吾紙をやりたりといふ事にてもやあらん。――さりながら堇を紙に包んで取つて歸るといふ事を直敍すれば猶可なり。それをさうも言はずして己を傍觀の地位に置き、懐紙をねだられたりとは何等の殺風景ぞ。此趣向にて美と感ずべき處は堇のあはれなるとそれを愛する人の心のやさしきとに在り、然るに此句の作法は重みを兩者に歸せずして却つて落ちを傍觀者たる自己に取らんとす。此輩到底美も文學も解したものに非ず。作者は古人に『鼻紙の間に萎む堇かな……園女』といふ名句あるを知るや知らずや。（註3）

彼のこゝでの解釋は句の鋭い分析によつて美學的なものに達してをり、月並俳句を剔抉してありますところはなく、かゝる科學的な研究によつてゐる限り、月並宗匠が彼の矢面に立つべくもなかつたことがわかるが、彼の說くところが自然に對する感情の直敍であつたこともはつきりする。また

名月や裏門からも人の來る

といふ句に對して、「『も』の一字はたしかに理窟を含み此の一字のために全句を殺したり。『も』といふは二個以上の事物を對照するものにして此句の面には一個だけ現はれたり。他の一個は此裏面にあるものにして卽ち『表門からも人が來た』といふ事實を現はせしものとなるべし。而して其事實は一目に見得べからざる場處と稍々長き時間とを要するを以て人は智識の上に事實を納得するに止まり感情の上に趣味を感ずること無し。蓋し長時間の記憶と二ケ處以上にある事物とを同時に心頭に呼び來るは多量の智識を要すればなり。若し單に「明月の夜人裏門より來る」といふ其一場の光景を言はゞ一の佳句となるべし。今試みに「裏門を叩く人あり今日の月」（註4）と改めん云々」と云つてゐるが、これを彼の先に擧げた鳴雪との論爭「地圖的觀念と繪畫的觀念」と對比すれば、彼の理窟の排除は、彼の寫生・ありのまゝが一首の範圍を自己の一眸の視野に限

り、一幅の繪畫を見る如くでなければならぬといふ主張に基いてをり、聊かも知識を働かすことなく感情のみを以て對さうとしたものであることがわかるが、以上の句の理解の可否は別として、藝術における同時表現を排斥したところは、寫生といふことを極く狹く解してをり、彼の「空想によりて俳句を得んとするは、兀坐瞑目して天上の理想界を描き出す」といふことゝも撞着するが、月並に對する關係上、理智の排擊にのみ急なるあまり、斯ういはねばならなかつたのであらう。

――理窟は理窟にして文學に非ず。されども理窟の上に文學の皮を被せて十七字の理窟をものするも亦文學の應用なれば時に之を試むも善し（註5）――

といひ、或は

しばらくは花の上なる月夜かな　芭蕉

に對して、「實景を寫さずして理想（空想）に趨りたるため深き味なし」（註6）といへるが如き、印象第一主義に傾いてゐる彼を見ることができる。その結果諷喩的なものを非文學となし丈草の

啄木鳥の枯木探すや花の中
歸り來る魚のすみかや崩れ簗

などを排斥したのであるが、諷喩も象徴の一種であつて、もし思想の浸出を非文學といふならば文學の殆んどを非文學の名の下に排擊しなければならなくなるであらう。素よりあまり露骨な諷喩は厭ふべきも、丈草の作品には一種の象徴に達してゐるものもあるのだが、このことは子規の理解するところとならなかつた。それは月並俳句の左のやうなものに對する餘勢と見るべきであらう。

1　二日灸弟に顔を見られけり
2　抱きあげて孫にそゝがす甘茶かな
3　薄物に風の離れぬ衣桁かな

即ち1は裏面に「兄が顔をしかめて居る」といふ事實が含まれ居れり、しかも其事實は感情的に聯想せらるゝに非ずして推理的に推測せらるゝ者云々」といひ、2は「抱いてゐる兒がそゝぐ」と表面よりいはゞ何の理窟も無きを、「そゝがす」と他より使令するやういひし故いやみに墮ちたものとなし、3は「表面より「絶えず風吹く」と申候へば何のいやみも無きを、裏面より「離れぬ」といひ且つ風を擬人的にしたる處大にいやみあり」（註7）など評してゐる。これは月並の典型的なもので、この種の句に對する彼の評價は相當な冴えを見せてゐる。しかし其餘勢は先に

述べたやうに理智と感情を機械的に分離させる傾向を生じたのだが、元來藝術は感情と理智によつて成立つてをり、理智と感情がいづれにも偏らず調和を保つところに佳作が生れる。もちろん子規もこの意味で「理窟の上に文學の皮を被せて云々」など云つてゐるのであらうことは肯定できるが、その理解が意識的でなく、誤解され易い點を多くもつてゐることは否まれないのみならず、後にはその唯美主義への突入と共に理智を卑しめて感情のみを高調し、三十二年の「戀」なる文で八百屋お七のことを書いてゐるが、お七の熱烈な感情を讃へ、感情的お七は理窟的お七とは別であり、善惡の裁斷の外に立つてをり、前非を悔いてなどゐなかつたらうと云つてゐる如き、たとへそれが眞面目なものでないにしても、彼の「美は絶對なり――佳人を見てあゝ綺麗と思ふ時に何の理想があるべき」と云つてゐるのや、「山水花鳥の美を感ずる人は貧苦困頓の間に在りても富貴榮華の樂み」があると說き、モルヒネを飲んで草花の寫生をすることを樂しむ如き彼の心境と併せ考へて、その理窟排擊がどの方面へ發達して行つたかゞわかる。

かくて彼のいはゆる排理窟は、短歌においては譬喩・詠史・謎を理窟として排し、一方唯美主義への躍進と共に、一層の發展をしてゐるのであるが、それは短歌の項で述べることにしよう。

註1　『俳諧大要』

2　「俳句問答」
3　同上
4　同上
5　『俳諧大要』
6　同上
7　三十二年末から三十三年へかけてホトトギスに發表された消息

四、季　題　觀

子規の季題觀は必然的に自然觀に根をもつものであり、したがつて此の項は第一章の三の子規の自然觀に續くものであつて、こゝに分けて論ずるのは一に書物としての體裁によるものと御承知ありたい。

順序として我邦の文學に季感が加はつたことを聊か回顧して見たい。萬葉時代の詩人は可なり自然に直接して歌を詠んでゐたやうであつて、例へば

春過ぎて春來るらし朝日さす春日の山に霞たなびく

一つ松いく代か經ぬる吹く風の聲の清めるは年深みかも

の如きがそれで、これは當時の邦人の生活が自然に直接してゐたことの反映と見られるが、稀れには佛教の思想などの影響をうけ、無常觀を表白してゐるのや戀愛を自然に托して詠つてゐるものもあるが、大體において素朴な、赤裸々な自然觀をあらはしてゐると云つてよい。したがつてその感受方も自然であつて、或一定の固定した季感といふやうなものは見られない。平安朝になつて古今集の頃になると、季に關する關心の漸く深くなつて來たことが認められ、春夏秋冬の部門が設けられ、それによつて分類されてゐるが、その分け方は後の俳句の季題のやうなものではなく、月の歌も特に秋の月とするか他の季物を配したものだけが秋の部に入れられ、たゞの月は皆雜の部に入れられてある。さういふわけで古今集時代には特殊な季感をもたしめることのなかつたのは、秋の歌に悲しいとか淋しいとかの言葉が添へられてあることによつて推察できる。これは秋だから淋しい・悲しいといふ既成概念がまだ生じてゐなかつたゝめ、特に淋しい・悲しいといふ言葉を添へなければならなかつたものであらう。しかし新古今になるとずつと變つて來、歌が客觀的になつて來て、

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里　俊成

の如く、特に淋しい・悲しいと云はずしてこれだけで淋しい秋を感ぜしめるやうになつてゐる。これは古今ごろから禪などによる幽玄といふことが唱へられ、言外餘情を尊ぶことになつたゝめ、敍法が客觀的になつて來、したがつてそれが季の固定感をも必要とされて來たのではあるまいかと思はれる。

禪の影響が和歌より一層濃く、且つ禪の死生觀を堅持してゐた武士に弄ばれた連歌に、季感が和歌より濃厚なのは當然であつた。隨つてそれから派生した俳諧が季を重んじ、それが普及されるにつれて普遍化した季感をもつて來、それが作品に干渉するやうになるのも當然であつた。

『去來抄』には次のやうな記事がある。

夕暮は鐘をちからや寺の秋　風國

此の句、初めは、晩鐘の淋しからぬといふ句なり、句は忘れたり。風國曰。此頃山寺にて晩鐘を聞くに、曾て淋しからず、依て作す。去來曰。是れ殺風景なり。山寺といひ、秋のゆふべといひ、晩鐘といひ、寂しき事の頂上なり。然るを一旦遊興騒動のうちに聞く、淋しからずといふは、一己の私なり。風國曰。此の時此の情あらば、いかに情ありとも作すまじきや。去來曰。若し情あらば、斯くの如くにも作せんかと今の句に直せり——

この言葉には季の固定感が、明らかに個人の感情にまで干渉しはじめてゐるのを知ることが出來るが、かゝる他から强ひられた感情をそのまゝ甘受してゐたところに、封建制下における人格の隷從と自我の喪失を見ずにはゐられない。

明治維新は一應封建的身分制度を打破し、四民平等の社會を新たに編成した。曲りなりにも個人の自由を確保した人々は、觀念の上においても、他から强ひられる何ものも存在しない譯である。しかしそれは封建制度のまゝに時代の推移を感受しなかつた宗匠輩には風馬牛であつた。なぜなら彼らは「紀元以來の太陽曆と稱せられ、詞人騷客忽ち節序の的候を失す」（手洋燈序の一節）（註1）と云ふやうに、自然より季題を重んじ、知十が云つたやうに「――自然を措き、ひたすら題詠と形式のみにすがるの俳諧者流には、これ實に最大問題なりしなるべし。」（註2）であつたからである。やはり新時代の意識は新時代の頭腦に宿らねばならなかつた。ではこの新時代人たる子規は、かゝる季感の强要に對していかに鬪ひ、いかにそれを止揚したか？

子規の季題觀は大體事實に卽かうとするものであつて、例へば

――俳諧の四季は卽ち曆の四季に因るなり。曆に立春（二月初）、立夏（五月初）、立秋（八月初）、立冬（十一月初）といふことあり。其立春より立夏までを春とし、立夏より立秋迄を夏とし、立秋より立冬迄を秋とし、立冬より立春までを冬とす。故に太陽曆の新年は冬の中なり。然れども冬なるが爲に新年の句を詠まれずなどいふことはあらず、但し季候に關しては多少感情の上に相違あるべし（註3）――

大體の基準を右のやうに定めて、細部に亘つてそれを卽實的ならしめようとした。

――四季の題目にて花木、花草、木實、草實等は其花實の最多き時を以て季と爲すべし。藤花、牡丹は春晩夏初を以て開く故に春晩夏初を以て季と爲すべし。必ずしも藤を春とし牡丹を夏とするの要なし。梨、西瓜等亦必ずしも秋季に屬せずして可なり（註4）――

或は「――立冬一日後敢て秋風と詠ずべからず、立夏一日後敢て春月と詠ずべからず」（註5）といふやうな態度を執つてゐた。例へば盛岡の人が盛岡は梅も櫻も同時に咲き、櫻散らざるに子規啼き卯の花の中に桃の花咲き菜の花も薔薇も堇も一時に綻ぶので、季節の混同を來し春夏混雜の句が出來るが、それでも差支へなきやと質問したに對し、「少しも差支へなし。盛岡の人は盛岡の實景を詠むが第一なり。」（註6）と答へてゐるが如き、その態度を知るに足るものがある。

もちろん季物の知的分類に、彼の執つた此の方法は正しいものであつたらう。しかしその季物による個々人の感情をどう整理するかは最も至難の業に屬してゐる。だから蜻蛉は秋季に入れら

れてあるが實際は夏であり、たゞ赤蜻蛉だけが秋季であるといふ質問に對し、「季の定めには多少の無理あり。蜻蛉に夏季の感强からば夏季に詠みて何の惡き事かあらん。されど古來久しく秋と定め來りし者なれば秋として置くも便利なる事あり」（註7）といふやうなところを彷徨せねばならなかつた。個人の季感といふやうなものは決して一定してゐるものではなく、特殊の經驗的、もしくは他から注入せられたものと私は考へてゐる。經驗的といふのは古詩古歌による傳統的な感情で、他からの注入といふことは歳時記やうのものから强要される感情である。たとへば秋の彼岸ごろと春の彼岸ごろはほゞ同じ溫度であることゝ思はれるが、その時それを直感する場合秋でありながら春のやうなこともある、春でありながら秋ではないかと考へられることもある。その時今日は何月だつた、秋もしくは春だつたと考へるのは知性的な判斷であつて感情ではない。又同じやうな場合でも傍に蜻蛉が飛んでゐるとか燕が飛んでゐるとかすると、それが秋もしくは春だなと感ずることが出來る。蜻蛉は春飛ばず燕は秋飛ばないことを經驗的に知つてゐるからで、知性が働いてゐるからである。これは今日に初まつたことではなく、萬葉集卷一に見える額田王の春山と秋山の判歌は、別ちがたきものを鳥が鳴くとか、花が咲くとか、木の葉が紅葉するとかによつて判斷しようとしたもので、もしそこに鳥・花・紅葉のやうなものがなかつたら、それを分けることは困難であつたらうと思はれる。子規は太陽曆を用ゐて極めて常識的に分類し、以て疑ふまいとしてゐるが、立春とか立秋とかいふものはその境界を示したもので、立春一日二日前にも春らしい日もあり、立秋後にも夏らしい日もある。だから「立冬一日後敢て秋風と詠ずべからず、立夏一日後敢て春月と詠ずべからず」とて、秋風とか春月とかの如きものに就いていふのは誤りでないにしても、細目に亘つて固定させることは可なり困難である。殊に季候の變化激しき地方、例へば東北の如き梅も櫻も卯の花も同時に咲く地方に於ては、季題に卽けば事實を離れ、事實に卽けば季題の掟に叛くことになる。子規は盛岡の人に敎へて、盛岡の人は盛岡の眞實を詠めと云つてゐるが、自身は不自然な課題制度を踏襲して何ら懷疑をもたなかつたので、そこが甚だ不徹底であつたといつても差支へないであらう。俳句が季題に對して懷疑をもつやうになつたのはずつと遲く、新傾向・自由律の時代である。

私見によれば季題趣味は調和趣味であつて、季題に調和するあれこれの素材を巧みに配合して句を作り出す源泉である。この季題の無批判的な認容は子規の寫生が配合主義に轉落したことを示してゐるが、彼ら一派がいかに配合を重んじたかは、配合主義の蕪村の句に對してなした既出の輪講によつてわかるが、季題との調和を重視してゐることは

玉人（タマヤリ）の座右にひらく椿かな　蕪村

の句に對して竹村黄塔が玉人を玉を磨く職人なることを説明し、それが「――いくらか高潔な感じのする上に、傍らに置いてある椿の花が玉に似て咲いて居る卽ち玉といふものゝ趣味に適するやう配合してある云々」とあるのを初め、其例は決して乏しくないが、子規の作品に於ても

だんだらのかつぎに逢ひぬ朧月　子規

などの句は、季題である朧月から呼び起した調和的な感情であり、そこに子規晩年の到達點が見られると思ふ。

季題なるものが過去において俳人に自然を見ることを教へたことは確かであるが、時代の推移と俳句普及による俳人の增加、したがつて俳句生産の量的增加は、季題自身も反對物へ轉化せしめ詩想表現の桎梏たるに至る。恰も人を助ける藥が分量を過すと毒藥に變ずるのと同じことである。そして季題は、それ以後今日に至るまでに逆に俳句の內容を掣肘するものとして成長してゐる。今日の俳人たちがそれによつて俳句を「花鳥風月」と限定してゐる如きがそれである。それはむろん俳句に携はる人々の社會的地位に基づく社會的經濟的關係による自我の喪失と引離して考へられず、ホトトギス派の論客山口誓子が「われわれは、たとへ宿命主義の名の下に呼ばれようとも、俳句は「十七字」と「季物」とを離れては全く存在し得ない。」（註8）と云つてゐる如き、さういふ「宿命」の下に俳句によつてのみ僅に自由に振舞はうとしてゐる彼等の感情を明らかにしてゐるが、その第一歩は實に子規の季題に對する未解決なものから發してゐることを思はずにはゐられない。

もとより子規が季題について當初は幾分自由的に見ようとした心持は我々にもわかる。たとへば二十七年の「俳諧一口話」では雜の句でも俳句でないことはないといひ、たゞ聯感を强くするためには季を詠み込まねばならないと云つてゐるが、『俳諧大要』では「俳句の題（季題のこと）は其題を主としてものするを要せず、――時々此題を輕く詠みこみて他へそらすことも忘るべからず」とて左のやうな句を擧げてゐる。

初めて東武へ下る時

頭巾取り襟つくろふや富士の晴れ　湖春

さうして「此の如くならざれば盡く陳腐に流れて而も變化すべき區域狹くなるべし。」と說いてゐるが、彼の改良主義的な態度を明らかにしてゐる。しかし季題に對して改良主義よりもそれを傳統的な面で見ようとする傾向が强く、したがつて其季題感による季題の上に打ち立てられた彼

の作品は、一貫したものをもつてゐない憾みがある。例を擧げて見ると曾て井泉水氏が指摘したやうに

夜越して麓に近き蛙かな

は春季よりも夏の季感が強いが、それは蛙といふ春の季感よりも、山を夜越すといふことが夏らしいからである。この句では二つのものが調和せず分離してゐる。また子規の季題の傳統的踏襲も蔽ふべくもなく

汽車の窓に顔出す人や瀨田の秋

といふやうな句には、季感が現はれてゐないのを無理に秋季にした痕跡が歴然としてゐる。彼は月並俳句に對してこそ果敢な闘爭をしたが、其封建的遺産たる諸制約に對しては、闘爭はもちろんのこと、それに對する苦惱などは少しも見られない。眞に季題について眞劍に惱んだのは後の碧梧桐である。しかしそれには、我邦の資本主義の飛躍的な發展による個人の覺醒が其基礎となつてゐたことはいふまでもない。

註1　岡野知十『俳諧風聞記』
　2　同上
　3　「俳句問答」
　4　『俳諧大要』
　5　同上
　6　「隨問隨答」
　7　同上
　8　「ホトトギスの人々とその主張」（改造社俳句講座現代結社篇）

第四章　短歌に於ける子規の革新

一、革新の經過

子規が短歌に關心をもつたのは俳句よりも少し早いらしく、明治十五年七月まだ松山に在つた頃、既に上京してゐた三並良に宛た書簡に

隅田てふ堤の櫻さけるころ花の錦をきてかへるらん

なるものが見えてゐる。これが最も早い頃のもので、現今に殘されたもの〻一つであるかも知れない。何か書くことがすきで、屢々雜誌やうのものを發行したりしてゐた彼が、その娯樂のために恰好なものとして日本古來の詩である短歌を見てゐたことはわかると思ふ。

明治十八年上京してゐた彼は、歸省して井手眞棹に和歌を問ふたことがあるさうであるが、この頃のものには見るべきものがなく、全集の竹の里歌には、先に擧げた十五年の歌から二十一年に飛んでゐるが、それには

五月雨に四方のながめもなかりけり堤をゆする隅田の川波

名にしおふすみ田の川の川波のにごりて黑しさみだれの雨

などいふやうな歌が數多く殘されてをり、同年の「川の秋げしき」といふ短文にも

きのふ迄すゞしといひしあしの葉の風身にしみて秋や立らむ

今はたゞ名にしあひけり都鳥いざこと問はんそのかみのこと

などといふ歌が書き記されてある。むろんこれらの作品には後年の革新に至る何ものをも示してゐない。其中に『無何有洲七艸集』女郎花卷に

夕ぐれにいぼりを立ち出て見れば川のけしきいとをかしかりければ

家々にふすぶる蚊遣なびきあひ墨田の川に夕けぶりたつ

などいへるのがわづかに寫生體であるのや、

秋葉神社にまうでてよめる

夏ながら秋葉の杜の下かげにふきくる風ぞ涼しかりける

など、「夏ながら秋葉」といふやうな言葉の遊戯に耽つてゐるものがあることをも見逃すことができない。

二十四年ごろには俳句分類の仕事をしたり、小說を書いたりして歌の方もお留守になつてゐた

らしい。二十五年の三月から五月へかけて日本新聞へ「文界八つあたり」を發表したが、その和歌に關する項に和歌の振はないのを指摘し、それは眞成詩人がゐないためで、今日の歌人はどういふ人々であるかといふに、國學者・神官・公卿・貴女・女學生・少し文字ある才子・高位高官を得たる新紳士・我歌を書籍雜誌の中に印刷して見たき少年等であるから、振はないのも尤もで、和歌といふものゝ價値を恢復するには、愚癡なる國學者と野心ある名利家等の手より引離し、眞成詩人の手に渡さねばならないと論じてゐるが、彼がこゝで所謂歌人達の社會的位置を見、なかんづく高位高官を得た新紳士とて、社會の新編成によつて上層に上つた人々を數へてゐるのは興味あることであるが、この頃の彼は大體古今集崇拜に傾いてをり、

海原は見渡す限り山もなしいづこをさして白帆ゆくらん

玉くしげ箱根の空を打ち見ればふたごの山に雲たちのぼる

といふやうな古今調の歌を作つてゐた。

二十六年の夏、彼は「はてしらずの記」の旅にのぼつたが、その途次松島附近で鮎貝槐園に會し、槐園は國詩の革新せられねばならぬことを說いたが、子規は自分は和歌のことは研究してゐないからよく解つてゐないが、この頃では古今集が面白いと思つてゐると語つた。その時與謝野鐵幹も槐園と共に旅行してゐたのだが、子規は槐園にだけ會つたのらしい。けれどもこの時槐園を通じて萬葉の學ぶべきを說かれたのである。果然この年の十一月から翌二十七年一月にかけて發表された「芭蕉雜談」には美術文學中最高尙なる種類に屬して、しかも日本文學中最之を缺く者は雄渾豪壯といふ一要素で、和歌には萬葉集以前多少の雄壯なる者なくはないが、古今集以後（實朝一人を除いては）毫も之を見る事を得ず――と云つて、芭蕉の句の豪壯なるを賞してゐるが、こゝに初めて萬葉云々の言葉が現はれ、前年の「文界八つあたり」と異つたものを彼が發見してゐることが窺知されるが、更に二十七年七月日本に發表の「文學漫言」にはそれが一層意識的になり

萬葉集には奈良朝の歌多し。當時の人は質朴にして特別に優美なる歌を詠み出でんと工夫するにはあらず、只々思ふ所感ずる所を直に歌となしたる者と思しく、何れの歌も眞摯質朴一點の俗氣を帶びず。固より平々凡々の歌多かれども時には雄壯勁健なる者あり、語淡にして旨遠き者あり、今日に至りて猶絕調と言はるゝ者少からず――

とそれを讃へ、一方古今集を貶して

――試みに古今集を繙きて見よ。開卷第一の歌

年の内に春は來にけり一年を去年とやいはんことしとやいはん

と言へるは單に言葉の上の洒落にして何等の趣味をも含まざるにあらずや――

と云つてゐるが、それと同時に定家を評して「言語の洒落を已め稍々心を趣味に傾けしかども、是れ亦言語に拘泥する所ありて終に重きを趣味に置くこと能はざりき」といひ、其間に在つて萬葉調を學んだ實朝を認め、秀歌を數多く詠み出でたが、天下誰一人これに倣ふものなく、實朝一人で絶えたのは眞成の歌人が居なかつたからだと斷じてゐる。やうやく萬葉への開眼をなしつゝ在つた彼をこゝに見ることができる。

然しながらこの頃はまだ俳句の仕事に忙しくて和歌の方へは手が廻らなかつたらしく、二十九年鐵幹が『東西南北』を著した時、彼はそれに序して「余も亦、破れたる鐘を擊ち、錆びたる長刀を揮うて舞はんとする者、只々其力足らずして、空しく鐵幹に先鞭をつけられたるを恨む」と云つてゐるが、これは文飾ばかりではないらしく、此時代の彼の多忙な貌を示してゐると思はれる。

もちろん其間にも彼は歌を作つてゐる。今二十六年から三十年までの作品を少し拾つて見ようならば

草しげみなすのゝ原の道たえてなでしこ咲けり人も通はず　（以上二十六年）

草枕夢路かさねて最上川ゆくへもしらず秋立ちにけり

大海原八重の潮路のあとたえて雲井にかすむもろこしの船　（以上二十七年）

紫の一本やいづれ武藏野の草むれがくれ堇咲くなり

見わたせばもろこしかけて舟もなし霞につゞく春の海原

むさし野をわれ行き居れば上つ毛や赤城の山に雪ふれる見ゆ　（以上二十九年）

愚庵和尚より其庭になりたる柿なりとて十五ばかり　おくられけるに

御佛にそなへし柿ののこれるを我にぞたびし十まりいつゝ

籠にもりて柿おくりきぬ故里の高尾の楓色づきにけん

柿の實のあまきもありぬ柿の實の澁きもありぬ澁きぞうまき　（以上三十年）

大體斯ういふ經過を辿り、次第に萬葉調に接近して來てゐるが、しかし大體において模倣時代であつたことは蔽ひがたく、二十七年の「もろこしの船」には蕪村の「高麗船のよらですぎゆく霞かな」に模した痕跡があり、二十九年の「むさし野」の吟には實朝の「箱根路」に倣うた跡が

歴然たるものがあつて、彼のこの頃の發展を明らかにしてゐるが、彼自身この種のものに滿足すべき筈はむろん無く、そこに何か飛躍の機を覗ひつゝあるやうな野心滿々たる彼の微笑が感ぜられる。

「彼の歌論が歌論として飛躍の機を與へられたのは、明治三十一年二月日本に「歌よみに與ふる書」を發表し、つゞいて「百中十首」の作品を公けにしたのに初まつてゐるが、その前年の一月末松謙澄は「文學美術上の意見」を『太陽』誌上に發表し、景樹の流れを汲むと稱する和歌が、懦弱優柔に流れ、和歌を散文化せしめ、俗極卑極の惡韻文に導くことを痛擊した。これに對して鐵幹は一月四・五・六の三日に亘つて讀賣紙上で反駁し、舊派の短歌は博士のいふ通りであるが、新派短歌は決してその類でないことを自分の『天地玄黃』の中の歌を擧げて說いた。これに對して謙澄は「和歌を論じ兼ねて與謝野君に答ふ」なる題下に、同じく讀賣紙上に述べ、これに補正を加へそれに詩歌問答十則其他を附加して『國歌新論』と題して刊行したのである。その中で彼は萬葉集を讃へ、景樹と古今集を貶してゐるが、子規の「歌よみに與ふる書」以下の歌論は、この國歌新論に負ふところがあるやうに思はれる。(註1)殊に次に見る落合直文宛の書簡の「近日歌論沸騰云々」の言葉は此間の消息を明らかにしてゐるやうである。即ち蘆には槐園によつて、また丸山作樂・福本日南・愚庵らに感化された萬葉への關心が、こゝに飛躍の機を與へられたのであるが、彼は此時代まだ萬葉も景樹も直接に讀んでをらず、諸家の理論を通して間接に見てゐたのであるらしいが、とにかく俳句で得た創作經驗と理論を延長し、それを提げて登場したので、彼のこの擧は一に外的な刺戟、即ち『東西南北』以來の鐵幹の活動と、以上の末松謙澄と鐵幹の論爭の上にそれを止揚して自己の說を押立てんとしたもので、そこに後の鐵幹との爭ひをも約束してゐるやうに思はれる。

彼は同年三月十九日附で落合直文に對して書簡を與へてゐる。

拜啓御無音に打過候處愈御淸祥奉賀候小生不相變臥褥のまゝ一歩も動く能はず徒に呻吟罷在候近日歌論沸騰の餘小生も彼是さし出口叩くやうに相成嘸かし御笑ひ種に相成候事と存じ居候尤も歌については前年來しば〳〵打つて出でむとして出づる能はざるの事情有之(先輩と衝突するが大原因と相成申候)そが爲歌といふものは人のも自分のも一切出さゞる方針を相取申候然るに過日來歌論和歌續々あらはれ候につきては愚論拙歌をも並べたく羯南氏に相願候上にて拙歌等掲載の儀を許され漸く數年來の宿志を遂げ申候されば或は言の急激に涉り候もの有之候も畢竟多年腹の中にためおける不平の一時に爆發したるによるものに御座候拙歌に就きては攻

擊四方より至り候へども自ら多少信ずる所有之候上は死を決してやる所存に候猶此事に關して
は御高見も承り度卑見も申述度存候へども病中不任意大略まで申上候――

この書簡は可なり慇懃なもので、彼としては十分下手に出てゐることがわかるが、これを後の直文の歌の批評に比べて餘りに違ふ其態度が怪しまれる位である。この書簡は辭令らしいところがあり、事實はそれ以前鬱屈してゐた野心が堰を切つて迸り出たものと見るべく、「自ら多少信ずる所有之候上は死を決してやる所存」といふところにそれが現はれてゐるが、何が斯くまで彼を驅り立てたかといふことは、むろん不治の病に餘命幾何もないといふ焦燥が與つて大いなるものあるは明らかだが、彼の二十八年紫影に宛ての書簡の「〇がなければ何にもなり不申候、小生はいよ〳〵やけになり文學と討死云々」の言葉によつて明らかな如く、現實の生活において喪失しつゝあるものを文學に求めたと見るのは最も妥當な見解であらう。

かくて「歌よみに與ふる書」以來、彼は十回に渡つて日本に歌論を發表した。それの要旨を摘記すると、歌が萬葉以來實朝以來振はないこと、御歌會派の崇拜する香川景樹は古今集崇拜者でその見識の低きことから、景樹の尊敬する貫之の下らぬ歌よみであること、それに反し實朝は三十に足らぬ齡をもつて死んだにも拘らず、名歌を澤山殘したこと、眞淵は萬葉の尊ぶべきを說いたが、其作品には萬葉調と似ても似つかぬものゝ多いことから初まつて、一轉して現今の歌よみが歌のみ知つて他の文學に無智であつて見識の低きことより、古來の惡歌を貶してよき歌を賞揚し、一貫した史觀を展開してゐる。この十たびに亘つての歌よみに與ふる書は、全く不用意の裡に腹案されたものでなく、相當永い間彼の頭腦で考へられたものらしいことは、中に一回駁文に對する論があるが、其外は文の結構が大體において整つてゐるところでわかるし、またそれが國歌新論から影響をうけてゐるであらうことも肯かれる。少くとも前以て十回ときめ、一日の分量をどの位にして論旨をどう展開さすべきかといふヂャーナリストらしい心構へは在つたと見て然るべきだらうと思ふ。(この論文は幾分の長短はあつても十回ともほゞ同じやうな分量で發表されてゐる。)

以上のやうにして子規はこの論文で史觀を展開すると同時に、趣向・用語の範圍を擴大し、內容においては外國思想もとれと說き、用語においても雅語俗語洋語漢語等必要に應じて用ゐよと云つてゐるが、また和歌の手のつけやうもなき腐敗に、いかでか改良の手だてあるべきといふ人もあるが、「さりながら愚考はいたく異なり、和歌の精神こそ衰へたれ形骸は猶保つべし、今にして精神を入れ替へなば再び健全なる和歌となりて文壇に馳驅するを得べき事を保證致候」(註ヨ)

「生は國歌を破壞し盡すの考にては無之、日本文學の城壁を今少し堅固に致し度、外國の髭づら共が大砲を發たうが地雷火を仕掛けうが、びくとも致さぬ程の城壁に致し度心願有之――」（註3）といふやうな改良主義的態度であつた。これらの言葉には西宮藤朝氏が指摘したやうに、たしかに國粹主義者に得たりと利用される點をもつてゐるやうである。

この時代の彼の作品は三十一年二月二十七日「百中十首」（白雲（飄亭）選）を竹の里人の名で日本に發表し、續いて二十八日同じく「百中十首」（徒然坊（久良伎）選）を、三月一日同じく第三回を某選で發表し、二日同第四回を碧梧桐選で、三日第五回を虚子選で、四日第六回を鳴雪選で、五日第七回を墨水選で、六日第八回を戯道選で、七日第九回を竹柏園選で、八日第十回を露月選で、十日第十一回を遠人（把栗）選で發表した。また單獨で日本に發表したものには三月十二日「雜祭」を、十八日「紅梅」「戯れに詩の句を取りて」を、二十五日「雜の歌」「春の歌」を、三十一日「雲雀十首」を掲げた。その作品を少し拾つてみると

とばり垂れて君いまだ覺めず紅の牡丹の花に朝日さすなり

緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ

紫のゆるしの總をほだしにて老い行く鷹の羽ばたきもせず

中垣の境の桃は散りにけり鄰の娘きのふとつぎぬ

人も來ず春行く庭の水の上にこぼれてたまる山吹の花

里川の流れにかけし水車汲みてはこぼす山吹の花

都邊は氷賣るなり三越路や白嶺の雪の今か解くらし

紅梅の咲けども鎖す片折戸狂女住む宿と聞くはまことか

おも柁の船は南に進むらん月は左になりにけるかな

榛の木に鴉芽を嚙む頃なれや雲山を出でて人畑をうつ

これらの句を見てゆくと、大體において俳句を短歌にしたといふ傾向が蔽ひ難いが、それは選者の多くが俳人である關係にもよるが、一面また俳句の行詰りが俳句よりやゝ表現の自由な短歌に移つて行つたと見ることは强ちに無理な見解ではないと思ふ。

更に一二評言の蛇足を加へて見ると、「とばり垂れて」の歌は蕪村調俳句の延長であるし、「玉卷く芭蕉」も俳句に現はせないものを短歌によつた感があり、「中垣の境」は俳句で體得した配合を巧みにしたもの、其他「紅梅」「おも柁」皆俳句的なものゝ引延ばしであつて、彼が俳句で得た客觀・印象明瞭・配合等々を應用した試作時代であるといふ感が深いが、この傾向は自選のものにも多

く見られる。

賣れ殘るひゝなやものを思ふらん十軒店の春の夜の雨

（雛店の灯を引くころや春の雨　蕪村）

徳川の昔女の住む宿におびたゞしく祭る古ひゝなかな

（徳川の昔男や雜煮くひ　子規）

といふやうな狀態で、なほこの外にも俳句や古詩を歌に直したと思はれるものも少くなく、大體に於て創造の功が少いやうに思はれるが、これもたゞ發表衝動のみに驅られて足が地についてゐない結果で、根本的には俳句から短歌へ無意識に突入したためと見ることも出來よう。この間の消息は三月二十八日附の漱石宛の書簡に明らかにされる。即ち

――歌につきては內外共に敵にて候外の敵は面白く候へども內の敵には閉口致候內の敵とは新聞社の先輩其他交際ある先輩の小言に有之候まさかにそんな人に向て理窟をのぶる譯にも行かずさりとて今更出しかけた議論をひつこませる譯にも行かず因却致候併し歌につきてはたびたび失敗の經驗有之候故今度ははじめより許可を出願して而後に出しはじめしもの此上は死ぬる迄ひつこみ不申候――

とあるが、外の敵とは、彼の歌論に對しての諸方より駁論に對して、日本紙上數回に亘つて「人々に答ふ」なる題下に應酬したるものゝみでなく、漸く勢力を加へつゝあつた鐵幹等の都市浪漫的短歌にも及んでゐると思はれる。病苦の床に在つて現實より追ひ詰められた唯一の路たる文學の野心に焦燥しつゝある彼を思へば、彼の短歌を是とするものも非とするものも共に同情を禁じ能はないであらう。この年三月二十五日初めて自宅に歌會を開いたが、會者は虛子・碧梧桐・露月・墨水・秋竹・遠人等俳人のみであつた。この軍勢を率ゐて澎湃たる敵軍に對せんとする彼の志や悲壯といふべしである。

三十一年の彼の創作は中々旺盛であつて、六百以上に及び、生涯の作歌數千七百六十四首の中の約三分の一に及んでゐる。短歌における功名に焦つてやゝ熱病的な彼の俤を髣髴することができる。この頃の彼は俳句的なもの、短歌的なものを認めず、「繪畫も彫刻も音樂も演劇も詩歌小說も皆同一の標準を以て論評し得べし」（註4）の理論によつて俳句を他の藝術の水準に引上げ、歌俳相通の趣向を採り用ゐんとするもので、短歌においても隨つて二十八九年以後體得したところの「配合」なる一種の構成法によらうとするのであつた。さうして彼の俳句が繪畫の寫生に示唆されたものであり、したがつて當初は短歌も亦繪畫的な美を展開させることに專ら意を用ゐてゐ

た。既に當初の純粋な寫生が部分々々の寫生の繼合せとなつてゐたのであり、且つ其創作の方法が、病床に在る彼の號令によつて指導される以上、題詠といふやうな非寫生的な手段によるのも當然ではあるが、寫生を高調する彼としては明らかに矛盾してゐた。

三十一年は以上に述べたやうに歌作に耽りつゝ又題詠をも試みてゐる。「獵官聲高くして炎熱いよ〳〵加はる戯れに蒼蠅の歌を作る」と題して

つかさある人をたとへば厨なるくらひ殘しの飯の上の蠅
馬の尾につきて走りし蠅もあらんとりのこされし牛の尻の蠅

以下九首の歌がそれである。其の外「足たゝば」、八首「われは」八首等があるが、

足立たば箱根の七湯七夜寢て水海の月に舟うけましを
足立たば不盡の高嶺のいたゞきをいかづちなして踏み鳴らさましを

等の歌を見ると、短歌的な調子がつきまとひ、同じやうな敍法になるのを殊更に斯ういふ形式をとつたとも見られる。さういふ間にも彼はそのひたむきに進まうとする考へから、歌書などを貪り讀んだらしく、當時日本新聞社員だつた坂井久良伎を通じて佐々木信綱から、加納諸平の『柿園詠草』、井上文雄の『調鶴集』、俊頼の『散木弐歌集』等を借りて讀んだが、續いて曙覽の『志濃夫廼舍歌集』や田安宗武の『天降言（アモリゴト）』をも借讀したのである。（後者は翌三十二年のことである。）

さういふ關係で佐々木信綱にも百中十首の選を乞うたものであつた。（註5）彼が爾來佐々木氏にのみ好意を見せてゐたのもさういふ關係であつたらうと思はれる。

三十二年も大體三十一年の延長であつたやうであるが、論文には「萬葉集卷十六」「歌話」等があり、作品には「繪あまたひろげ見てつくれる」錄九首、「垣」錄三首其他がある。前年新鮮な敍景歌を作つた彼も、その病臥のために取材に事缺き、歌想の涸渇が漸く見られる。繪を見て歌を作るといふやうなことがそれを明らかにしてゐる。然しこの當時『心の華』の編輯に携つてゐた香取秀眞・岡麓・大橋文之・山本鹿洲の四名が三十二番歌合を作つて彼に判を乞ひ、續いて二月初旬秀眞・麓・鹿洲の三人の彼を訪ふあり、彼もそれに力を得たらしく、前年に一度開いたきりで中絶してゐた歌會を催すことになり、月も前回と同じき三月十四日に催したが、會者は秀眞・麓・鹿洲・木村芳雨・黑井如心堂らであつた。つゞいて翌四月十八日に第二回の會を催し、七月二日さらに第三回目を催したが、新しく大橋文之や川崎安民が會した。三月の會には「垣」といふ題が課され、四月には「山吹」「病」、七月には「旅」といふやうな題が課され、題詠寫生の歌を作つてゐた。八月六日の會には柘植潮音・岡倉一雄といふやうな新顔が加はり、九月三日には赤木

格堂・一五坊が、十月一日のそれには和田不可得・湖月・山田三子が、十二月には興安嶺・桃澤茂春が加はつて根岸短歌會の意氣漸く昂り、十二月四日「短歌を募る辭」を日本に掲げ、それ以來文苑に發表してゐた彼一派の歌を、さらに一般から廣く募ることゝなつた。課題「新年雜詠」、募集の辭に昨年來歌論發表以來論難の烈しかつたことを記し、「しかも大勢如何ともすべからず」新派の驥足を伸し來れることを述べてゐる。彼の得意の貌を想見することができる。しかもなほその餘力を多く俳句に用ゐなければならなかつたが、それにしても其活動は目ざましいものがあつた。

三十三年は根岸短歌會の意氣最も昂つた年であつた。この年一月七日の會には從來の人々の外に伊藤左千夫が初めて出席した。左千夫はそれ以前春園の號を以て彼の歌論に反駁しつゝあつたが、遂に「降參」（註6）したのであつた。同三月二十八日（廿七日）には長塚節が初めて來た。一月八日には再び「森」なる題で短歌を募集したが、其他一月「短歌愚考」五月「短歌二句切」六月「竹里歌話」「萬葉集を讀む」の發表、二月四日歌會、三月四日同、四月一日同、五月六日同、二十八日「入獄談を聽く」を發表、六月十七日萬葉集輪講、七月一日歌會、八月五日同、九月二日同、十月日不詳歌會、この頃彼の病漸く篤く、これ以後の歌會を廢して十一月からは左千夫・麓の宅で隔月に催すことになつた。

この年に特記すべきことは萬葉集の輪講を催してそれへの關心を深めたことで、すでに小泉苳三氏も云つてをられるやうに子規の作品が萬葉調になつたのはこの頃からである。また四月十五日の會に、當時入獄して歸つた鼠骨の獄中談を聞き、想像して作歌したことや、第四回募集歌に「平家物語を讀む」なる題を課し、又五月鎌倉懷古の歌を作つて發表したことも注意せねばならぬことで、彼らの作品が漸く懷古的になつて行つたことを示してをり、萬葉調へ移つて行つたのはさういふ內容に適應するものであつたと思はれる。それの原因としては四月龜戸へ遊んだ外の子規の病臥による題材の涸渴と、題詠の行詰りが數へられるが子規の作品が初期の外へ向つたものから、身邊雜事的なものへ、そして一方は懷古的なものへと岐れて行つたのはこの頃からである。もちろん其間にも「舟中作」などの題下に空想的な作意を以てしたものも少しはあるが、それは多くありふれたものに墮してゐることは俳句における吉野山の吟其他と同じことであつた。

少しく歌を掲げる。

庭前卽景（四月二十一日作）

山吹は南垣根に茶の花は東塀に咲きむかひけり

かな網の大鳥籠に木を栽ゑてほつ枝下枝に鶸飛びわたる

五月四日（體溫三十九度六分、俳句會）

「藤の花長うして雨ふらんとす」とつくりし我句人は取らざりき

五月七日夜病床即事

ほと〻ぎす鳴くに首あげガラス戸の外面を見ればよき月夜なり

紙をもてランプおほへばガラス戸の外の月夜のあきらけく見ゆ

讀平家物語

宇治川六首

ぬば玉の黑毛の駒の太腹に雪解の水のさかまき來る

飛ぶ鳥の先を爭ふもの〻ふの鎧の袖に波ほとばしる

宇治川の早瀨よこぎるいけじきの馬の立髪浪こえにけり

橋の小島が崎のかなたよりいかけ引かけ武者二騎來る

もの〻ふのかためきびしき宇治川の水嵩まさりて橋なかりけり

先がけのいさを立てずば生きてあらじと誓へる心いけじき知るも

なほこの外に嚴島行幸十一首があるが、以上でその懷古的な傾向の一斑は了解せられると思ふので省略するが、彼の寫生がどう變つて行つたかはこれで明らかになると思ふ。「油畫師は必ず寫生に依り候へどもそれで神や妖怪やあられもなき事を面白く畫き申候」（註7）といふ樣な寫生から發足した短歌が、斯るものになることは豫じめ約束されたところでなければならなかつた。と同時に、その轉機は彼の現實生活が日清戰後の物價騰貴其他による急激な低落と、この六月在巴里の淺井忠に宛ての書簡「文士は貧乏ならざるべからず」の諦觀的境地と聯關して考へられねばならない。

また彼が格堂の集めて送つた平賀元義の歌を見たのもこの年の八月で、「上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人」「血を吐きし病の床のつれ〴〵に元義の歌よめばうれしも」の歌がある。元義は幕末の社會的矛盾が釀し出した變質者であるが、その狂的行爲をも萬葉調歌人といふだけで極力賞揚したのは、當初「歌よみに與ふる書」で實朝の歌の價値を認め、人間として立派な見識ある人でなければ彼のやうな力ある歌は詠み出でられないと斷じ、その人物の凡庸でないことを高調したのと反對で、そこに病苦と貧苦に惱まされつゝ、漸く生活意力を喪失しつゝあつた彼の止むをえぬ到達點があつたのだ。

だが現實生活の寒酸さにもかゝはらず、日清戰後における資本制の發展は隆々として國民的精神の昂揚となり、異常な排他的昂奮に彼らは陶醉しつゝあつたのであるが、それは七月の歌會に恰も北清事變勃發に會し、戰爭の歌を多く作つてゐることによつて證せられる。この年九月勃發した鐵幹との爭論の如きは、一に明星派の隆々たるに對し、その都市的浪漫調に慊焉たらざりし彼の反抗とも見られるが、同時にまた根岸短歌會の封建的排他性が、さういふ國家的排他心に刺戟せられて發したものであらう。

なほ三十一・二年に初まる短文・寫生文は、彼の詩想が無意識に發展して自由なものに赴いたところに一歩を踏み出してゐるのであるが、以後ホトトギスにこれを募集し發表してゐたが、この年『寒玉集』『寸紅集』を出版したし、また大に寫生文を起さんとして山會を開催したりして其方にも餘力を割いた。

三十四年には病やうやく重篤、それ以前から續開してゐた蕪村句集輪講にも加はり得ず、筆記を閲して意見を附記するほどであつた。この年の短歌に關する記事としては日本に掲げた『墨汁一滴』に於て平賀元義の歌を推し「萬葉以後に於て歌人四人を得たり。源實朝・徳川宗武・井手曙覽・平賀元義是れなり」と激賞し、また同じく『墨汁一滴』にいはゆる「子規鐵幹不可併稱論」を發表した位であるが、後者は明星との對立がいよ〳〵激化したことを思はせるものであつた。三十五年も大體同じやうな狀態であつたが、この兩年の作品は、彼の短歌がいよ〳〵日常雜事の瑣末主義へ轉入しつゝあることを示してゐる。

新　年

うつせみの我足痛みつごもりをうまいは寢ずて年明にけり
枕べの寒さはかりに新玉の年ほぎ繩をかけてほぐかも
あら玉の年のはじめの七草を籠に植ゑて來し病めるわがため　（以上三十四年）

京の人より香韋の一束贈り來しけるを

玉づさの君の使は紫の菫の花を持ちて來しかも
やみてあれば庭さへ見ぬを花菫我手にとりて見らくうれしも
玉透のガラスうつはの水清み香ひ菫の花よみがへる　（以上三十五年）

後者のやうなものには、病床に自然に憧れ悶えつゝある彼の姿が見えるが、そこからまた左に見えるやうな懷古的なものと、唯美的なものを派生せしめてゐる。

去年の春鶏戸に藤を見しことを今藤を見て思ひいでつも

五月五日にかしは餅とて槲の葉を餅に包みて祝ふ事いづこも同じさまなるべし。昔は膳夫をかしはでと言ひ歌にも「旅にしあれば椎の葉にもる」ともあれば食物を木の葉に盛りしこともありけんを、今の世にいたりて猶五日のかしは餅ばかり其名殘をとゞめたるぞゆかしき。かしはの歌をつくる。

椎の葉にもりにし昔おもほえてかしはのもちひ見ればなつかし

白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも

唯美的なるは

雨のふる牡丹の花に傘すれば妬み顔なる垣の花吹

雨ふると牡丹の上に蔽ひたる小傘がくれに赤き花見ゆ

ガラス戸の外面に咲けるくれなゐの牡丹の花に蝶の飛ぶ見ゆ

の類ひであるが、いふまでもなくこの種のものはモルヒネを飲んで草花を寫生するのと同じ態度で、虛無的な幻想の陶醉に他ならないが、そこには曾ての自然を赤裸々に見る、或は人生のための自然讃美といふやうなものは見られず、美のための美を追求し、刹那的な陶醉に浸り込まうとする境地を示してゐる。もちろん病苦に責めさいなまれ、叫喚怒號の日を送らねばならなかつた彼としては止むに止まれぬ到達點であつたらう。その點で我々も同情の念に堪へないが、然し彼の門流がこの刹那的快感の追求を何らか意義あるものゝやうに解し、そこから發足して花鳥風月の唯美主義を固定させつゝあり、或は寫生・寫實を單なる身邊雜事のトリヴヰアリズムと誤り、日記的な三十一字を連らねて得たりとして居るが如き、其淺見を我々は指摘せざるを得ないのである。

要するに短歌に於ける子規の運動は、俳句におけると同じやうに從來の和歌の虛僞を排して萬葉人の執つた眞率に倣はうとするところにあつた。「複雜なる趣向、言語の活用、材料の豐富、漢語俗語の使用、いづれにも皆今日の歌會の弊害を救うに必要なる條件ならざるはあらず」（註8）といふ言葉は彼の志を明らかにしてゐる。然し藝術をその當該社會との聯關に於て見ることの出來なかつた點が、萬葉人の精神を把握することを不可能ならしめ、單なる萬葉調への逆轉となつた。萬葉人は決して過去の何ものにも求めたのでなく、當時の現實を詠つたものであつたのに、子規のそれは回顧的な思慕によるもので、そのため徒らなる萬葉の形式模倣に止まつた。そこに行詰りの速かなる到達は明らかに豫知される。彼の眼前に在るものは萬葉時代の事物でなくして資本主義明治の事物で在つた。彼が現實を回避して平家物語の中から素材を求めたりしたことは、

彼の萬葉調なる形式主義が內容を掣肘してゐるものであるが、偶々資本主義的な事物に觸れてゐるものがあつても、寒暖計を「寒さはかり」、新聞を「ひぶみ」などする類であつて、それは歌を昔ながらの古いものとしか見てゐず、時代に適應するやうに革新することができなかつたものと云はなくてはならない。當時資本主義の發展につれての都市浪漫主義による明星派に量・質ともに及ばなかつたのは、かゝる擬古的なものが人々に喜ばれなかつたからである。そして明星派との對立鬪爭の結果は、相互にそれを變質せしめて行つたのである。

註1　この事を指摘せられたのは小泉苳三氏の『根岸短歌會の位相』及「明治歌論の展開」(『立命館文學』昭和九年九月號)である。私のこの記述もそれに負ふところが多いことを感謝しておく。

2　「七たび歌よみに與ふる書」

3　「六たび歌よみに與ふる書」

4　『俳諧大要』

5　佐々木信綱氏「子規と曙覽」(『明治文學の片影』)

6　赤木格堂氏「子規夜話」

7　「六たび歌よみに與ふる書」

8　「萬葉集卷十六」

二、歌壇との鬪爭

新派發生以前の明治和歌は、これを香川景樹の流れを汲む桂園派、眞淵を宗とする千蔭・春海等の末流の江戸派、本居宣長系統の鈴屋派、二條家歌學の傳統を繼ぐ堂上派に分つことが出來るが、就中勢力のあつたのは桂園派で、舊幕時代からの二條家の傳統的勢力を驅逐し、宮內省を背景にして其勢力を誇つてゐた。それは桂園門の八田知紀が明治五年歌道御用掛となり、その關係で知紀門の高崎正風が知紀歿後宮內省に入り、御歌所長たるに及んで二條家の傳統勢力を追ひのけ爾來其地盤を確固たるものにしたのである。景樹の末流と云つてもそれは質的變化を遂げてゐるものであり、そのまゝでは新時代のものとなり得ないことは明らかだつた。新體詩が漸く發展の緒に着き、俳句にまで革新の手がのべられるやうになつた以上、短歌にも革新的氣運が漲つて來なければならなかつた。それが一般の國粹思潮に溫床を與へられて國學和歌改良論を勃興せしめたのであるが、就中明治二十六年落合直文を主宰者とし、鮎貝槐園・與謝野鐵幹・國分操子・大町桂月・鹽井雨江・堀內新泉らを同人として淺香社が組織されたことは、新派和歌のために大きな波紋

を投げたものであらう。やゝ遲れて久保猪之吉・服部躬治・金子薫園・尾上柴舟等も加つて漸く一方の勢力となつたが、然し未だ微溫的なもので、革新的な積極性をもつものとは見られない。和歌が新時代のものとなるためには一層積極性に富んだ人を欲したのであるが、この要求に應じて登場したのが與謝野鐵幹であつた。

二十六年鐵幹は『しがらみ草紙』に歌評を發表して舊派和歌を批判したが、越えて二十七年五月の二六新報紙上に「亡國の音」なる文を發表した。それは「現代非丈夫的和歌を罵る」といふもので、舊派和歌に對する大膽な挑戰とも見られるが、この議論の發表は大體直文や槐園などとも合意の上での行動だといふから、封建的なものに對する新時代のものゝ鬪爭を代表するものと見て然るべきものであらう。二十九年の七月には彼の處女詩歌集『東西南北』が出版され、囂々たる世評をまき起した。翌三十年一月には彼は末松謙澄博士の『國歌新論』を反駁して新派和歌の立場を主張し、新派の立場を確固不動のものにしたが、さらに同年三月には第二詩歌集『天地玄黃』を出版し、新派短歌は最早歌壇の大勢力として牢固拔くべからざるものとなつたが、彼は餘勢に乘じて三十二年新詩社を組織し、四月雜誌『明星』を創刊するに至つて浪漫主義詩歌と云はれる此運動は一段の飛躍を示すに至つた。

元來鐵幹は父禮嚴によつて和歌における開眼をさせられ、父の傍らに在つて父が弟子に授ける古事記・萬葉集の講筵に連つたが、それらによつて萬葉の尊ぶべきを知り、それを崇拜するのあまり、その中から愛讀する長短歌を三度も手抄するに至つたといふが、自らも萬葉に倣ふことを是とし、父が歌を詠む參考として平安朝の物語隨筆や支那の經書詩文を讀めと敎へたに拘らず、また英・漢・數のやうなものに親しみつゝも、なほ歌集を讀む時は自ら萬葉風の歌集に傾いてゐたといふ。彼の萬葉崇拜は鮎貝槐園を通じて子規に傳はつた。(既出二二六頁) 鐵幹における萬葉の體得がどのやうなものであつたかは徵するものがなくて詳かでないが、『東西南北』の序で「小生の詩は、短歌にせよ、新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにあらず、言はゞ小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ」といふやうに、徹底的に自我を主張した。「この封建的傳統への反抗と自我の覺醒とは、古い生產關係から解放された自由な市民の個性の聲である」(註1) にちがひなかつた。しかし彼から萬葉の喜ぶべきを聞いた子規は、萬葉の精神を把握することが出來ず、いはゆる萬葉調の形式・語調の模倣に終つてゐるのみならず、「萬葉短歌へのやゝ盲目的な崇拜を示してゐた」(註2) といふことも、子規の頭腦に執拗に彼を捉へてゐるところの貴族性にもあるが、同時に明治維新の特殊性とそれに基づく維新後の市民階級の思想の不徹底と

が働いてゐることを考へずにはゐられない。

いづれにしても子規の萬葉主義による歌論の展開は、鐵幹によつて向ふべき指針を與へられ、「はて知らずの記」以來、次第に萬葉への關心を深めて來てゐるのは事實である。彼の『東西南北』の序にも「――余も亦破れたる鐘を撃ち、錆びたる長刀を揮ふて舞はんと欲する者、只々其力足らずして、空しく鐵幹に先鞭を著けられたるを恨む」とあり、そこに鐵幹との間に何等對立意識は認められないが、それは當面の敵舊派に對して協同動作をとらなければならなかつたからである。子規が「歌よみに與ふる書」を日本に發表した三十一年二月には『心の華』が發刊され、同年夏にはいかづち會が久保猪之吉・服部躬治・尾上柴舟・齋藤うきぐさ・菊地こま次・大伴來目雄等によつて組織され、翌三十二年には八杉貞利・小日向貞次郎・沼波武夫らを發企人として若菜會が、早稲田專門學校を中心として更衣會が、高等學校にしの〻め會が起り、同年末には國風家懇親會が催され、其發會式席上武島又次郎・末松謙澄・落合直文・久保猪之吉・井上哲次郎等の講演があつたりしたのも、新派短歌勃興の一斑とも見られよう。

子規が三十一年以降發表した歌論は當然なことであるが、景樹とその派を奉ずる御歌所調と、その桂園派が宗とする古今集と貫之に矛が向けられた。

――香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申す迄も無之無候。俗な歌の多き事も無論に候

然し景樹には、彼が崇拜する貫之よりもよき歌があるが、そのよき處を學ぶことができず惡い處をのみ眞似てゐる今の歌よみこそ氣の知れぬ奴で、それも十年か二十年なら兎も角百年たつても、二百年たつても其糟粕を嘗めてゐる不見識に驚かざるを得ない、と云つてゐるが、なほ「歌話」においては「景樹といふ男のくだらぬ男なる事は今更いはでもの事ながら、餘りといへば餘りなる言ひ草の傍若無人なるに腹据ゑ兼ねて鐵の筆もて少しぶちのめしくれん」とてその『新學異見』に實朝の歌を古調を踏襲したのであるから志氣ある人見るべからずと云つたのを慨し、「自己の歌がことごとく古今以下を踏襲剽竊したる事を棚へ上げて、却つて創意多き實朝の歌を傷けんとは憎さも憎き振舞かな――盜人たけ〴〵しとは景樹のことなり。」といきまいてゐる。

斯くまで彼の罵倒した景樹の歌はどのやうなものであるかといふに、彼が「書を棄て實景實物に向ひて吾が調にて今の言葉にて誠を陳べ試み給ふべし」といふやうに「調べ」と共にリアリズムを說き、もしくはそれに近いものを唱道してゐるのであつて、それは明らかに實朝以來、眞淵などの古調に對する否定要素であり、子規の唱へる寫生に頗る近似してゐるものである。景樹

についてはすでに明治二十五年大西祝の「香川景樹翁の歌論」（註3）があつて、彼の「歌は理るものにあらずして調ぶるものなり」といふことゝ、リアリズムとの矛盾を正しくも指摘し、「尙ほ一層今の言語を以て、卽ち尙ほ一層俗語に近き言葉を以て、實情實景を歌ふこと」こそ彼の爲すべきところであるといひ、「世相に對して得る千態萬態の感想は、豈に之を三十一文字に言ひ盡すべけん」とその可變性を說き、「後の歌人は景樹に一歩を進めて、其歌論の行くべき所へ其實行を運ばしめて、その狹隘なる堺限を超越せざるべからず」と云つてゐるが、これは當時に在つてはもちろんのこと、今日に於てもなほ卓見たるを失はない。然し子規は古調にその形式を求め、リアリズムとそれとの矛盾を感ぜず、却つて景樹の說を進展させることができずそれを機械的に排擊し、それに對して古調を設定しなければならなくなつたのだ。

誰でも其好むところに僻して保守性を固執すれば革新性は失はれる。人間としてやむをえぬ弱點かも知れないが、寫生を唱道した彼が、それの表現に大昔の奈良朝の言葉を以てせねばならぬことを說いてその撞着に氣が附かなかつた如きは、解すべからざることに違ひないが、この矛盾を後に考へたのは長塚節であつた。

次に子規の鋭鋒は古今集と紀貫之、御歌所調に向けられた。

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候——先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て來る實に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外國人との合の子を日本人とや申さん外國人とや申さんとしやれたると同じ事にてしやれにもならぬつまらぬ歌に候。此外の歌とても大同小異にて駄洒落か理窟ッぽい者のみに有之候。それでも强ひて古今集をほめて言はゞつまらぬ歌ながら萬葉以外に一風を成したる處は取得にて如何なる者にても始めての者は珍らしく覺え申候

さうして何代集の彼ン代集のと云つても皆古今の糟粕の糟粕の糟粕であり、貫之なぞは「空に知られぬ雪」といふ駄洒落や、「人はいさ心もしらず」といふ淺はかな言ひざまのものばかりだと斷じ、又

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

といふ八田知紀の歌を評し、「霞の奥は知らねども」の消極的な言葉が理窟だといひ、「全體が客觀的卽ち景色なるに其中に主觀的理窟の句がまじりては殺風景いはん方なく候」とて、御歌所調に對して挑戰し、

——田舍の者などは御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの

樣に考へ、從て其人の歌と問けば讀まぬ内からはや善き者と定め居るなどありうちの事にて生も昔は其仲間の一人に候ひき。――御歌所とてえらい人が集る筈もなく御歌所長とて必ずしも第一流の人が坐るにもあらざるべく候。今日は歌よみなる者皆無の時なれどそれでも御歌所連より上手なる歌よみならば民間に可有之候(註4)――

高崎正風氏いふ「元來歌の要とするところは紀氏が『心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり』といはれたる此思ふことをいひ出すにあり（略）徒らに巧妙を人情の外にもとめことさらにつくり設くる者は眞の歌にあらざることは今更言ふまでもなき事なり」云々と。貫之崇拜家だけに、貫之の文を擧げて證據となしあれど、「心に思ふことを」云々といふばかりにては、いはゞ當り前の事にて、此中に歌のつくりやう、よしあしの標準迄は籠り居らざるべし。――貫之の歌は巧妙を人情の外に求めいたづらにやはらかなる調子と理窟めきたる趣向とを以て、人情もなき卅一字をあやなさんとしたる跡明らかに見るべく、其撰に係る古今集も亦同調の歌のみを集めたるにて知るべきなり。言葉をかへていはば古今集は人情的の歌を集めたるに非ずして、只やはらかなる調子の歌を集めし者とより外は思はれず。(註5)

高崎といふ人の口癖に、歌の議論するより自ら歌を作ること多かれ、といふ。もつともの事なり。高崎といふ人も骨折りて歌を多く作りたらんには今少しく歌の味が分りしなるべきにと思ふ。御歌所派にては小出といふ人最も多く作る故に他の人に比すれば一日の長あり。(註6)などと云つてゐる。彼の主たる目標が御歌所派にあつて、それに對して果敢な鬪爭を展開してゐることがわかるが、其他の歌壇の集團については、佐々木信綱に對しては終始好意を示してゐたことは、先に述べたやうに信綱の歌境に好意をもつてゐたばかりではなく、三十一年以降における交友關係によるものが多かつたことゝ思ふ。

三十一・二年頃の新派短歌勃興の機運は先に述べた通りであるが、就中鐵幹・晶子の浪漫調は時代に投じて大に歡迎され、三十二年新詩社を組織し、翌三十三年四月雜誌明星を發行するに至つた。かゝる過程において子規の根岸短歌會と端を構へるに至り、いはゆる子規鐵幹不可併稱論を惹起した。

元來この不可併稱論ほど短歌史上歪められて書かれてゐるものはない。それの典型的なものは子規の系統をつぐアラヽギ派の總帥齋藤茂吉氏の「明治大正短歌史概說」(『改造社現代短歌集』)であらうが、それは藝術のための子規の「聖なる戰ひ」と觀てゐる。これに對して科學的な觀方をしてゐるものもあるが、それは小泉苳三氏の『根岸短歌會の位相』等に述べられてゐるもので、

新詩社の浪漫主義に對して子規の寫實主義の鬪爭と觀た。前說は子規一門の我が佛尊しの論法を短歌史にもち込んだものでとるに足りないが、後說は一應の妥當性をもつてゐる。明星派では奔放な感情を詠出するに言葉の吟味を第二義としてゐたに反し、子規はその俳句研究において體得した言語の緊密性・科學性を以て對立した。『墨汁一滴』での落合直文の歌に對する批判にはそれによる鋭さが見える。だが鐵幹が二十九年『東西南北』を刊行した時には子規もそれに贊し序文を書いてゐる。もし鐵幹らの歌風に批難すべきものがあるならばその當時に批難すべきであつた。さうだつたら我々も浪漫主義對寫實主義の鬪爭との說を肯定するかも知れないが、事實はさうでなかつたのである。私は三十二年の新詩社の組織、三十三年の『明星』の發刊といふやうな鐵幹側の飛躍的發展に對し、三十一年「歌よみに與ふる書」を現はして以來、根岸短歌會が劣勢に在つたことが遠因であると觀てゐるが、それに對し三十三年一月左千夫が、同四月に節が子規門に加はり、やゝ勢を得たのであるが、就中左千夫は子規の許へ參じて年長の故を以て厚遇され、其の知遇に感じて持前の感激性を横溢させ、子規を唯一絶對的のものとして紫雲の彼方に祭り上げんとしたところに觸發されたもので、それは彼が子規鐵幹と同列に置いたこと、若武者などと輕蔑的な言辭を以てしたことを批難した語氣によつて推しられ、（註7）そこに封建的師弟關係重視の觀念が見えるが、この觸發された鬪爭を彼らは自己の發展に有利ならしめようとしたもので、當時日本新聞の他に短歌の機關誌をもたなかつた根岸派は、雜誌發行の契機を捉ふべくこれを機會にしようとしたものであつた。それは當時鬪爭の別働隊であつた久良伎が鐵幹を批難しつゝも「さりながら餘り長くかきたつれば、かへりて豎子に名を成す道理」とか「世間では鐵幹を賞被つて歌壇の名物男の如く云ふ明盲云々」（註8）など云つてゐるところに現はれてゐる。

論爭は主として『心の華』を主とし、『大帝國』を別働隊として行はれたが、子規は八月一日附で鐵幹に書を送つた。

（前略）若し小生が原稿を書く丈の勇氣快復致候曉の事を考ふるに、或は明星の味方として拙稿を投ずる事を止め御互に文壇の敵同士として喧嘩する方面白からずやと存じ候是迄は新派を一團として舊派に抵抗する必要も有之候へども舊派聲をひそめて事實上大略降伏したる今日は新派同士の喧嘩こそ必要と存じ候明星掲載の歌に就きては小生共の友人の中には隨分議論も有之候事故之を幸に陣頭に相見ゆる機と致し度其方が歌學界の爲めにも宜しかるべきかと存じ候。尤も敵同士と相成候とも場合によりて拙稿御掲載相願ひ候かも知れ不申候へども兎に角兩派に分れて歌戰するも快事と存じ候。右御參考まで申上候。

書中新派といふ文字を用ゐ候へども之は明星の號外にある新派の字義には無之候。

八月一日　正岡子規（註9）

これと殆んど同時の執筆と思はれる子規の公開狀が九月號をくり下げた『心の華』十月號倶樂部欄に載つた。

前號の心の華に一言のことわりを載せて戴んと存候處つい忘れ申候に付おくればせに一言申上候。前々號倶樂部欄に左千夫氏の投書あり、其中に小生の事に關してかにかく論ぜられ候、御厚意は感謝するところなれども、小生の方にては惡口も罵詈も一向に構はず、況して不敬輕侮などは謹んで相受申候。小生自身が隨分他人の惡口を申候に付せめて他人の惡口にても受けなばいくらか罪ほろぼしに可相成と存候。又雜誌の方より申しても、倶樂部欄には編者の責任無き事勿論と存候。左千夫氏の申條は無理なる注文に御座候。

ど一應それの言ひ懸り的なるを認め、更に

筆の序に憎まれ口一つ叩き申候。はがきの歌につきて何か御疑でもあるやうなれどもこれは秀眞氏が集めて秀眞氏が寄稿せられたるに相違無之、併し此事につきては同氏より小生への相談ありし故小生も承知の上に候。さて此題があまり耳慣れぬところより、こんな者を歌と思ふて居るのであらうか、當人は氣でも違うて居るのではあるまいか、などと御呆れなされ候御方も不少と相見え種々御質問に預り候へども、小生の自作を辯護するわけには參り不申、況して用辨かたく〳〵のはがきなれば出鱈目の作のみにて歌と申すもいかゞの者多く御座候。さりながら其歌が出鱈目なるだけそれだけ貫之躬恒などの歌より遙にすぐれ候かと存候。古今集崇拜の人之を讀んで御氣絶なされぬやう奉願候

竹の里人

言に針を含むもので、兩者の尖鋭化を物語つてゐる。鐵幹はこれに對し左千夫・久良伎を子規の使嗾するところと觀、『心の華』九月號に「國詩革新の歴史」を發表し、自分は子規の後輩でない事を明らかにし、更に『明星』九月號には「子規子に與ふ」なる文を公けにした。

藝術を樂しむと虛名を樂しむとは兩立すべきではない。然るに誰の歌がどうのかうのといふのは藝術を樂しむ人々の所作とは見られない。――君とは私交もある僕だ。君には十分文壇の禮讓を盡してゐる僕だ。その僕と名を列べて書かれるのも嫌やだといふことは、文壇の德義を無視した常識はづれの無禮の暴言ではないか――この開書を以て正面から君に一打擊を加へるのである。文壇の禮儀作法を知つて居る君であるなら、左千夫や坂井に書かせずに、君自身の名で子規は文壇の破廉恥漢でないといふことを辯明し玉へ。兜を脱いだの、後輩の鐵幹など云ふこ

とは、和歌革新の歴史上、君が健全なる頭腦である以上は、斷じて僕に向つて云はれた義理ではあるまいと思ふ――

これに對して子規は九月十六日附で鐵幹宛に左の書簡を與へた。

明星第六號の御書面拜見致候これに對して御答申上度存候へど書面にては意を盡さず人づてにては愈眞を誤らんを恐る成るべくは御面會の機を得て申上度候

一言申上置候は貴兄が小生に對する攻擊は『邪推』と『誤報を信ぜらる』との二事より起り候樣相見え候――

此間にも根岸短歌會側は左千夫を先頭とし、久良伎を別働隊とし、心の華・大帝國を以て敵の言を封ずるの策に出で、これに附隨して文壇照魔鏡事件や新聲記者の鐵幹誹毀事件を派生し、紛糾は愈々甚だしくなつたが、鐵幹は

小生は爰に子規君に對する、明星第六號紙上の失言を謝し、且つ同時に公けにせる、心の華紙上の子規君に對する評言をも取消し申候。猶この感情問題に就て、坂井君の男らしき御態度には、十二分の敬意を表し候――十月十二日

と云つて論爭を打切つた。けれども兩者釋然たる能はず、鐵幹側では根岸派を新派たるに傾しないと言つてゐるし、子規の方でも、三十四年一月二十五日の『墨汁一滴』にこれを延長し

去年の夏頃或雜誌に短歌の事を論じて、鐵幹子規と竝記し兩者同一趣味なるかの如く云へり。吾れ思へらく、兩者の短歌全く標準を異にす。鐵幹是ならば子規非なり。子規是ならば鐵幹非なり。鐵幹と子規は併稱すべき者にあらずと。乃ち書を鐵幹に贈つて互に歌壇の敵となり、吾れは明星所載の短歌を評せむ事を約す。蓋し兩者を混じて同一趣味の如く思へる者の爲に妄を辯ぜんとせり。爾後病牀寧日少く自ら筆を執らざる事數月未だ前約を果さゞるに、此等の事世に誤り傳へられ、鐵幹子規不可併稱の說を以て、尊卑輕重に因ると爲すに至る。然れども此等の事件は他の事件と聯絡して一時歌界の問題となり、甲論乙駁喧騷を極めたるは、世人をして稍々歌界に注目せしめたる者あり、新年以後病苦益々加はり殊に筆を執るに惱む。終に前約を果す能はざるを憾む。若し墨汁一滴の許す限りに於て時に批評を試むるの機を得んか猶幸なり。

と云ひ、さらに三月二十八日から四月三日に亙つて明星所載の落合直文の歌數首を評してゐるが、追擊戰の意味であらうことの想像が出來る。元來子規は最も藝術價値の高いものが社會的にも厚く待遇せられねばならぬと考へてをり、彼の故人の藝術評價は多かれ少かれこの方法によつてゐる。さうして自ら進みつゝある途を最高のものと信ずる時、他がそれに及ばないに拘らず覇を稱

へてゐることがうとましく感ぜられる。この彼の特性は彼の死後瀾水なる人によつて評せられたやうに、人の成功を聞くより失敗を聞くことに興味を覺え、「物に同情せんよりは寧ろ冷評するに於て愉快」を感ずるその心理より起つたものである。

また當時の社會情勢を回顧すると、產業革命が進行して自然を漸く破壞しつゝあり、牧歌的な景色は影を潛めんとして鐵の魔物が巨大な歩を踏み出してゐた。子規が汽車・鐵道等の殺風景な事物は他の風流的なものに配合して詠めと說いてゐることは、この魔物に對しての妥協的態度を見ることが出來るが、二十九年の「洪水」なる新體詩にもそれが明らかに見られるし、また「ホトトギス第四卷一號のはじめに」なるものには、資本主義の齎した都市中心の文化に對しての熾烈な反抗が見られ、當時彼の前に世を風靡してゐた紅葉等の小說、秋聲會等の俳諧と共に、こゝに言及した鐵幹等の短歌をそれらと不可離のものと考へ、それに對して封建的保守的イデオロギイをもつてそれに反撥を試みたものであると私は考へるものだ。なほこのことは後に中村樂天が二六紙上に書いた「俳汝南」に至つて、勤勞階級の立場での、紅葉・竹冷・小波等の都市寄食者に對する反感にまで高められてゐるが、子規のそれには彼の物質生活の貧困さが基底となつてゐることはこゝにいふまでもないだらう。

斯くして子規・鐵幹の爭ひは有耶無耶に終つたのであるが、戰ひは鐵幹を沈默せしめた點で根岸側の勝利のやうに見られるが、却つてその封建性を暴露し、我が佛尊しの論法を他に强要せんとしたこと、並びに彌次馬が別働隊に加はつて、藝術論でない愚劣な筆法で側背を脅かしたその戰法は、子規の堂々たる議論を傷けてしまつた。戰ひは明らかに根岸側の負けである。

子規の考へたやうに眞成藝術が大衆の參與すべからざるものであるならば、孤立無援の狀態こそ却つて勝利でなければならぬ。彼はその藝術の高峯から「俗人」どもを鳥瞰し、憐れんでゐればいゝのだ。彼が俗人どもを罵倒するのはいゝとしても、他の勢力を殺がんとする如きは悟りきれない婆婆ッ氣を殘してゐたものといはねばならない。要するに子規の負けじ魂の致すところであらうと思はれる。俳句における秋聲會・筑波會は矢面に立たなかつたゝめ、喧嘩にはならなかつたが、歌壇においては同じ位な興隆期のイデオロギイをもつ鐵幹であり、且つ彼らの勢力が根岸派を壓すべき勢であつたのでかゝる猛烈な論爭を生じたものと思ふ。

註1　大川澄夫氏「明治短歌史と明星派」（『明治文學研究』昭和九年九月號）
2　小泉苳三氏「根岸短歌會の史的位置」（同上）
3　八月及九月の『國民之友』（全集七編に收む）

4　「十たび歌よみに與ふる書」
5　「歌話」
6　同上
7　拙稿「所謂子規鐵幹不可併稱論の經過と眞相」（『短歌研究』昭和十年七月號）
8　『大帝國』卅三年八―九月號
9　『明星』第六號に掲載

第五章・子規の歌論

一、客觀主義と寫生

子規の歌論と作品が俳句のそれからの延長であつたことは既に明らかなことであり、そしてそれが彼是十年足らずもの、彼の俳句修業の經驗を土臺にしてゐることも亦いふまでもないことである。彼は寫生主義以外に明治時代の俳句・短歌（やがてすべての藝術も――）の行く途のないことを繪畫の寫生其他によつて明らかにし、さうして俳句においては實作においてその理想を具體化・實證化させることが出來たし、また二十九年以後多くのインテリゲントたちの共鳴と支持とを得たことは、愈々彼の自信を强くし、俳句が既に事實上革新された以上短歌も革新されぬ譯はないと考へたであらうことは想像に難くないのである。

彼が俳句から敎へられたものゝ第一はいふまでもなく客觀主義と寫生である。彼は歌も俳句も同じ標準を以て論評し得べしとなしてゐたが、大體に於て俳句の簡潔性の禮讃者であつた。「和歌を作らんとするものは、深く俳句を究むるを要す」（註1）と云つたのは二十九年のことで、未だ

俳句運動圏内の彼であつたからにしても、三十二年の「歌話」でも

橘や定家机のありどころ　杉風

の句を擧げ「其を歌にせんは「橘の咲く窓の内に」などいへる數多の言葉を以て「橘や」の五文字に代へざるべからず」などあるはそれを明らかにしてゐる。限られた俳句の詩型内で複雜な趣向を詠まうとすれば自ら虛字やてにはを少くして名詞などを多くするやうになる。彼の客觀主義は俳句において初め月並の小主觀を排擊するアンチテーゼであつたが、後彼の形式觀が確立してから一層其特徴をあらはして來たものらしい。鳴雪が古句の客觀的なものを求めて元祿に凡兆を得た如き、又子規が蕪村調に開眼した如き、共にさういふ經路を示すものでなければならなかつた。さうしてそれを短歌に延用した。彼が俳句・短歌にそれ〴〵別なものを發見したのは三十二年以後である。だから短歌における初期の客觀主義の裡には沒主觀的な種類のものを好む傾向を露はにしてゐる。例へば新古今集の客觀的なるを推賞し

ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風　信明

に對して「――客觀的の歌にてけしきも淋しく艶なるに語を疊みかけて調子とりたる處いとめづらかに覺え候」（註2）といひ、又

さゝ波や比良山風の海吹けば釣する蜑の袖かへる見ゆ　讀人しらず

に對して、「實景を其儘に寫し些の巧を弄ばぬ所却て興多く候。」（註3）とある如きその態度を明らかに示してゐる。新古今の客觀的なるは禪の影響で、言外餘情を尙ぶ幽玄といふことを喜んだ結果であり、幽玄といふ言葉は『臨濟錄』に發してゐるもので、既に古今集序に「興入二幽玄一」とある程であるが、新古今の客觀主義もそれの影響だと思はれる。子規は新古今の客觀的傾向を推賞してゐるが、それはどこまでも俳句の客觀主義に據つてゐるので、其作品は可なり俳趣味に基づいてゐることは爭ひがたい。それは例へば

夕立は隣の里や過ぎつらん蟬吹きとばす椎の葉の風

などの作品に見ることが出來るし、この歌が太祇の

夕立のすは來る音よ森の上

の引伸ばしであることはいふまでもないが、大體において此時代のものには夏の季を現はしてゐるものが多く、又紅梅とか牡丹とか海棠・桃・玉まく芭蕉とかを詠んでゐるのも、彼のいはゆる積極美的傾向を現はしてゐるもので、蕪村などからの影響が窺はれるが、

夜を守る砦の篝影冴えて荒野の月に胡人胡笳を吹く

城中の千戸の杏花咲きて關帝廟下人市をなす

のやうな傾向のものにも、故らに蕪村の漢詩調と客觀趣味をとり入れようとして、佶屈聱牙に陷つてゐる傾向が見られるが、それも客觀的漢詩的にならうとするに急であつたゝめであらうと思はれる。

先にも述べたやうに、二十八九年以後の彼は初期の寫生とは別な配合・調和の手段によつてゐた。すでに短歌が俳句の延長であつたゝめに、同じく寫生を唱へても、初期の純粋なそれでなく、二十八九年以後のそれから發足してゐることはこゝにいふまでもないだらう。それは彼の左の言葉によつて證據立てられる。

――生の寫實と申すは合理非合理事實非事實の謂にては無之候。油畫師は必ず寫生に依り候へどもそれで神や妖怪やあられもなき事を面白く畫き申候。併し神や妖怪を畫くにも勿論寫生に依るものにて、只々有りの儘を寫生すると一部々々の寫生を集めるとの相異に有之、生の寫實も同樣の事に候(註4)(傍點筆者)

即ち曾て自然に赤裸々に接して主觀を交へずこれを詠ふといふ彼の寫生が、こゝでは「あられもなき事を面白く」畫くといふことに變形し、「神や妖怪」の見たことのないものまでも、寫生によつて見たやうに詠まうといふのである。かゝる傾向は初期の俳句の寫生には斷じてないところで、隨つて寫生の掛聲だけを即斷して、「子規の短歌寫生說は勿論その俳句寫生論の延長だ」などと云ふ『正岡子規』における藤川忠治氏の言葉は、掛聲に囚はれて實作の檢討を怠つた誤謬である。(同書四五六頁參照)さうして斯る浪漫的傾向への轉機は、子規が俳句に於けると同じやうに短歌においても陳腐を極力斥け、新を追求したところに生じたのであるが、その新なるものゝ範圍も甚だ限られたもので、

新奇なる事を詠めといふと、汽車・鐵道などいふ所謂文明の器械を持ち出す人あれど大に量見が間違ひ居り候。文明の器械は多く不風流なる者にて歌に入り難く候へども若しこれを詠まんとならば他に趣味ある者を配合するの外無之候。それを何の配合物もなく「レールの上を風が吹く」などとやられては殺風景の極に候。せめてはレールの傍に菫が咲いてゐるとか、又は汽車の過ぎた後で罌粟が散るとか薄がそよぐとか云ふやうに他物を配合すればいくらか見よくなるべく候。又殺風景なる者は遠望する方宜しく候。菜の花の向ふに汽車が見ゆるとか、夏草の野末を汽車が走るとかする如きも殺風景を消す一手段かと存候(註5)

とあるやうに、口では寫生・寫實を唱へつゝ次第に浪漫的な態度に移つて行つたものと考へられ

る。

既に屢々述べたやうにリアリズムは明治文學一般に見られる精神であつて、この精神によつて和歌を革新せんとしたものに二十年三月號東洋學會雜誌における萩野由之の「小言」がある。由之はその中で、萬葉集の「家に在れば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」といふ歌と、「君が代は驛々に旅寢して草の枕もしらで來にけり」なる歌を比較し、「關守ノ荒キ詞キカヌ御代ニ函根荒井ノ關ナド過ギタルヤウ言ヒナ」し、歌のために情を矯むることを排斥し、「物ノ名ハ電信ニモアレ汽船ニモアレ字音ニテ呼ベルモノハ共ノ儘ニ讀ミ入ルベキナリ、洋語ナルモ亦然リ、世ニハ字音ヲ嫌ヒテ電信ヲ糸ノ便リ汽船ヲ黑船ナドカヘテ詠ミタルモ見ユ」るが、「昔ノ字音ハ雅、今ノ字音ハ俗ナランヤ」といひ、或は歌は時世につれて異ることを高調し、「古事記ノ歌ニハ古事記時代ノ事物ト詞トアリ、萬葉集ニハ萬葉時代ノ事物ト詞トアリ——サレバ今ノ事物ニヨリテ感動セシ情ハ今ノ詞ニテ述ブベキ道理ナリ」など云つてゐる。二十五年頃に大西操山が香川景樹の歌論を檢討してゐるのも、そのリアリズムを擧げてゐるものに外ならないが、今子規の歌における以上の寫生論を見ると、萩野由之の唱へたリアリズムより退歩して俗とか殺風景とかゞ排斥され反對に雅・風流といふものをしきりに云々してゐる。萩野由之が電信でも汽船でも字音のまゝ詠めと云つてゐるに對して、子規がずつと後まで「日刊新聞」を「ひぶみ」、「寒暖計」を「さむさはかり」など振假名して讀ましてゐることは興味ある對照と云はねばならない。

また彼の客觀主義も矛盾を含んだものであつて、既に小泉苳三氏も指摘せられたやうに、客觀を力說しながら、それを自己の主觀的な「趣味」的な篩にかけてゐたことは、自ら客觀主義を崩壞させつゝあつたこと、やがて一の固定した趣味に墮さうとする傾向を示してをり、それが一時的には新鮮であり得ても、やがて陳套になるべきは明らかである。それがその平面描寫と形式の制約と、彼の門流の增加と作歌の增加によつて一層激しくなる。

元來彼は俳句においては口を酸くして寫生を說いたのであるが、短歌では俳句に於けるやうに說いてはゐない。これは一應俳句に於て寫生の重要なことが確認されてをり、初期の短歌作家が多く俳人であつた關係とも見られなくもないが、或は俳句・短歌においては徹底的な寫實はなし難いことを暗默の裡に感じて來たのではあるまいかと思はれる。さうして一方においては先に擧げた文に見るやうに、いはゆる新奇なものと自然との調和を策し、その配合によつて作品を得ようと意圖したが、習作的な自然の寫生はその門下に對して可なり繰り返して高調したらしく、左千夫・節などが寫生に熱中した如きがそれを證してゐるし、又三十三年七月日本の週報に「瀧」

の題を出されて、節と左千夫がわざ〳〵日光の山奥へ瀧を見に行つたやうなことも、直接間接に子規の號令に基いてゐると見られる。

彼は小澤蘆庵の「たゞごと歌」について、純粹な「たゞごと歌」ならば平凡なるところに面白味があるだらうに、多少の理窟と多少の言葉のたくみを以てしてゐるので、一點の取り處もない譯だと云つてゐるが、その下手な蘆庵のものにも紀行的、即ち寫實的なものには面白い歌があるといひ、又自己の年若き頃の歌にも、紀行的寫實的なものには見るに足るべきものがあるとて「今の歌人に向ひて紀行的・寫實的の歌をつくらん事を望むなり」（註6）と云つてゐるが、彼の創作手段による限りこの言葉は正しいにしても、彼が依然として歌を勤勞階級のものたらしめず、紀行等を常になしうる者を對象として說いてゐるのは、彼が藝術と社會とのつながりを理解しなかつたゝめで、そこにも現實との間の矛盾が明らかにされてをり、根岸短歌會の短歌が大衆への浸透性を缺いてゐたことの一因もそこに在ると思ふ。

子規が陳腐を排して新を求めたのはいゝとしても、その「新」を限られたものとなし、自然讃美と古典主義を離れることが出來なかつたのは、革新者としての彼の行動としては明らかに矛盾であつた。彼に在つては病氣のために自然への接觸を絕たれ、次第に懷古的・身邊雜事的になつて行つたのは當然であるが、かゝる創作の手段によれば長塚節の如き有閑人はともかくとして、勤勞生活をせねばならない人々の到底堪へ得るところでなかつた。例へば左千夫の如き子規精神の把持者に在つても、その實生活と創作手段との乖離をどうすることも出來ず、後には次第に浪漫的・身邊雜事の瑣末主義へ移つて行つたのである。これは子規の寫生が、配合・部分々々の寫生の繼ぎ合せ等によつて修正されはしても、周圍に集る人の多くなつてゆくにつれ、作歌數の增加につれてその矛盾は一層擴大されて行かねばならないことを示すものであつた。而して彼はそれを補ふものを短文に求め、更にそれが寫生文になつて行つたものと思はれる。

彼が佐々木信綱から志濃夫廼舍歌集を借覽したのは、三十一年の末頃であらうと思はれるが確かでない。曙覽に關する評論三十二年三月—四月に日本に發表された「曙覽の歌」があるだけであるが、この論文には彼の當時の狀態の曙覽の歌に傾倒すべきものがあつたことを示してゐる。即ちそれが「いつはりのたくみをいふな誠だにさくれば歌はやすからむもの」「いつはりのたくみ古今集以下皆是なり」「古今新古今の陳套に墮ちず、眞淵・景樹の窠臼に陷らず、萬葉を學んで萬葉を脫し、瑣事俗事を捕へ來りて、縱橫に馳驅する」ところにあるばかりでなく、その不遇と貧乏と封建的な貧に處する心とが、自ら貧乏に處し、且つ不遇であることの子規の自覺症に一服の淸

凉劑を與へたものであるが、曙覽の身邊雜事的な寫實主義が子規に與ふる處多かつたことは注意する必要があると思ふ。例へば

人にかさかしたるに久しうかへさゝりけれはわらはしてとりにやりける
にもたせやりたる

山吹のみの一つだに無き宿はかさも二つはもたぬなりけり

に對して「其貧乏さ加減、我等にも覺えのある事なり」といひ、又井戸を掘つた時の吟

濡しこし妹が袖干の井の水の涌出るはかりうれしかりける

に對して「家に婢僕無く、最合井遠くして、雪の朝、雨の夕の小言は我も聞き馴れたり」といふ如きがそれであるが、さういふ點に感じて日常歌・身邊雜事歌への示唆を與へられたものと思はれる。曙覽の歌こそは幕末町人階級の金力を以ての横暴と、封建的な權力の下に追ひつめられた沒落層の溜息に外ならず、それが時代こそちがへ同じやうな狀態を餘儀なくされた子規にとつて精神的な救ひの神であつたことも事實で、例へば曙覽の

たのしみは物をかゝせて善き價惜しみもなくて人のくれし時

について、「曙覽は欺かざるなり。彼は錢を糞の如しとは言はず、あどけなくも彼は錢を貰ひし時のうれしさを歌ひ出せり」と賞讃してゐるが、曙覽のこの金錢に對する觀念は、封建的な金錢賤視から貨幣至上の近代經濟に移る過渡期に生じたもので、恰も子規が「自己の著作を賣りて原稿料を取るは少しも惡き事に非ず(註7)――」とて自由賣買の方法を肯定したのと同じであり、それが一應封建的な金錢賤視によつて生じた文人達の貧を衒ふのに反撥したのでもあるが、こゝでは彼の寫生・寫實が金錢の價値の肯定にまで進んでゐることを見ることができる。

身邊雜事歌はこの年初めて生じたものではなく前年からあるが、しかしこの年のものに

三月十三日蔵へ

十四日お畫すぎより歌をよみにわたくし内へおいでくだされ

三月二十八日秀眞が造れる土の子供を見せたるに

風呂敷の包を解けば驚くまいか土の鑄型の人が出た〳〵

秀眞を訪ひし後秀眞におくる(十一月十七日)

牛を割き葱を煮あつきもてなしを喜び居ると妻の君にいへ

などの傾向を、全然それらと關係なしと見ることはできぬものだ。

しかしこの身邊雜事歌が依然たるそれである限り何の進歩性をもつものではなく、却つて自慰

と呟きの境地へ一歩踏み込んでゐることを見ないわけに行かない。これは今日リアリズムの掛聲につれて、身邊雜事のトリヴヰアリズムを進歩的リアリズムと混同してゐる者の多い際、特にこの事を明らかにしておかねばならない。殊に子規がさういふ身邊雜事的なものを作りつゝも、それを直接に表現する形式によらずして萬葉調によつたことは、彼の貴族的な思想・感情によるもので、彼が大隈言道の歌のリアリズムに感じながらも「調子低くして終に大家たる能はず」(註8)など云つてゐることも、またその作品に於て後の啄木らの生活派と同じ傾向を辿りつゝも精神に於ては全然異つたものとなり、却つて俳句・短歌・寫生文共々一切を傍觀的に見る餘裕派の主張へと突き進みつゝあることを指摘しなければならないのだ。

次に彼の寫生の一傾向たるいはゆる印象明瞭について少し述べておきたい。俳句におけるそれについては先に述べたが、短歌が俳句の延長であつたので、必然的に印象的な傾向を辿つた。

大磯客中（十月九日）

海原は見渡す限り山もなしいづこをさして白帆ゆくらん　（二十五年）

夕されば吹く浦の沖のはてもなく入日にむれて白帆ゆくなり（二十六年）

の初期のものが、三十一年には

潮早き淡路の瀬戸の海狹みかさなり合ひて白帆ゆくなり

の如き印象的なものになつてゐる。いふまでもなくこの傾向には俳句におけるやうに、唯美主義的要素をも藏してゐることを見落し能はないが、こゝには未だ萬葉調からの影響も顯著でなく、表現が率直である點が特色をなしてをり、明治短歌の本領はこゝに在るのではないかと思はれる。しかしその印象主義も形式との矛盾相尅を感ぜぬ程度のものであつたから、徹底したものでないことはいふまでもない。

要するに子規の寫生・寫實は現實主義の一種であつて、それを自然描寫と身邊雜事に用ゐたところに特徴があり、その美の追求は多く感官美にとゞまつてゐて精神美には及んでゐないため彼の故人觀は西行・芭蕉の作品のやうに精神美に偏つた人々のものに及ぶと、例へば西行に對して、まこと・ありの儘を解するやうに思はれるが、實際の歌は百中の九十九までは僞りのたくみであるとなし、(註9)芭蕉に對しても、その生活の苦惱も眞劍なる求道的漂泊の生活も理解せず、芭蕉が形而上の樂しみを俳句に求め、形而下の樂しみを漫遊に求めたとなす(註10)類ひで、彼の此方面への理解の淺薄さを證するものでなくてはならず、したがつて自らの作品をも決して高いものにはしなかつたのである。これは彼が藝術の內容を思想と解せず、趣向・意匠とだけし

か解せなかつた點とも關係をもつてゐるが、同時に人生のための藝術でなく、遊びの藝術として、或は生活より逃避する別天地として、モルヒネをのんで草花の寫生を樂しむやうなものとして發展したのである。それはむろん子規の現實生活と當時の環境によつて生じたものだが、嚴重に批判されなければならない點であると思ふ。

註1　「文學」
2　「九たび歌よみに與ふる書」
3　同上
4　「六たび歌よみに與ふる書」
5　「十たび歌よみに與ふる書」
6　「歌話」
7　「墨汁一滴」
8　「草徑集を讀む」
9　「曙覽の歌」
10　「行脚俳人芭蕉」

二、理智性の排擊

子規は俳句にも短歌にも極力理窟を排擊した。短歌の理窟的要素の發見は先にもいふやうに俳句に於て體得したものであるが、短歌における理窟も當然內容におけるのと、表現におけるのとがあり、表現におけるのはまた更に幾つにか分けることが出來る。先づ順序として理窟とはどういふ意味をもつものであるかを見ようと思ふ。

歌論において彼が理窟を比較的詳しく說いてゐるのは三十一年三月の「あきまろに答ふ」なる一文で、これによると理窟とは「心理學者が普通にいふ如く心の働きを智情意の三に分てば、前日來「歌は感情的ならざるべからず」などいひし感情とは此「情」の一部分にして例の理窟とは「智」の一部分に相當申候。然らば理窟とは「智」の如何なる部分かといふに劃然とその限界を示す能はざれども要するに智の最も複雜したる部分が程度の高き理窟にて、それが簡單になればなる程、程度の低き理窟となる譯にて候。」さうして「低度の理窟は文學的として之を許し、高度の理窟は非文學的として之を排斥する譯に候。」とある通り、彼の標準による程度の問題で、これによつて斯うであるとの說明は彼から聽くことは出來ないのであるが、私の解するところを以て

云つて見ると、内容の理窟は彼の月並俳句におけるやうな淺薄な人生觀と封建的な道義觀、教訓的な意味をもつ道歌的傾向を指すものらしい。けれども俳句においては例へば先に擧げた「つゝしめや火燵にて手のさわること」とか又は「實るほど頭を垂るゝ稲穂かな」などのやうなものもあるが、歌ではさういふ教訓的のものは道歌として別な領域に在るため、それほど理智的なものはない。したがつて子規の理窟排擊も、短歌の分野では主として表現に拘るものゝやうである。

ではどういふ表現を彼は排斥したか？　それは感情を直敍せぬもの、例へば

我せこが衣はる雨ふるごとに野邊の綠ぞ色まさりける

について、雨が降つて綠になつた、或は野邊の綠に雨ふるといふべきを、「雨を原因とし綠の增すを結果とするだに多少の理窟は免れぬに、「毎に」とありては理窟づめの評を下さゞるを得ず、「衣はるさめ」といふ緣語のいやさは又格別なり」（註1）といへる如き、又

青柳の絲よりかくる春しもそみだれて花のほころびにける

について、その感情を直敍せず、「絲」といふ言葉から「綻ぶ」といふ緣語を引出したところを指摘したところにそれを見得る。

實感を本とせぬために徒らに自然を概念化してゐる理窟の歌がある。これは古今集あたりに見られる傾向で、たとへば

袖ひちて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

の如きに對して彼が「立春の日なりしとて其日直に氷の解くるものに非ず」（註2）とて排斥したのは當然である。また推理の理窟とて排したものがある。

星のかげまばらになりぬひさかたの月の光りや空にみつらむ

の如き、「星のまばらになつたのは月光が空に滿ちたからであらう」（註3）といふのがそれで

すみぞめの夕月のかげ暗ければさやかに見ゆる里のともし火

何處より波のもて來し種ならむ鈴菜生ひたり磯の岩間に

等のものは月が暗いからともし火がさやかに見えたとか、或は何處からか波の持つて來た種であらうとかの原因・結果を推理することの理窟で、これを排したのは感情を理智から解放するための手段としてのみ肯定せらるべきである。

打消的の理窟ともいふべきものがある。即ち

たが家も文讀む子らが聲のして隣えらばぬ君が御代かな

ねにかへる森の鴉もとまりけりまだくれはてぬ庭の紅葉に

といふ種類のものは、「隣えらばぬ」「まだくれはてぬ」といふ打消の言葉が理窟臭くなつてゐると云つてゐるが、これらは感情を表現すべき言葉が率直でなく、言語の封建的な類型から脱しきれないために生じたものであるが、子規の革新が一應新時代の言語の科學性によつてゐる以上、かゝる類型を打破せねばならないのは當然といはねばならぬ。其他に譬喩の理窟があり、それには

松浦伯の巣鴨の別莊にて窓含西嶽千秋雪といふ事を

言の葉の花も常磐の窓の外にちとせの富士の雪を見るかな

曾我時致

箱根路のやまほとゝぎす時まちてなくか五月の空もとゞろに

などがあるが、前者に「主觀と客觀の聯結、理窟に墮ちて面白からず」（註4）といひ、後者にとかく詠史といふものは理窟になりて惡しとて、「詠史を作らんとならば其一生の傳記のやうな事を言はずして、題畫の如く或る一場の事實を客觀的に詠む方がいゝ」と云つてゐる。こゝにも繪畫的寫生に傾く彼の主張を見ることができるが、彼のいふまでもなく譬喩の理智に墮した舊派短歌のためには、繪畫的・客觀的に傾いて行くことがそれを救ふ唯一の途であつた。かゝる封建的なものに對しては彼の理論は威力あるものであり、言語の科學性の主張も正しかつたのである。

いはゆる理窟臭き敍法を彼が極度に斥けたのは「も」の字を排斥した事によつても窺知できる。「名月や裏門からも人の來る」といふ句が、暗に表門からも來るといふことを示してゐるために理窟に墮してゐるといつたことは先に述べたが、斯ういふ手段は月並俳句の好んでやつたところで、彼のこの理論は俳句によつて體得したものであるが、短歌における「も」の字の排斥も、それの延長に外ならない。それは

――「も」の字は元來理窟的の言葉にて、俳句などにては「も」の字の有無を以て月並的俗句なるか否かを判ずる事さへある位に候へども、さりとて「も」の字盡く理窟なるにも無之候――

其理窟めきて聞ゆるは二事二物を相對して言ふ意味ながら一事一物をのみ現し他を略したるが爲にして、例へば獸だに子を思ふといふは況して人は子を思ふといふ事を含み、羽ばたきもせずといふは況して飛び去らんともせずといふことを含み、あら鷹もといふは其外の鷹もといふ意を含むが如き者に候（註5）――

と云つてゐるので明らかであるが、それは絶對に「も」が理窟臭いとするのではなく「此獸の歌も鷹の歌も全體理窟づめにしたる歌には無之悲哀感慨を述べたる者と見て」寛假しようといふので、それを彼は左の樣に說明してゐる。

斯く申さば一方にて「すらだにも」の如きを許し、他の方にて「も」の一字を蛇蝎視するは如何との不審起り可申候。いはでもの事ながら主觀的の歌は縱令感情を述べたる者なりとも客觀的の歌に比して智力を多く交へたるは不可爭の事に候。そは客觀的の歌は受身の官能に依ること多けれど主觀的の歌は幾何か抽象して現はすの勞あるがために候。實朝の獸の歌の如き既に全體に於て主觀的なるからに「すらだにも」の語左程理窟ぽく聞えねど全體客觀的なる歌に只々一字の「も」の字ある時は極めて理窟ぽく殺風景に聞え申候。「も」の意善く響けば響く程、益々理窟くさく相成候――併し前にも言ふ如く「梅も櫻も」といふやうに二物以上相對物が文字上に現はれたる場合は理窟臭からず聞え候（註6）

といひ、更に附加して「俳句にては「人もなし」といへる語を「人無し」と同じく用ふれど「人もあり」といふ語を用ふれば「も」の字理窟臭く相成候。これも和歌より來れりと思しく、和歌にて「人もなし」「影もなし」といふは「も」に意味なけれど「……人もありけり」といへば世の中を喜ぶ人もあるが、世の中を厭ふ人もあるといふやうに相對物が多きやに覺え候。從つて理窟くさく成がちにて候」と云つてゐる。さうして

山里の紅葉に遊ぶ一時は秋の日かげものどけかりけり

五百重山霧深からし菅笠のしづくも落つる有明の月

の如きを排斥した。彼は短歌を科學的に分析し、言語の科學性を要求してゐる。そこに從來のものに見ざる優位性があつた。例へば

うなゐ子が小石投いるゝ川のせを蝶二つ三つむれてとぶなり

に對して、礫と蝶との空間上の關係も時間上の關係も分らぬところが缺點で、蝶に礫打ちたるか否か、一方では礫を打ち居り一方では蝶の飛び居るか否か、礫打ちたる後に蝶の飛び來りしか否か、或は偶然に礫打ちたる其場に蝶の偶然飛び來りしか否か、その邊が少しもはつきりせぬと批判してゐる如き、俳句における「本陣の槍」の場合と同じく可なり綿密に敍法の研究をなし得てゐる。これは彼の寫生が繪畫的なものを求めたからで、十七字或は三十一字を描き得る限度とし、より明瞭にその景色情趣を再現せんとするところがその特色であつて、理窟の排斥も印象明瞭もみなそこから發してゐるものである。そして其主張の高調と俳句に於て得た自信と彼持前の押しとがやゝ極端に走り、平面描寫に傾いた。例へば譬喩を理窟として一圖に排擊せんとした如き、明らかに行き過ぎを示してゐる。彼が西行の歌をいつはりの巧みとして斥けた如きは西行の歌が宗教的象徴に傾いてをり、彼が象徴といふことを理解しなかつたによるもので、彼の排した譬喩は多

く膚淺な譬喩であつて、譬喩は斯ういふものと即斷して諷喩の一種に象徴のあることを理解できなかつたのである。

要するに子規の理窟は、彼が月並俳句打破の經驗で得たところで、それを短歌に延用したものに外ならぬが、俳句におけるより一層それの綿密な研究が進められてゐることを我々は見る。この事は短歌の方が俳句より歌形が長いことゝ、その歴史が古いために研究すべき對象物が多かつたことによるものである。俳句・短歌の如き短詩形のものに在つては、いかに其内容を直接に表現するかといふ研究が大切のことである。この點に於て子規の說いたところは正しく且つ有益なものである。けれどもこゝでも子規は俳句におけると短歌におけるとを問はず、古典的形式が直接表現を防げるものと考へず、その理窟的な内容と表現がどういふ社會關係から生じたかを考へなかつたゝめに、それの封建的形態打破に對しては果敢であり得たが、自らは人生にかゝはるところ少き遊戯藝術・自慰藝術の建設に努力するやうな結果に陷つたものである。」

註1「歌話」
2　同上
3「一っ二っ」
4　同上
5「あきまろに答ふ」
6　同上

三、形式と調子

子規が詩歌における調子といふことを認めたのは可なり早く、明治二十二年の「詩歌の起原及變遷」の中でこれに觸れてゐるが、それでは「聲音を結合する以上は從つて調子（ハーモニー）の和合と云ふ事起る。スペッテコロンデとは能く子供の用ゐる言葉なるが、此二句は毎句四音より成り且つ韻脚を備ふる者にして、之を言ふも何となく言ひ易く之を聞くも何となく耳ざわりよし、此の如く殆ど偶然に出でし調子こそ大方は詩歌の始なりしなるべし」といふやうに論じてゐる。しかしそれは漫然と詩歌の調子を論じてゐるので、短歌における調子といふことに開眼したのはずつと後のことである。

明治三十一年ごろ、子規がその歌論を日本に發表した時、當時舊派の短歌をやつてゐた伊藤左千夫は、春園の號を以て「歌は俳句の長き物なり、俳句は歌の短き者なり、三十一文字なるが故に

歌にして十七文字なるが故に俳句なりと思ひ誤り詩形即字句の外に各々異れる節あることを知らざる」を攻撃した。この攻撃は確かに舊來の短歌の立場で子規の歌論の急所を突いたものであつたが、これに對して子規は「――歌俳兩者は必要上其内容を異にしたりとの論の妄なること既に之を言へり。されば歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず、歌と俳句とは只々詩形を異にするのみ――」（註1）といふ見解を執つてゐた。したがつて短歌特有の調子といふことは全然理解せず、「――萬葉は調又は言葉を主とし後世の歌は想を主とするといふも間違なり。萬葉の歌に想を主とせる歌少からず、否萬葉の歌は――思ふ儘に詠みたるからに却て調の高きを致し〻ならん」（註2）といひ、「調子の事は他日詳論すべし」と逃げてゐた。それは「歌は理るものにあらずして調ぶるもの也」といふ桂園調の形式主義に反撥するに急なるあまり、調子といふやうなことに深省する暇がなかつたものと見える。この頃の彼の歌に關する修養は萬葉集についても學校で講義を聽いたり、實朝其他を通しての萬葉觀であり、その他における歌の修業もまだ大したものではなかつた。三十一年七月「五七五七七」なる文を發表したが、それには萬葉集及び八代集の二句切と三句切の比率を研究し、一、のべつ調（句切なきもの）二、十七調、十四調の二種があつて、いづれを優劣とすべきではなく時に從つて用ゐることを說いてゐる。これは短歌定型の追究であつて、上世の人は氣性が鈍く、のろく、氣長く、重々しいから五七調の尻重き歌がその感情に適應してをり、後世の人は賢く、はしかく、氣短く、輕々しいから七五調の尻輕き歌が出て來たと說き、支那でも五言詩は古へに盛んにして七言詩は後世に盛んであり、五言は二と三に分れて尻重く我五七調に當り、七言は四と三に分れて尻輕く我七五調に當るといふやうに分析し、短歌の形式史觀を展開してゐるのは注意すべきである。三十二年には調子といふことについて一層研究したらしく、この年二月―三月の「萬葉集卷十六」には眞淵が萬葉の尊ぶことを說きながら、其作品が古今調なのは古今趣味を去ることが出來なかつたからであると斷じ、「眞淵は僅に〔萬葉の〕趣向の半面を見て調子の半面を見得ざりしなり。萬葉の調子よきは如何なる凡歌といへども眞淵の歌の調子拔けたるが如きにあらず」と云つてをり、

勝間田の池はわれ知る蓮なししかいふ君が鬚無きが如し

に對して「此歌の第二句「池はわれ知る」とあるは「池は蓮無し」といふべき其中へ「われ知る」の一句を挿入したる處最も巧なる言葉づかひなり。後世の歌、此變化を知らざるがため單調に墮ち了れり」といひ

奈良山の兒の手柏のふたおもにかにもかくにもねぢけ人の友

について「殺風景なる佞人を題としながらその調の高きため詞が氣高く聞ゆるなり」と調子に注意をもつに至つてゐるが、更に

このごろの吾が戀力記し集め功に申さば五位の冠

に對して、「戀に骨折る程度ともいふべき事を「こひぢから」といふ一語につゞめたる作者のはたらき畏るべき者あり。此の活用あるため萬葉は常に調子高き事を得たるに反し、古今以後にては詞は總べて古きによるの主義にて全く造語を禁じたるため皆腰拔の歌となりたり」とて、却つて近來の俗謠に調子のよきものあることを認めてゐるが、固定した詞を排して新しい詞を採用することが調子を整へる基であることを發見してゐるのに注意せねばならぬ。

更に同年七月―九月の「歌話」では「――萬葉には俗語方言を用ゐたる歌いと多く、中には漢語を直譯して用ゐたる新語、又は漢語其まゝを用ゐたるも少からず、されど皆能く調子とゝのひて聞ゆるは漢語俗語を恐れげもなく使ひこなせし故」であり、近頃の舊派の歌人の中に漢語俗語を用ゐる者もあるが、多くそれが恐る〳〵使用してゐるので、俚謠俗曲におけるやうに自由勝手に使用されてゐないために不調和であるを免れぬといふやうに進展してゐるが、この文では歌は空間的な趣向よりも時間を含んだものを詠むに適し、俳句はこれに反して時間を詠むに適せず、空間を詠むに適してゐることを發見するに至つてゐるが、「所謂歌よみの歌は理窟に墮ちざれば則ち平凡陳腐僅に文字の末を作飾し却て益々趣味に遠ざかるのみ――所謂新派の歌は複雜なる材料を上三句に籠めて下二句は無用の語を綴りたるが多き故に皆頭重脚輕の病に陷る。殊に俳人の作りし歌は俳句の下に十四字を添へたる如き觀あり。いと見ぐるし」といふ自己批判に達し、既往に對して否定的な見解に達してゐる。これは一面飛躍的な進歩であると同時に、同じ程度の形式主義への背進を示すものでなくてはならないが、彼が佐々木信綱から田安宗武の『天降言』を借覽して、「彼は萬葉の趣味を解するに似たり」と驚いてゐるのもこの年であるので、漸く萬葉調に彼が傾倒してゆく經路を見ることができる。更に三十三年一月の「短歌愚考」では

森の上の朱塗の塔の片へのみ眞白になりて雪晴れにけり

を

森の上に見ゆる幾重の朱の塔の片へ眞白に雪つもりけり

と直して、原句は「上二句に多くの有形物を入れ、却て第三第四は虚字の上に虚字（のみ、なりて、の如き）を加へたれば所謂頭重脚輕の病にかゝりて上下つり合はず。愚考は第二句に「見ゆる幾重の」といふ虚字を入れ、原作第二句の塔を第三句に押し下げ、原作の第三第四句をつゞめ

て第四句としたる故、頭は少し輕くなり、脚は少し重くなりて、一首の釣合だけは保ち得たらんか」と云つてゐるが、「歌に俳句の趣向を取るはよけれど、いひかたはどこ迄もおほまかなるべし。譬へば庭を作るに大庭と小庭との別あるが如し、小庭に小さき石小さき木など數多竝べたるを見て善しと思ひ、そを大庭にまねんとせば、木石の位置は小庭のまゝに眞似するも妨げず、只其木と其石とはどこ迄も大木大石を用ゐざるべからず。小庭の景致善しとて大庭に小木小石を竝べなば小兒の著物善しとて大人の着たらんにも似たるべきなり」といふやうな見解に達し、「一昨年と今年とは少しく考への變りたるは、短歌は俳句の如く客觀を自由に詠みこなすの難き事、又短歌は俳句と違ひて主觀を自在に詠みこなし得ること此二事に候。一昨年は俳句に詠み得る景色は何にても三十一文字に入れ得べきやう信じ候ひしかども、實地經驗を積むに從ひ短歌は俳句の如く輕快なる微細なる景色を詠み難きを發明致し候。乍併俳句に詠みたる趣向は盡く短歌に適中せずと申すには無之、少くとも其半は短歌にも適し申すべく候、もし又俳句に用ゐたる材料のみに就ていはゞ、十中の八九迄短歌にも用ゐられ可申候。其程度は、實地の歌に就きて申より外無之候」斯の如く短歌が占領する客觀の區域は俳句より狹き代りに、短歌が占領する主觀の區域は俳句より遙に廣く候」（註3）といふやうに「歌話」以來の發展をこゝに示すに至つてゐるが、調子といふことを重視して內容を輕んずる傾向を生じ、三十三年佐々木信綱に敎へられて大隈言道の『草徑集』を讀んだが、客觀的景色を敍ぶるに長じて世の常の歌よみではないが、他の歌人と一般に調子低くて大家たる能はず、もし言道の趣味を歌ふに宗武の調子を以てせば近世無二の歌人たりしならんと云つてゐる。初期の內容主義が次第に形式主義に變じてゐることをこゝに見得るが、次に讀んだ丸山作樂の『磐之屋歌集』についての感想は、作樂の歌が調高くして俗人に解せられざりしことを說き

みとらしの梓の眞弓ひきしぼり君に射向ふ臣を討たばや

三はしらの神にこひのみぬさまつりみつのから國むけてはや來む

等の歌を俗氣なしと賞揚するに至つてゐる。

以上の子規における形式觀の發展を要約して見ると、大體初めは內容主義であり、後には調子重視主義になり、明らかにそこに既往を否定するの見解に達してゐることが看取される。而してこの調子第一主義はいふまでもなく彼の歌が寫生及び趣味の配合主義から、身邊雜事の瑣末主義、懷古主義に推移したことゝ不可分の關係にあるものであり、それがやがて行詰りに達すれば、後の左千夫に見る如き寫實的浪漫調に傾くのも當然でなければならなかつた。さうしてこの事は子

規の理論のみの矛盾によるものでなく、實に當時の社會情勢と子規自らの社會的地位との矛盾として認識さるべきであらう。子規自らも短歌自身も未だそれを覺るに至つてゐない。短歌がそして文學が社會と個人との矛盾を感じ出したのは、子規が死んでから數年を經た啄木の時代からである。

註1　「人々に答ふ」
　2　同上
　3　月日不明坂井辨宛書簡（改造社版子規全集十六・四三八頁）

第四章　新體詩・小說・寫生文

一、新體詩の運動と其作品

すでに述べたやうに、子規は常に新しい文學を創成するよりも古い完成されたものを求めてをり・小說より和歌・俳句、新體詩より漢詩といふやうなものに傾き易い保守的な特性をもつてゐた。彼が新聞に發表さるゝ文學の中では漢詩が最も完成されたものと思ふといへるが如きはさういふ特性を自ら語るものであるが、二十二年の「詩歌の起原及變遷」に於ては漢詩・長歌・短歌・俳句を論じ、それらの體に據らなければ詩でないやうに思ふのは誤りで、上手にさへ作ればその詩體がよき樣に思はれるものであると說いてゐるのは革新的な面を現はしてゐるが、同時に新體詩を難じて「彼の所謂新體詩歌の如きは詩歌の改良者にあらざるなり、角を直さんとして牛を殺す者なり」と云ひ、「今の日本に一新詩を作り出す詩人は一人も居らざるか」と云つてゐる。斯く新詩を求めつゝも新體詩には好意を示さなかつたが、二十四年の虛子宛書簡（この書簡は新年の祝詞と同封してあるが、「月の都」のことを書いてあるので、二十四年のものであることがわかる）

に「新體詩が面白きとかつまらぬとか申事は詩體(フォーム)の上にあらずして觀念(idea)の上に屬し申候、其觀念さへ面白き者なれば如何なる詩體にても面白きこと間違なし、僕の持論は一寸こゝではいひ盡し難けれども七五でも五七でも何でも彼でも左樣に一定(モノトナス)したるものは今日の學者(學問教育ある人の意なり)間に行はるべきものならずとの考なり」と云つてゐることは、その論の當否は別として小說の述作と共に、彼がいはゆる眞成詩人・學者等の手にそれが創作せられねばならないといふ主張をもつに至つたことを見るに足るものがある。

二十三年に彼が作つた新體詩がある。

月下聞虫

ひとり迷ふたむさしのに
招くと見しはむら尾花
きぬたはいづこ家いづこ
ふんで行かれぬ虫の聲
たゝずむ我に露やおく
袂の上にきりぎりす

見まはす原に秋の月
ひとりしよんぼり照らされて

朝顏

つきぬはなしのきぬ〴〵に、ひとりたゝずむ門柱、君の姿は朝霧に、かくれて見えてほのぼのと、垣根に咲くは夕顏か、名もよく似たる朝顏の、花の一枝だきしめつ、寢みだれ髮をかきあげて、あらねたましや花の色

といふやうなものであるが、大體において二十九年以前の彼の新體詩に關する業蹟は見るところがない。新體詩に關してやゝ意識的なものゝ見られるのは二十七年の「文學漫言」であつて、それでは韻文と散文の研究を發表し、大體韻文は文學的なものが多いに反し、散文は非文學的なものが多いが、これを地域的に見ると西洋は散文國で東洋は韻文國であり、人事を敍するには散文に多く天然を敍する者は韻文に多いといふ類推に達し、西洋にも無韻の詩あり、支那にも無平仄の詩があると指摘して、新しい詩は必ずしも傳統に據らねばならぬことはないと云つてゐるのは達見と稱すべきである。しかし彼の藝術を社會の發展との聯關に於て見ることの出來ない癖がこゝにも現はれ、近代文學が人事を取扱ふ文學であり、したがつて形式も散文化の傾向を辿るもの

であつて、詩歌といへどもこの散文化の列外に在るものでないことは全く彼の關知せざるところであつた。これは、一に社會情勢の然らしむるところであつたとはいへ、革新者としての子規の態度を不徹底ならしめた。が、初期の彼の新體詩及び新體詩觀は以上に述べたやうな狀態だつた。

然し二十九年の八月から十一月へかけて越智處之助の名で日本に發表した「文學」なる文には、他の文學に關するものゝ中に新體詩に關する文が多く交つてゐるが、この文でまづ注意せねばならないことは彼が散文に對して韻文が下位に在るものでないことを力說し、それが「散文より韻文を重んずるのではなく、世人の小說を評して韻文を評せざる者多きに對して權衡を保たんと欲するのみ」と云つてゐるのは、當時の文學の六勢が漸く散文に傾いてゐたに對しての抗議で、貴族的なものに執して新時代のものに反撥せんとする彼の志向を見ることが出來るが、同時にこの時代に初まる彼の新體詩への關心が、韻文に力點を置く新體詩を目ざしてゐるものである事も肯かれると思ふ。卽ち「――新體詩も亦歩を進めぬ。一時喧かりし詩形も猶七五調を出でず、而して其七五調は復、山巽軒等が曾て唱へし新體詩の如き幼稚なる者に非るなり」「早稻田文學には五七調卽ち長歌調のものを載せたり。要するに詩形には種々ありてそれ〴〵の場合に適當すべし。必ずしも五七、七五に限るべからず。必ずしも長短句、變調に限るべからず。只能く詩想と詩形と相適合せば則ち佳作ならんのみ。」など云つてゐる。その詩形が、七五調、五七調、もしくはそれに準ずる限りの自由さを要求してゐるものであることが想像に難くないことは、字餘りの新體詩、和歌を辯護しながらも、「字餘り句、長短句に句調惡く歌ふに堪へざるものあるは言ふ迄もなけれど、さりとて字餘り句、長短句にして却て句調善きもの少からず」といふところにその自由さの欲求を明らかにする。

殊にこの文での彼が、新體詩に對しての妥協的態度は蔽ふべからざるものがある。それは彼の新體詩評の隨所に現はれてゐるが、就中「今や諸種の文學美術日を追ふて隆盛に赴くの時に當り獨り專門新體詩家無くて可ならんや。來れ新體詩家、天上の美人汝を待つこと多し」といへる如き、或は帝國文學に發表した井上巽軒の「比沼山の歌」を惡詩なりと貶したり、鐵幹の『東西南北』を擧げて「東西南北調は古調派新調派といへる者と並列して毫も遜色あるなし」といふ如き、舊いものを排して新しきに就くことによつてそれを止揚し、古典的・長歌的新體詩の創成を目ざしつゝある意圖を明らかにしてゐる。

抑も曾てそれを排斥し、惡罵を投げつけて快を味はつてゐたところの子規が、かくも妥協的になつて來たことは如何なる原因に基づくか？　いふまでもなく當時の新體詩運動が、子規及びそ

れと同じやうな保守的分子の嘲笑と冷罵の裡に、着々とその存在權を確認せしめたゝめに他ならないと思ふ。『新體詩抄』『新體詩歌』によつてその第一歩を踏み出したわが近代詩は、十八年湯淺半月の「十二の石塚」、二十年の美妙・紅葉編の『新體詞選』及び『伊良都女』による女性の詩の募集、二十一年の落合直文の『孝女白菊の歌』、二十二年大和田建樹の『いさり火』及び『しがらみ草紙』の創刊、二十三年宮崎湖處子の『歸省』、二十四年梅花の『新體梅花詩集』、透谷の『蓬萊曲』、鷗外の『水沫集』、及び『早稲田文學』の創刊、二十六年『湖處子詩集』及び透谷・藤村らによる『文學界』の創刊、二十七年以後における建樹・泡鳴・醉茗・玉茗らの運動、二十九年には鐵幹の『東西南北』といふやうに着々地歩を堅めて行つたのであるが、これらの運動が子規にも遂に新體詩も詩であるといふことを認めさせずには置かなかつたのである。子規の見透しは、それが新しきものへに關する限り精確を缺くのであつた。二十九年秋には上野公園で催された新體詩人の會合に出席したが、三十年には藤村の『若菜集』が出版されるに至つた。子規はこれに對して「新體詩を眞面目に作る者は藤村なり。新體詩の詩想に俗氣を脱したるものは藤村なり。新體詩の字句の散文的ならざるものは藤村なり。若菜集收むる所長短數十篇盡く悽楚哀婉紅涙迸り熱血湧く底の文字ならざるはなし」（註1）と評してゐるが、そこでは今までに見なかつた新體詩の確認を明らかにしてゐる。新體詩は遂に子規に存在を認めさせたのであるが、然し彼は無條件でそれに屈服せんとするものではなく、自らの主張を以て對せんとし、若菜集が抒情に傾いてゐるが、敍事を借らない抒情は變化が少いと論じ、森羅萬象は鶯と蝶との外に愛すべく憐むべきもの少からず、人間萬事は戀と藝のほつれとの外に泣くべく喜ぶべき者少くないのに、藤村の詩は變化に乏しいと評してゐる。これは彼のこの頃の俳句的な修養による批評で、彼の作品と照し見て、俳句的短歌的な新體詩を求めたものであることが推察できるし、この頃の彼の俳句の方の行詰りと共に考へて興味あることであり、「時代的に見て俳句と和歌との中間に位する」ものだといふ全集編纂者の言葉も何かを示唆するところなくはないやうである。

彼の新體詩を作品から見て行くと、二十九年八月五日の「鹿笛」を初めとして、一月に二三篇ぐらゐづつ發表してゐる。「鹿笛」は蘭更の「鹿笛に谷川渡る音せわし」を敷衍擴大した長篇であるが、これでは彼が後に若菜集に加へた敍事敍景を借らぬものは變化が乏しいと云ふ主張が相當はつきり示されてゐて、獵師が山へ分け入るところは敍事敍景的であるが、雄鹿を擊たれた後で雌鹿が雄鹿を慕うて歩くといふところは抒情的である。さうして藤村らが好んで浪漫的な變愛を詠ふに傾いたに反し、彼の新體詩は動物に假托してやゝ人倫的な夫婦愛とか慈悲とかを含ましめよ

うと意圖したらしい點もある。この傾向は次に發表した「父の墓」にも見られるが、表現の上における長歌的な手法も可なり明瞭に出てゐる。例へば「鹿笛」で

かたみに心　かはらじと
契りしことも　なか〳〵に
思ひます穗の　絲薄

や

うらみもこよひ　いは橋の
覺束なくも踏み渡る

といふやうに、古語に捉へられて自由暢達な言葉の驅使が見られない。自由な新時代の言語を俗として極力排した彼としては當然のことであるが、そのため彼の新體詩は、新しい詩よりも長歌に近くなつてゐる。情情的な部分も概念的類型的なそれで、誘情的なものが缺乏してゐる。所詮この方面の作は失敗といふ外はない。

次に寫生的な作品を見て見よう。同年九月發表の「小虫」、十二月發表の「病の窓」などはこの種類に屬するものであるが、この方面は俳句における寫生の修業があるだけに前者ほど疵が目に立たないが、俳句的なものゝ引のばしであるだけに平淡なのは免れがたい。例へば「小虫」中の「蜻蛉」を擧げて見よう。

ほがらかに照る　秋の日に
赤き衣を　輝かせ
蜻蛉群れ飛ぶ。其下に
晴れて筑波の　山低し
頭を西に　つらねつゝ
共につい行き　つい戻る
穗なみ揃へし　田の上に
其影落ちて　いそがはし
これは彼の二十七年の
赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

の延長であるが、たゞ言葉を多くしたといふだけで、詩としての價値の高いものではない。「病の窓」で窓邊に來た蝶の身の上を憐れんでの呟きと、蝶の答への

廣き宇宙にものはあれど
苦しみ多く樂しみの
少きところ、君が住む
人間界の如きはなし
吾等が受ける樂しみは
今の今なり。今を置きて
思ひ出すべき昨日なく
推し測るべき明日もなし
――
あはれよ、君よ。人間の
熱着多き心もて、
五慾の外に風に乘る
吾等をはかること莫れ

などあるは、佛教思想を借り來つて表現したものであるが、それが借りものであるだけにとつてつけたやうで、強く迫るものがない。窓に來た蝶を哀れむといふ趣向もありふれたものである。

總じて彼の新體詩は形式の上の整正といふことにのみ制せられて、新鮮・自由・奔放な點に乏しい。就中二十九年十一月の「洪水」なる敍事詩は二百行以上の長篇であるが、森の神が川の神・雨の神を誘つて洪水を起すといふ構想の幼稚であるのは勿論であるが、しかしこの詩はその內容形式に於て感心出來ないものである。卽ち

政府眠りを貪りて
怠慢の罪許し難し。
木の濫伐を禁ずべし。
河の狹きを廣くせよ――

などあるは、彼が極力痛罵排擊したところの『新體詩抄』調で感心できないが、しかし

利に使はるゝ世の人は
明日を計らず。節を賣り
賄を買ふ役人は
日雇の如く責を負はず

といふあたり、且つ三人の神が洪水といふ強力な手段によつて彼自らがその中に在つたところの人民塗炭の苦しみを救ひ、政府に林政河政の改革を誓はせるといふところは、いふまでもなく彼の生活體驗をこゝにあらはすものであり、當時の官僚の腐敗をより強力なものによつて廓清するといふやうな彼の思想を示してゐなくもない。殊に川の神が

人多く住む都邊に
何面白き事ならん
汽船は波をひるがへし
水の面に煤滿てり

といふ邊りや

流れをたのむ工場の
大水車しかけつゝ

――

煙突の影、鐵橋の
影のうつるを見る時は

引返し來るうたてさよ

といふ邊りには、産業革命の自然破壞に對しての、彼の抗議ともいふべきものが見られるが、これは詩的價値の有無よりも、子規の資本主義文化に對する反感を現はしてをり、且つ彼の自然讃美が何に基づいてゐるかをも明らかにしてゐる點で興味がある。後に長塚節が『土』を書いたのも、斯ういふ反資本主義乃至反都會主義によつて、資本主義的都會文化に對して農村民のミゼラブルな姿を示して抗議したものであることは先に示した子規の反都會的な言葉（そこでは一應藝術のためといふ大義名分によつてはゐるが――）並に彼と其一派が都會的な惡魔と目したところの硯友社文學に對する呪詛、赤木格堂の

春日野はな燒きそ野守都なる博文館のしこ文を燒け

といふやうな言葉によつて類推できる。かゝる立場で見る時にのみ彼の新體詩はその幼稚さと表現の蕪雜さにも拘らず研究の對象たりうると思ふ。

其他二十九年の「筆」に見るやうに、純眞な乙女を題材にして小説を書くといふやうな假空事を詩にしてゐるものもある。その末尾に

さらばよ、少女。他日われ

文學者の名を　殘しなば
そは皆御身の　いさをなり

などあるところは、彼の女性觀が婦女子を對等の者と見ず、男性の附屬物と見るやうなところを現はすと共に、文學のために人を犧牲にするといふやうな思想も見られなくもないと思ふ。又同年の「四季」は春夏秋冬の四季を擬人化し、春にくはし女神と少年を點じ、花束の贈答をもつて春の季感をあらはさんとしたものらしく、彼の小説『花枕』におけると同じ構想を見るが、幻想的・童話的なものである。夏は都離れた埴生の小屋に住む夫婦の名利の外の生活を描いてゐるが、これも甚だ概念的で、恰も小學校の修身の教科書を讀むやうな感じがする。殊に末尾の我子に向ひ「極樂と、人の歌ふは我が上ぞ」といふあたり、月並に墮してゐる。秋には女神の呪咀によつて桐の一葉が落ち、草木が紅葉するといふ構想により、それに功名を求める壯士を配してゐるのは謠曲などから得たものらしく、冬には嵐を起す男神と狂へる少女を點綴し、男神が眠れる少女の額にキッスして立去ると「少女はがばと倒れけり」といふやうな敍し方をしてゐる。この四篇は一つのものによつて貫かれてゐず、且つ考へ方も幼稚である。同年の「音頭の瀬戸」も謠曲知盛などの燒直しで感心できず。その外二十八年出征中の取材に係る「金州雜詩」七篇、一年中の出來事を書いた「明治二十九年」などといふものもあるが、詩としては少しの價値もない。

三陸海嘯

太平洋の水湧きて
奥の濱邊を洗ひ去る
あはれは親も子も死んで
屍も家も村もなし

人すがる屋根は浮巢のたぐひかな

といふやうに、一樣に俳句が附してあるが、新聞の雜報を讀むやうで何の感じもない。

けれども彼は其多忙な生活の中に、多少は新體詩を研究して見ようといふ意圖も持つてゐたらしく、三十年には「新體詩押韻の事」などといふ研究を發表し、韻を踏むといふことを主張してゐるが、それによると日本語は總て母音を以て終るものであるから、支那・英國の語などとは稍々異り、其量に於ても三説があり

一、最後の母音のみを韻とする者（あ、か、さ、た、な等皆同韻なり。此説に從へば僅に六種に止まる。卽アイウエオンなり）

二、最後の一字だけを韻とする者（「い」と「い」、「か」と「か」、「ぶ」と「ぶ」と、「ん」と「ん」、「きョ」と「きョ」の如し、此説に從へば韻の種類八九十ある筈なれど實際に用ゐ得べきは四五十に上らざるべし）

三、最後の一字と其前の字の母音とを韻とする者（「きん」と「りん」、「つく」と「すく」、「よる」と「のる」の如し。此説に從へば韻の種類は非常に增加す）

さうして彼自らは第二説を是とするものであるが、もしすべつて一ころんで一の如く語尾を長く引くとすれば韻の量多きに過ぐるから此場合は第一説をとると云つてゐる。さうして押韻が文字を束縛し從つて思想を束縛するは作者に與ふる害であるが、利益もあると云つて

第一、狹き範圍に在れば却つて自己の技倆を現すに適はすること

第二、言語の範圍を限らるゝがために却つて思想の上に惑を生ぜず早く作り得ること

第三、限られたる韻語を探して韻語より思想を得るがために却て奇想警句を得ること

等を數へ、「吾は調子の上より新體詩に韻を踏まざるべからずとは言はず。されど今の散文的新體詩を韻文的ならしむる一方便として韻を踏むことを勸むる者なり。韻を踏みたるがために佶屈聱牙ともならん、支離滅裂ともならん。佶屈聱牙も支離滅裂も刺激劑として必要なりと信ず」と結んでをり、三十年は「韻さぐり」といふやうな仕事もしたが、これによれば近代文學の散文化の傾向に對する反動的なものが見られるのみならず、作品においても反對に形式が內容を束縛してひからびた潤ひのないものにしてしまつてゐる。その韻を踏んだ作品を見ると三十年一月發表の「老嫗某の墓に詣づ」「田中館甲子郎を悼む」「古白の墓に詣づ」二月の「子の愛」同十一月の「微笑」等がある。前述の如くこの年一月から「韻さぐり」をなし、それを机邊に置いて詩を作つたのだが、さういふ自ら求めて窮屈にする考へ方が、詩想を暢達にするものでないことは考へなかつたらしく、そこにも俳句・短歌の革新者らしい彼の一面をあらはしてゐる。韻を蹈んだものには

浮世は汝に　背きしと
　汝一人こそ　思ひけめ
汝に背きし　ことをゆめ
　知らず、浮世も　我も人　（「古白の墓に詣づ」）

といふやうなもので、押韻の配置はいろ〳〵あるが、要するに彼の努力が單なる言葉さがしに終つて、そのどれをとつても見るべきものはない。

最後に新體詩において試みた彼の詩形を一瞥したい。形式は大體五七乃至七五によつてゐるが、

中には「新年」なるものに見られるやうに

『うれしけなりや、女の童
　語れ、女の童、語れ。
　いかに新年の　うれしきかを
　なぜに新年の　樂しきかを』

のやうに八六調などを試みてゐる。けれども大體において五七、七五調に終始してゐるのは、俳句・短歌におけるやうに古典的な形式に偏らうとする意圖を明らかにしてゐるものである。

彼の新體詩は三十一年十二月ごろで終つてゐる。三十年には「俚謠に擬す」といふ子守歌のやうなものがあり、三十二年には「內地雜居」といふやうなものがあるが批評をするまでもない。またそれ以前に「戈」といふ軍歌調のものもあるが、これも批評をするに當らない。彼のために名譽の作品でもないと思ふので擧げないことにした。たゞこの三十一年には二月から「歌よみに與ふる書」を初めとし、歌論を發表したり歌を作つたりしてゐたことを附記しておきたい。

これを要するに子規の新體詩は、近代詩の內容のために自由な表現を欲するのではなくて、古典的な韻文の精神を基本として內容を選ぶといふ態度である。散文と韻文を對比することになると彼はいつも韻文に傾き、それを庇護するものとなる。近松の曾根崎心中における道行文を阿房陀羅調と罵倒したことは痛快だが、何の制約のために阿房陀羅調になるかを今少し考ふべきではなかつたらうか、それを考へぬところに聰明な彼としての時代に背馳する宿命的なものを見出すことができると思ふのだ。所詮彼は俳句・短歌の革新者であつて、文學の革新者ではなかつたといふ評言を改めて肯定しなければならないことを遺憾に思ふ。

註1「若菜集の詩と畫」

二、小　說

子規が作つた小說を年代順に表示して見ると次のやうになる

題　名	執筆年月	發表年月	發表機關
龍　門	明治十八九年頃カ	――	――
月の都	二十四年十二月―二十五年二月	廿七年二月十一日―三月一日	小日本
一日物語	二十七年三―四月	廿七年三月二十三日―四月二十二日	小日本
當世媛鏡	――	同六月―七月	小日本

月見草　三十年二月　――――
花枕　右同　卅年四月　――――
曼珠沙華　卅年十月　――――
我が病　卅三年四月　――――

右の中『龍門』は習作のやうなもので評するまでもないものであるから、其次の『月の都』から順に見て行かう。この小説が露伴の『風流佛』に倣つたものであることは先に述べたが、この主人公は高木直人といふ青年であつて、水口家の令孃浪子を戀して心中をうちあけるが、浪子の父が直人のやうな白面の書生でなく、紳士か法學博士に嫁づけようとし、やがて浪子が結婚する話を聞いて直人は出家をし、名を白風と改めて佛に仕へる身となるが、道に徹することが出來ず、山を下る時浪子の乳母に邂逅して浪子が自殺を圖つたこと、それは救はれたが病んで死んだといふこと等を聞き、直人も浪子を戀ふるあまり氣が狂うて天へのぼるといふ筋である。『風流佛』が發端から十二に章を分けて、それに法華經方便品によつて如是我聞・如是相・如是體等の題を附してゐるが、『月の都』は上・下に卷を分ち、各一卷を易の二卦に、其一卦に六爻を附屬させ、合せて十二爻となしてゐる。その形式に於て『風流佛』に倣うてゐることがわかる。

篇中の人物を云へば直人は『風流佛』の珠運に對比さるべきであらうが、珠運がお辰の境遇に同情して戀を感じ、宿屋の亭主に結婚を勸められて其氣になる經緯は、自然に描けてゐるので讀者にも其氣持が肯けるが、これに反して直人が初對面の浪子に戀する條はまづい〻としても、その花見の宴會の庭で浪子に戀を打ちあけるところはあまりに唐突で自然さがない。失戀してからの浪子と直人の動作も尋常でなく、あまりに概念的に揑ちあげられてゐる。殊に白風が修行中迷ひを生じて下山するといふ精神上の苦悶の描寫なども、眞率人に迫るものがなく、狂うて鉢叩きをするところは惟然などの事をとり入れたものであらうが、概して人間性の描寫に缺けてをり、古文學にあらはれたやうな不自然な人間を再現したといふ批難はまぬがれないと思ふ。最後の天上するといふところは謠曲の羽衣などの影響が濃いが、それだけに文のために內容を束縛されてをり、こゝにも彼が古文學にのみ執して、近代文學についての理解の缺如が見られるやうである

『風流佛』では珠運が風流佛の聲を聽く夢幻的な場面があり、風流佛の聲がお辰のそれが將た窓外の子守の鞠唄か、幻聽と幻影の裡に讀者を引入れるところが其文の妙と相俟つて作の不自然さをも救つてゐる。『月の都』の直人は、坐禪觀法中に浪子の幻影に惱まされるところが風流佛の前述の場面に似てゐるが、珠運の裸身の女佛を眼前にしての夢幻境とちがつて、直人のそれには、夢

幻にすぎて其名の白風の風のやうに捉まへどころがない。露伴は西鶴ばりの風流佛の中にも、明治時代に漸く人々が關心をもつて來た裸體美人を點綴してそこに一脈の現代味を現はすことを忘れなかつたが、子規のものにはその用意が少しも見られない。彼が世評などを顧慮せず書いた點は壯とせねばならないが、「自分勝手に書いた」「文體でも何でもが當時のものと違つて居つた」（註1）點は十分に認められると思ふ。彼の近代文學に對する理解の不足が、小說を不成功に終らしめ、したがつてその蹉跌が殆んど宿命的に俳句といふ小さなものゝ革新者として彼を追ひこんだものとも考へられる。

『一日物語』は『月の都』に次で發表されたもので、捨子を拾はれて小僧から仕上げて仙臺に小さな呉服店を出して貰つた男が、本店から羽後の横手に使を頼まれ、且つ出發間際に父から羽後の六郷の五兵衞といふ人が病氣だから會つてやつてくれと云つてくる。二つの用を兼ねて汽車に乘ると、隣の腰掛にゐた三十四五の男があつたが、一方の隣にゐた女がその男が怪しいと彼に敎へたのをキツカケに心安くなり、連れ立つて横手へ行くのであるが、横手と見せかけて女の兄の家といふのへ泊る。夜中に眼をさますと女が兄と話してゐて、障子の際から窺ふと男は斧を研いでゐて、女は傍で「殺しておしまひよ」と云つてゐる。生きた心地もなく際をうかゞつて飛び出したが捕へられ、だん〳〵話してみると殺さうと話してゐたのは犬のことで、汽車の中で怪しいと云つた男は前にこの女の欺したことのある者で、一人では何かされるといけないので同行したものだといふ落があり、結局五兵衞方へ赴く途中、人の話で五兵衞が實は彼の父とわかり、訪ねて見ると一時間前に息を引取つたといふところであつたといふ話を、三四人の書生が雜話してゐる時其中の一人が語り出すといふ筋で、恰も江戸時代の草艸紙ものと同じで、批評までもないものである。場所を仙臺や秋田にとつてゐるのは、この小說を執筆した前年の夏、奥羽旅行をしたのをそのまゝ舞臺にとり入れたものだらうが、感心した作物ではない。

『當世媛鏡』は『一日物語』と同じ年の夏執筆發表されたもので、前のものと同樣會話を口語文で、行文を文語で書いてあるのは、彼の文が言文一致に推移した經過を示してゐる。この副題には最初「島田と束髮」と書いてあり、後に發表された時はその副題は省かれた。しかしその副題によつて內容が推されるやうに、婦女子によつて時勢相を描かんと意圖したものゝ如く、大した作ではないけれども子規を知る上に於て興味あるものである。

槍一筋の主と生れた片間千之亟は、時勢によつて公債證書を握りしめて消極的な生活をしてゐるうち、清といふ女兒を遺して死んだが、清は許婚の小萩才吉の學費のために料理屋に女中奉公

までするが、才吉は自己の成功のために金滿家の娘中谷たく子と結婚する。清は自らの戀を讓つて尼になるが、たく子と才吉の仲の睦じいのに、一旦犧牲になるつもりでゐた心も亂れ、悶えて自殺するといふのであるが、封建的な義理とか許婚とか或は主人思ひの下婢とかいふことを彼がどのやうに重んじたかゞ窺はれ、新時代を描寫しながらも新しい作者の意識が見られない。同じやうな筋によつて成つてゐる二葉亭の『浮雲』や少し後の『其面影』と對比して見るとその相違がよくわかる。『浮雲』では新時代を察して自己の立身出世を圖る本田昇があり、『其面影』には葉村幸三郎があつて、ある程度まで其俗物性が暴露されてゐるが、『當世媛鏡』でそれに似てゐるものは川瀨山次郎といふ金貸であるが、性格がよく描寫されてゐない。お清が下女の奉公するのも主人のためでなく金のためであり、宿の主人が客へ辭宜するも金、其他あらゆることが皆金で左右されることを悟るといふところに、彼の新社會への認識が見えるが、折角のその新社會觀も他の處とそぐはぬ唐突なものとなつてゐるのは、彼のそれに對する意識の明確でないことをあらはしてをり、その當初附した副題より考へて、彼としては舊道德の側に立つて時勢相を批判せんとしたものと見て然るべきであらう。

『月見草』は未完のものであるから除いて、次の『花枕』は三十年春陽堂の求めによつて書いたもので、『新小說』二年四卷に發表されたものであるが、彼が人の請に應じて作つた小說としては唯一のものである。上中下に分れ、神の使である光と匂が、下界に飛んで來て美しい花の褥をこしらへてゐると、そこへ繼母に虐待されてゐる少女が來て、このやうな美しい花の上で死にたいとつぶやくところへ、神が光と匂を從へて下りて來て少女を天上へ連れて行つて人間苦から救はうとし、その途中で少女は自分一人で行くに忍びず、同じ運命に在る妹を連れて行かうとし、光と匂のとめるのを振り切つて身を落すと、忽ちもとの花の上に落ちたといふ象徵的な作品である。大體が幻想的な趣向で、內容にも表現にもあまり新時代的な意識が働いてゐるとは思はれないが、病苦と生活苦のために逃避的になつてゐる彼を知る上に於て興味があるもので、いふまでもなく花の褥や神や匂や光やは美神であり、人間苦を逃れて天上界に逃避しようとする彼の理想を象徵するもので、二十八九年以降の逃避的な心境と、自然への憧憬の意を明らかにしてゐるものである。

『曼珠沙華』は十一回に亘る相當長いもので、言文一致で書かれてゐる點が興味がある。此の小說が三十年のものとすれば、小說において言文一致に移つて行つたのが他の文章より最も早いので、他のものでは三十一二年にやつと言文一致になつてゐる。これは小說ではその性質上文語體では描寫が十分できなくなつたことをあらはしてをり、この言文一致への推移は、むろん彼に在つて

は明確な意識を缺いてをり、いはゞ最後まで拒んだがどうしてもさうせねばならなくなつたことを明らかにする。

以上の外に三十三年の「我が病」非風との合作に「山吹の一枝」などいふのがあるが、未完のものであるから省略するが、以上によつて子規が描かうとしたものを推測すると、『月の都』『當世媛鏡』『曼珠沙華』等において皆婦女子は弱い者、男性の犠牲になるものといふやうに解釋してゐる。これは彼の女性觀を表白するもので、彼が其友新海非風が戀の勝利者になつてから疎遠にしたことも、碧梧桐の戀愛談を冷かしたり(註2)したのも、「在來の東洋的習慣に釀された信條を出でなかつた」(註3)といふよりも、封建的な女性觀によつてゐるのはむろん否まれないが、そればかりではなく彼が例の負けじ魂から人の幸福を喜ばなかつたことゝ關係がありはしないかと思はれる。彼が小説を書いていつも戀愛に拘はることになると失敗してゐることは、さういふ戀愛に對する無理解が與つてゐるものと考へられる。

要するに子規の小説は、當然のことゝして新時代に觸れつゝも其意識は却つて固定した道德に左袒し、新しいものに嘲笑する意をもつやうになつてゐる。それはもちろん彼の思想の一部として、彼が新體詩や言文一致に反撥したことゝ聯關して見られなければならないのはいふまでもなく、それは綠雨などに見られるものほど辛辣でないにしても、それと似た封建的な思想の膠着を見落し能はない。小説は近代の主流文學であり、彼の小説への失敗はいはゞそれに全力を用ゐること能はなかつた理由にもよるので一概には云へないが、怠らずやつてゐたら一方の作者になつたらうなどといふ論者もあるが、(註4)私は與することができない。たゞ小説を作るばかりで、何ら進歩的な意義をそこに齎さぬとすればいはゆる小説書きと何の選ぶところがあらう。斯ういふ觀方はもう影を潜むべき時期だと私は思はずにはゐられないものだ。

註1　「幸田露伴・河東碧梧桐會見記」(『俳句研究』昭和十年一月號)
2　河東碧梧桐氏『子規を語る』二〇六頁參照
3　同上
4　藤川忠治氏『正岡子規』四七八頁參照

三、寫生文

寫生文なるものは俳句・短歌における寫生が古典的形式と相尅し、形式が無政府的に破壞されたところに生じた散文であるが、子規のこれの創作は未だあまり見るところなくして歿し、その門

下によつて大部分仕上げられたものである。子規のものでこゝに擧げんとするものには、寫生文とはいふべからざるものもあり、小品文として扱ふべきが適當のやうであるが、寫生文の後の展開と脈絡があるので、一切の小品文を以上の標題の下に一括して見てゆくことにした。

小品文・寫生文を通じて最も早いものは「小園の記」であらう、三十一年十月の執筆にかゝり、彼の根岸の家の庭の一年春夏秋冬の變遷を簡潔な筆で寫生したもので、彼の自然に對する憧憬の念を遺憾なく現はしてゐるが、寫生的な要素より俳文などの影響が相當濃く、庭の處々について一句づつ寫生の句を詠んでゐるのが珍らしいが、彼が俳句の表現に滿足することが出來ず、散文的な自由表現によつたものと寫生文を觀てゐる私は、その推移を示すに足る形態をもつものとしてこれを見る。

今迄病と寒氣とに惱まされて弱り盡したる余は此時新たに生命を與へられたる小兒の如く此より萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛び來りて垣根に花をあさるを見てはそゞろに我が魂の自ら動き出でて共に花を尋ね香を探り物の芽にとまりてはしばし羽を休むるかと思へば低き杉垣を越えて隣りの庭をうちめぐり再び舞ひ戻りて松の梢にひら〳〵水鉢の上にひら〳〵一吹き風に吹きつれて高く吹かれながら向ふの屋根に隱れたる時我にもあらず惘然自失す。忽ち心づけば身に熱氣を感じて心地なやましく內に入り障子を閉づると共に蒲團引きかぶれば夢にもあらず幻にもあらず身は廣く限り無き原野の中に在りて今飛び去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて何處ともなく數百の蝶は群れ來りて遊ぶをつら〳〵見れば蝶と見しは神の子なり。空に響く樂の音につれて彼等は躍りつゝ舞ひ上り飛び行くに我もおくれじと茨葺のきらひ無く踏みしだき躍り越え思はず野川に落ちしよと見て夢さむれば寢汗したゝかに襦袢を濡して熱は三十九度にや上りけん

この文章を見ると前年二月發表の「花枕」を思ひ出すが、これも彼が夢幻的な美の追求者となつてゐたことを示すものでなくてはならない。

次には同年十一月の「車上所見」同十二月の「雲の日記」などいふのがあるが、前者は根岸の家を出て人力車で郊外を巡つた時のもので、文は文語とも口語ともつかぬ折衷體ともいふべきものを用ゐてゐる。翌三十二年一月の「夢」は僅か三行ばかりの短いものであるが、口語で綴つてゐるところに注意すべき點があるやうである。これも夢に花の降る岡で美人と袖ふれ合うたといふ幻想的なものである。同年四月の「蝶」は、白い蝶と黄色い蝶が遊んでゐて山女郎に追はれ、お屋敷の中へ逃げ込んで大きな牡丹にとまると、牡丹の花びらが蝶を包んでしまつて日が暮れると、

虚空遙かに愉快な音樂が聞えて、美の神が胡蝶の舞ひを舞ひ始めたといふこれも夢幻的なもの
の幻想的な心理を示してゐる。同六月には「酒」といふ短文があるが、共に口語文を以て綴ら
れてゐる。九月の「ねざり車」は田安宗武の歌集を讀んでうれしさのあまり、虚子を訪うて語ら
うとして出かける紀行的なもので、再び文語體になつてゐる。

彼の小品文が寫生文に移行したと見られるのは明治三十二三年ごろからである。けれどもその
前三十一年十一月の「寫生、寫實」なる一文があることを見落してはならない。この文は繪畫に
於ける寫生を歴史的に述べたもので、彼の他の史觀におけるやうに、繪畫の寫實派と神韻派とを
當該の社會・經濟から引離して說いてをり、そのためにやゝ肯定できない點もあるが、大體日本
の繪畫に於ける寫實派の發展を明らかにしてゐて、彼の意圖は文學における寫實に觸れるつもり
だつたらしいが未完に了つてゐる。然し三十三年一月―三月發表の「敍事文」は大體においてそ
の後に續くものゝやうに思はれる。この「敍事文」は前年十二月「日本」紙上に歳晩歳始に關す
る文を募つたその文の批評を兼ねて、彼の敍事文に對する見解を述べたものであり矢張未完のも
のであるが、名前は敍事文といふことになつてゐるが、寫生文に關する指導的な論文で、彼の
全著作のうちで寫生文に關する論文はこればかりである。前の「寫生、寫實」が繪畫の寫生論で
あるに對しこれは文章における寫生論であつて、大體この時代における彼の寫生に關する理論の
展開と見るべきであらう。この論で彼は「或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、そを文
章に直して讀者をして己と同樣に面白く感ぜしむるには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべか
らず、只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模寫するを可とす」といひ、「文體は言文一致か又はそ
れに近き文體が寫實に適し居るなり、――寫實に言葉の美を弄すれば寫實の趣味を失ふ者と知る
べし」(傍點筆者)と云つてゐることは、曾て言文一致に對して猛烈に反對した彼としては飛躍的な
理論の發展といふべきであるが、寫生を徹底すれば勢ひ口語文にならねばならないことを、彼は
實作の上から確めたものであらう。然しながらこの言文一致と寫生の唱道を以て、後に彼が自然
主義に途を開いたとなす說は、自然主義と寫生主義を混同したもので、取るに足りない論である。
(この自然主義と寫生主義を最も早く混同して論じたのは阪本四方太であらう。これについては
なほ後に述べる。)彼の寫生文は誰でもその理論を讀んだらすぐ氣が附くやうに、「面白き文章を作
る」ことであり、「作者若し須磨に在らば讀者も共に須磨に在る如く感じ、作者若し眼前に美人を
見居らば讀者も亦眼前に美人を見居る如く」作することで、彼が俳句の寫生と同時に「美術文學
にては――善き方面より見てあしき方面より見ぬ」風流的な見方を說いてゐるそれが、散文の領

域に向つて發達したもので、此時代の俳句の行詰りと聯關的に考へて、寫生論が遂に古典的な形式を押破つて自由表現となつたものと考へることはさして無理ではないやうである。然してその發展は、彼が病褥に在つた關係からして、俳句における初期の寫生のやうな潑剌さも新鮮さもなくなり、初めから身邊雜事のトリヴヰアリズムに傾いてゐる。

以上の傾向をもつものに三十二年七月發表の「夏の夜の物音」や同十月の「飯待つ間」、同十二月の「根岸草廬記事」、三十三年一月の「新年雜記」、同七月の「車上の春光」、三十四年一月の「初夢」等があるが、「夏の夜の物音」はやゝ習作的なもので、彼が病床に寢てゐて四方へ視聽を働かした記事である。

午後九時より十時まで

東隣の家へ、此お屋敷の門番の人が來て、庭へ立ちながら話してすぐ歸つた。

南の家で、窓から外へ唾を吐いた。

誰やら水汲みに來た。

障子を閉さしむ

南の家では、入口の前で、闇に行水する樣子だ。

下り列車が通つた。

遠くに澤山の犬が吠える。

體溫を閲す三十八度五分

行水がすんで、團扇で尻か何か叩く音がする。

足音がした。南裏の木戸が明いた。

母はちひさき燈籠とみそ萩とを提げて歸り給へり。

斯の樣に全然個人的な興味を骨子としてゐるもので、そこに作者の思想も主觀も現はれてゐないし、形式的に見ても口語文の中に突如として文語を挾んだりして統一を缺いてゐるばかりでなく、全體がたど〳〵しくて讀むに堪へない。「飯待つ間」「根岸草廬記事」「新年雜記」等も事柄はやゝ違ふが、同じやうな傾向のもので、たゞ口語文で綴られてあつて、前のものゝ不統一からは救はれてゐる。

「元來彼の寫生論は「新」の追求に其根抵を置いてゐて、最初は月並俳句の理智性に對置するために唱へられたのであるが、日本畫の陳腐が非寫生に基づくことを知つてから、事物に直接して直敍するこそ「新」を追求する唯一の道であると彼は考へてゐた。」けれども彼の病氣は彼を病褥

に縛りつけ、珍らしい風物に接することを不可能ならしめた。そこでそのまゝ寫生をすれば前に掲げたトリヴヰアリズムに墮すべきは必然であるが、そればかりではなく會々外部に向つて寫生を試みたものでも、陳套と平凡を避ければ自然事物の直敍から遊離して異常な想像を逞しうせねばならなくなる。例へば「熊手と提灯」(三十二年十二月)「ラムプの影」(三十三年一月)などにはさういふ傾向が見られる。前者は酉の市の夜人力車に乘つて行く〳〵の狀態を描いたものであるが、熊手を持つて來る人を、職人だとか、身分不相應な熊手を擔いでくるとか觀察を逞しうしてゐるのはいゝとしても、

……仲町を左へ曲つて雪見橋へ出ると出あひがしらに、三十四五の、丸髷に結ふた栗に目口鼻をつけたやうな顏の手頃の熊手を持つて、不斷着のまゝに下駄はいた、どこかの上さんが來た。

——其人相を見るに、これは夫婦ぐらしで豆屋を始めて居て夫婦とも非常な稼ぎ手ではあるが、上さんの方が却つて愛嬌が少いので、上さんはいつも豆の煎り役で、亭主の方が紙袋に盛り役を勤めてゐる……

などと長いこと書いたり、後者でラムプの影が、西洋の人形・鬼・猿その他の顏に次々に見えるといふやうな幻想的なことを記してゐるのは、さういふ異常な想像をめぐらして「面白く」讀ませようとした努力の現はれかも知れないが、前者には俳諧の傳統たる滑稽の穿き違へが見られ、後者には先に記した夢幻美の追求が、さらに怪奇的なものに推移しつゝあつたものと見る。この誤られた洒脫趣味・滑稽趣味は虛子の「淺草寺のくさ〴〵」や、部分的には鼠骨の「新囚人」などの中にも見られる。

かくて三十三年九月第一回の文章會たる山會を自宅に催した。この日は不詳であるが、山會なるものは文章のヤマを研究する意味で、これはむろん當時子規によつて名づけられたものであるが、山とは寒川鼠骨によれば

寫生文に限らず、すべての文章は、三ツの部分から組立てられてゐる。卽ち前置といふ序幕のやうなものと、文章の眼目と、さうして餘波と、此の三ツの部分がウマク備つて居らねば文章に成りかねるものが多い。例へていふと山に上るやうなもので、最初山の麓を出立する時は前置で、次第々々に面白い景色を眺めつゝ愈々絕頂へ上つた時が眼目で、それから下り坂になつて走り下るやうな時が卽ち餘波である。(註)

とあるやうに文章の作法を說いた。さうしてその指導に當り、ホトトギスで絕えず寫生文を募集し、十二月には文集『寒玉集』及び『寸紅集』を發行するまでになつたが、この二十七日には第

二回山會を催し、續いて第三回を三十四年二月九日に催した。

彼は『病床六尺』に於ても寫生を高調して「寫生といふ事は、畫を畫くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、それによらなくては畫も記事文も全く出來ないといふてもよい位だのに、日本では寫生といふことを昔から疎かにしてゐたゝめに、繪も文も進歩しなかつた。理想といふことは寫生から見ると餘程淺薄で、それが非常な奇才でない以上類似と陳腐を免れない。これに反して寫生といふことは天然を寫すのだから、天然の趣味が變化して居るだけ、寫生文寫生畫も變化するし、さうして平淡の中に至味を寓するものは其妙言ふべからざるものがある。」と云つてゐるが、こゝで類似と陳腐を去つて「新」を追求すべきを說き、且つ寫生を「天然を寫す」とはつきり對象を限定してゐるのは、寫生文なるものゝ性質を明らかにしてゐる。さうしてホトトギスに集つて來る寫生文を批判し、どこまでも精密に畫いて客觀的ならねばいけないとくり返し述べてゐる。

要するに寫生文なるものは其初期には、紀行文などより來た自然詠歎や、戯作調や、俳諧の傳統的な傍觀性やか混淆して成立つてゐた。さういふ未完成なものを殘して子規は逝いたのであるが、寫生文が漱石や四方太・虚子によつて文學としての一歩を踏み出したのは、それから後であつた。

註『寫生文―作法及其文例―』

第七章　子規の文學の發展

子規の文學は子規の病歿を以て終つてはゐない。むしろ子規歿後にその蒔かれた種が成長したと見る方が正しくはないかと思はれるが、隨つて子規の理論の矛盾が擴大されたのもやはり其歿後の長い時日に於てゞある。卽ちこの章では俳句・短歌・寫生文に亘つて其後の發展を見ようとするものである。

一、俳　句

子規の俳句は寫生から出發したが、しかしその晩年には寫生とは反對な蕪村的なものを同居せしめた。この二つの傾向を正しく代表してゐるのは虛子と碧梧桐である。

碧梧桐の傾向は寫實的で印象的であるに反して虛子は瞑想的低徊的である。この傾向はこの二人の性格によるばかりではなく、子規生前から對立的な立場に置かれたゝめ、意識的に異つた道に進んだものと思はれる。これを子規は「明治二十九年の俳句界」で指摘してゐるが、それは

河童身を投げて沈みもやらず夏の月　虛子

住まばやと思ふ廢寺に月を見つ　同

怒濤岩を嚙む我を神かと朧の夜　同

雲の峯葱の坊主の兀と立つ　碧梧桐

赤い椿白い椿と落ちにけり　同

辷り落つる薄の中の螢かな　同

といふやうなものであつたが、子規は「詩人には寫實的に社會を觀る冷靜な一面と、理想的熱情的な一面とがあり、碧梧桐は前者に傾くに反し、虛子は後者に僻する」(「文學」) と云つてゐるがこゝに二人の後年の行方が指示されてゐるやうである。

子規歿後虛子はホトトギスに據り、碧梧桐は日本新聞に據つて、兩者は何の間隔もなく兩三年を過した。しかしホトトギスには東洋城・水巴・蝶衣・三允・癖三醉・柑子・鬼城といふやうな人が集り、日本には六花・碧童・乙字・井泉水・師竹・櫻魂子・八重櫻等の人々が集つて來るに從つて兩者の旗幟は截然と分つて來たのである。さうして日露戰爭のころホトトギスは漱石の「幻の盾」、つゞいて「吾輩は猫である」等を載せたが、虛子はそれらが好評を博したに刺戟され、かねての小說志望を實現さすべく志し、(註1) ホトトギスは俳句雜誌としてよりも一般文學雜誌として文學

の評論を多く載せるやうになり、彼自身も虎視耽々として文壇進出の機を窺つてゐたのである。

日本に據つた碧梧桐は俳句精進を續け、次第に眞摯な作家を集めて行つたが、その眞劍な努力が次第に子規の平面描寫的な傾向から離れて暗示的になつた。大須賀乙字はこれを俳壇の新傾向として指摘したが、(四十一年一月一日の東京日々新聞及び同年二月創刊の『アカネ』)碧梧桐は乙字の所說を肯定して新傾向を唱道するに至り、虛子はそれと全く對立すべき位置に置かれたのである。

こゝで注意しなければならないのは乙字の指摘したいはゆる新傾向なるものと實際のそれとの乖離である。乙字の進まんとした道は當初の暗示的隱約的な方向であつたらしいが、然し元來形式の制約の甚だしい俳句が、その制約をそのまゝにして新傾向に進んでも、長くそのまゝでは居られないことは明らかだ。俳句の製作が、その普及と相俟つて增加するにつれて詩境の狹隘を來し、それが形式を押し破つて自由律へ發展すべきことは明らかである。而してそれは文壇を風靡した自然主義の影響をうけ、人生主義的な傾向を生じて行つたのであるが、かゝる過程において乙字は碧梧桐と手を分つに至つた。(碧梧桐は當時を回想して新傾向は自然主義とは別なものであるといふやうな意味を述べてゐるが、(註2)　新傾向が自然主義的になつたのは四十一年九月後であるらしい。彼が此年一月ホトトギスに發表された片上天弦の俳趣味批判に對する批判には、(註3)まだ人生的なものと月並派の人生觀との混淆が見られるが、彼が後に『新傾向の研究』の中で、自然主義について述べてゐるところは、明らかに自然主義の影響裡に在つたことを示してゐるが、それは其後の轉回であることがわかる。

虛子はかゝる情勢を見つゝ寫生文から小說へと筆を進めつゝあつた。「欠び」「風流懺法」「斑鳩物語」「大內旅宿」其他を矢繼早に發表した。日露戰爭に勝つた日本は、異常な國民的昂奮の裡に紅露の封建的文學は廢れて藤村・花袋の世となつたが、虛子もさういふ文壇的な現象を目擊しつゝ「俳諧師」の如き長篇にとりついてゐたが、ホトトギスの十卷十二月號に「今や寫生文の研究更に歩を進めて小說に及ぶ」と宣言してゐるのはさういふ狀態の彼をあらはしてゐると思ふ。だが幾何もなく彼は健康を損じ、且つホトトギスの經營難に遭遇して俳句に復活するのを餘儀なくされ、再び碧梧桐と對立抗爭せねばならなくなつた。彼は大正二年六月のホトトギスで「所謂「新傾向句」雜感」なる題下に碧梧桐に報ひ、あらゆる形式思想の破壞を主義として起つた自然派運動を極端なる形式上の拘束——極端なる思想上の拘束——其等の二大拘束の上に立つてゐる俳句の上に應用せうとしたことは、俳句の破壞に終りはせぬかといひ、自ら守舊派と宣言し、十七字

と季題趣味を踏襲すること、「平明にして餘韻ある句」を作ることを高調し、子規の理論を背景に、「俳句の大道」「子規居士追懐談」「子規の句六回講義」等を發表して大に對抗氣勢を示した。

虚子が斯く子規を絶對視したに對し、碧梧桐は子規を批判してそこから蟬脱しようとしてゐた。彼は子規のなした事業を、幕末の俳趣味の墮落を引起すといふことを出でなかつたといひ、從來の俳人が俳句を作るといふことになると竹林の七賢になつた積りでゐる避社會的な態度を非とし、將來の俳句は「接社會的」であらねばならぬと說いた。そこに虚子の說くところとの決定的な相違があつた。

然し自由律が自然主義的現實暴露傾向に進んだのは『海紅』發行以後である。そしてそれが「上から」のものでなく、幾多無名の投句家によつて行はれたことは、曾て指摘して置いたから略すが、(註4) それがよし自然主義の外からの影響はあつても、そこには子規當初の寫實の精神と多かれ少かれ人生主義的な精神が働いてゐると思ふ。そこに子規の進歩性が生かされてゐる。これに反しその遊戯的な方面を繼承した虚子は、幾多の變遷をしながらも、大正半ばの經濟恐慌による人心の逃避的虚無的感情に投じて、ホトトギスは大結社を組織し、その事務所を丸ビルに置く盛況を示したのであるが、彼の唱へる「花鳥風月」(昭和三年春秋社版虚子句集序) は明らかに新世代に反撥する性質をもつものであることがわかるし、現今それが批判の對象となつてゐることも當然である。なほ子規直系ではないが定型を守る人々、例へば乙字・東洋城らは一應虚子と對立してゐたやうだけれども、それらはより強く進歩的なものに對立してをり、それは乙字の熱烈な祖國主義(註5) と東洋城が新傾向をケレンスキーと結びつけたことなど(註6) によつて其社會的位置が明らかにされ、定型派が如何なる性質をもつものであるかをはつきりさせる。

然しながらそれにも拘らず子規當初の傾向は、秋聲會・筑波會其他に比して矢張り其態度の眞摯なる點で進歩性をもつものである。子規が都市的なものを排擊したことは先に記したが、後中村樂天は三十七八年の二六新報に「俳汝南」を發表した。それには勤勞階級の立場より見た都市寄食者群に對する反感が現はれてをり、(註7) そこに進歩性も反動性もあるが、秋聲會・筑波會側からは碧梧桐の如き俳諧趣味の否定者の現はれなかつたのは、その遊戯性が然らしめたものであらう。

なほ定型派には虚子の他に露月・青々・月斗・紅綠・霽月・格堂・極堂などがあつたが、今はその主流を述べるに止めておく。

註1　三十八年四月二十九日漱石の家で開かれた文章會に、虚子は短篇を持參して出席してゐる。これ

が小說としての初めのものではなからうか。(『普及版　漱石全集』十八卷二三〇頁參照)

2　碧梧桐氏「子規以後」(『國語と國文學』昭和九年八月號)

3　論は『日本及日本人』四十一年九月號に見える。彼のそこでの議論には明らかに俳趣味家の人生觀と自然主義的なそれとの混亂が見えてゐる。私が彼の自然主義的になつたのをそれ以後と見るのもそのためである。

4　拙稿「河東碧梧桐論」(『俳句研究』昭和十年一月號)

5　乙字は慕標にまで祖國主義と書いてゐる。(三井甲之氏「大須賀乙字の追憶」(改造社俳句講座)

6　神畑勇氏「近代俳句史」(拙編『近代俳句研究』一九二頁參照)

7　同書九七—九九頁にその分析がある。なほ「俳汝南」は『明治の俳風』と改題して出版されてゐる。

二、短　歌

短歌に於て子規の敎へをうけたものは、秀眞・麓・格堂・巴子・茂春・秋水・大夢・眞・哲壽・葯房子・芳雨・里靜・義郎等があつたが、然し正しくそれを代表してゐるものは左千夫と節とであらう。

明治三十一年子規が日本によつて歌論を發表するや、左千夫は春園なる號を以てそれに反駁した。彼は初め桐廼舍桂子の月次歌會に列して萬葉風を學んでゐたのである。

三十三年一月七日子規の宅で催した歌會に彼は初めて出席した。その前彼は格堂の「池沿に道はあれども道を遠み氷の上を渡らんとぞ思ふ」に感じ、意を決して子規を訪うたものであるが(註1)その席上彼は「雪」といふ題が出たのに「都の雪は黑く降りけり」といふ歌を作つて人々に笑はれたりした。(註2)彼について長塚節は、十人の中で九人までは解つても伊藤君には分らないことがあり、九人のうち誰にも分らなくて伊藤君にだけは解ることがあると云つてゐるが、中村憲吉も「先生の內界は明快よりも混沌の部分が多かつた」(註3)と云つてゐる。その點で現代的ならぬものがあるが、然し解らないことを解つたやうな顏をしてゐるやうなことはなく、その律義さこそ三つも年下の子規に師事し、後年はやゝ盲目的な子規崇拜者となつたところでもあつた。彼が入門當時の根岸派では、歌に手をつけて大に勢を張らうとした時であつたから、彼を大に歡迎したばかりでなく、一門中でも年長者として尊敬されるに至つた。彼としてもその知遇に感じて子規歿後まで子規のために盡さうと意圖したものであらう。

當時日本以外に發表機關をもたなかつた根岸派では、日本を本陣として漸次他の新聞雜誌の歌壇を占領し、更に進んで自らの機關誌を發刊せんとし、その第一着手として格堂に『國力』や『大帝

國』の選をなさしめたが、左千夫は焦つて屢々雜誌發行を子規に提議したが、子規は其經營の容易ならぬことを說き、左千夫をなだめてゐた。この三月には節が入門して士氣愈々昂つたが、その時圖らずも鐵幹と事端を構へるに至つたもので、子規と他の人を併稱したのを咎めたところに根岸短歌會の封建的な師弟重視と排他觀念が見られるし、又これを機に歌壇に覇を稱へようとした子規一派の意圖であることは、後に見る節の寺田憲宛への書簡によつても立證出來る。又左千夫が三十三年十月―十一月の『大帝國』で、「歌に就きて吾が今日の考」なる論文を發表したのも自派の宣傳であるが、彼は鐵幹の自我の詩を難じ、眞に自我の詩ならば形式の變革から初めるのが順序だといひ、孔子の言を引いて詩は同情であり無我でなければならぬと述べてゐるが、孔子の言を引いてゐるところには後の人生主義的な展開が暗示されてゐるやうに思ふ。

入門當時の彼は寫生の熱心なる實踐者であり、「瀧」の題を出されて節と二人で日光まで瀧を見に行つたといふ話もあるが、しかしその寫生は表現の萬葉的莊重さと不可分離のものと見てゐるので、それは彼の啄木の『悲しき玩具』に與へた批評（註4）でわかるし、彼がゴルキーを好んで讀んだが、「ゴルキー程に近代的に醒めてはゐなかつた」（註5）といふ評言の妥當さもわかる。

彼は歌と他の文學とを二元的に考へてゐた。小說などでは一種の理想主義を持してをり、それは彼が二葉亭の『平凡』に與へた評言（註6）で明らかであるが、歌はさういふイデアから超越した絕對的なものと解してゐた。彼は「寫生文論」に於て子規の口語文採用說を引き、「最も飾りのない最も平易な耳立たない口語を用ゆるの必要がある」と云つてゐるが、これは彼の短歌が日常主義に傾いてゐるに拘らず、その表現の莊重さが、小ブルジョアとしての實生活を表現することが出來なかつたのによるもので、子規のいふ所に懷疑をもたなかつた彼を現はしてゐるが、それを傳へたアララギ派は今日まで短歌と文章との「跛行的」（伊澤信平氏）行進を敢てしてゐるのである。

子規は强き歌を主張したが、それは明らかに日淸戰爭前後における國家的昂揚が彼を驅つてそこに赴かしめたものである。熱情的な左千夫はそれを承述して絕對的觀念を自然の上に見出し、それを萬葉調を以て詠出した。

九十九里の磯のたひらに天地の四方の寄合に雲たむろせり
國土の神の眞奈湯は天雲もまけと護るか今日も降り來ぬ

彼が日露開戰の報に昂奮して「起て日本男兒」等の歌を作つたことは彼の面目を躍如とさせるものであるが、

にく〳〵しロシア夷を片なぎに薙ぎて盡さね斬りて盡さね
屍を滿洲の野にきづくとも仇をほふらで止まむいくさか

といふやうな歌には、彼が明星に對して抱いた排他心が、國家的排外心にまでなつてゐることが窺へるが、これらの歌によつて知る限り左千夫の昂奮は、明星派に挑戰したそれを多くは出てゐないやうであるが、一方それらと相反する消極的な境地の歌

今朝の朝の露ひや〳〵と秋草やなべて幽けき寂滅の光

などは佛教に歸依してゐた彼の心境であり、

そば湯にし身内あたゝめて書き物を今一息と筆勵ますも

の如きは、彼特有の身邊雜事を歌にしたもので、後に齋藤茂吉などに影響を與へてゐる。

子規歿後、彼は年長者を以て短歌における一門統帥の任に當つた。三十五年十一月の『心の華』に「師を失ひたる我々」なる文を發表したことはさういふ經緯を明らかにしてゐるが、翌三十六年六月には彼が主になつて『馬酔木』を創刊するに至つたが、彼の熱病的な子規禮讃は爲にするために子規を昇ぐと噂されたが、彼はそれに答へて「命のある限り子規の話は絶やさない」など云つてゐる。さうして子規以來の明星に對する抗爭を止めず、明星の短歌をホーカイ調チョボクレと罵り（『鵜川』三十七年九月號）三十九年三月の『アシビ』では、晶子の「鎌倉や御佛なれど」の歌を評して、男的物體に對して美男であるといふ以外に感興が起らなかつたのは遊冶郎的內容でしかないと云つてゐるが、これに對して明星では「これ程本人の魯鈍を發表せるものなし」と答へ、傍觀者として漱石も「左千夫なんて歌論抔出來る男でない。只子規ばかり難有がつて自ら愚な歌を大事さうに作つてゐる。」（註7）と云つてゐる。彼の子規の偶像化は虛子のそれに似てゐるが、虛子のには新傾向に對する政策的なものが見られる。左千夫のはそれと異つて頗る純なものであつたのであるが、それだけ彼が近代的な自我をもたなかつたことを示してもゐる。

子規の內容第一の形式主義は左千夫によつて全くの形式主義的內容主義に傾き連作論を派生せしめた。連作は直接的には子規の一題十句といふ句の作り方から初まつたものであるが、短歌の單作では不十分な表現しか出來ないことを痛感するに至り、横へひろがつたもので、これに對して尾上柴舟は四十三年「短歌滅亡論」を自然主義の立場で書き、數多の歌が一つとして見られるならば何故初めから一つとして現はさないかを疑ひ、短歌の形式を否定したのである。それと共に子規の藝術至上主義が左千夫によつて人生主義に代置せられてゐることも見遁してはならない。

「何れの社會か形式なからむ——社會既に形式あり、形式趣味の絶對に排斥すべからざるや論な

きのみ」（註8）と云つて形式尊重を彼は高調してゐるが「『馬酔木』終刊の消息」には、子規の文學が、文學のための文學であつたことを指摘し馬酔木は歌に於ても人間に直接なるべきを主張し、人生を親しみ、自然を傍觀したと云うてゐる。もちろん彼のこゝでいふ人生に親しみとは彼の日常歌の範圍でのことで、自己を中心とする現實社會を藝術化するといふ以外の何でもなかつた。これに對して碧梧桐は反駁したが、（註9）その碧梧桐も幾何もなく自然主義の影響の下に人生主義に傾いて行つた。

彼は晩年叫びといふことを唱へ、散文は話、歌・俳句は叫びであると云つてゐるが、これこそ彼が自然主義短歌に答へたものでなくてはならない。もちろん既に伊澤信平氏が云はれてゐるやうに、（註10）封建的な御歌所や明星に對抗したにしても、彼の啄木の歌に對しての批判と其年代から考へて、それは漱石等の自然主義への對立と違つた立場での對立でなければならないと私は考へるものだ。

彼にも寫生文と小説の作品があるが、彼が初めて小説を發表したのは明治三十九年の『野菊の墓』である。其後も隣の嫁とか春潮とかを次々に發表したが、四十三年日々新聞に出た『分家』は四六判六百頁にも餘るものであつて、その中で彼は田舍に殘る封建的な結婚と家長制とに新時代の人々が反抗する所を描出し、彼自らもその熱情からその反抗に同情し、自由意志による婚姻をさせないのが今の社會だと云つてゐる。しかしその封建的遺物は空に出來たものではなく、特殊な社會關係によるものであるから、それらに無關心であるものがその結婚制度や家長制にだけ矛を向けても何にもならないのであつて、それは彼が「熱中すればする程愈昏亂した」（註11）ものであらうけれども、その小説が「當時の自然主義からも低徊趣味からもよく馬鹿にされたり、笑はれたりした」（註12）ところもそこにあると思ふ。いふまでもなくそれが封建制へ矛を向けた限りに於て進歩的ではあるが、一方短歌においては貴族的な萬葉を崇拜し、萬葉調の歌を作つてゐたのであつて、それが子規の短歌は「俗世間を超越するもの」と考へてゐたことに發してゐるが、この事は彼の教養と現實的な社會的位置との矛盾を示すものでなくてはならない。彼はその昏亂に惱みつゝ大正二年世を去つたが、彼の事業は「一生を通じて奉仕した子規と萬葉集の範圍を出でない」（註13）ものであることは誰にも肯定せられるだらう。

節も左千夫と同じく三十三年の三月子規の處へ入門した。その時彼は二十二歳であつたが、それ以前子規の俳論を讀んで感じてゐたといふ。入門後は熱烈な寫生の實踐者となつたが、左千夫が主情的に傾くに反し、節はどこまで客觀的に傾いて行つた。

おちたぎつしぶきの永に歌人の袖のしづくの玉ちり亂る　左千夫

あしびきの山の夕立風あれて瀧のとゞろの音もきこえず　節

子規が三十五年に歿してからは彼も「馬酔木」に據つて歌や歌論を發表してゐた。

彼の家は中地主であつて、その弟らは工學士や軍人になつた。彼は炭燒をやつたり、竹や梅を植ゑて其の收入を小作人のために有利に使用しようとした理想主義者だつた。

封建的な排他心は彼に於ても左千夫に劣らぬものがあり、明星と根岸短歌會と衝突するや、彼はその經緯を知悉してゐなかつたにも拘らず「鐵幹迷ヘリ、子規ハサメタリ」といふ書簡を友人に與へ（註14）或は明星が地方の青年を誤ること甚しきを述べ、最近發賣禁止になつたのは當然であるが、君が歌を作らないのは「明星」に力を添へられるのではないかと云つてゐる。根岸派の人々が他へ强制的に子規崇拜熱を注入しようとしたことがわかる。

節が子規から傳へられたものは「眞」であつた。「――嘘ハヨムナカレ、歌ハ正直ニヨムベキモノナリ」（註15）或は「何でも眞實でなければ興を引きません」（註16）といひ、繪畫を論じて南畫の遊戯的氣分を排し、應擧・若冲・蕭白などを賞揚してゐる。その爲め彼の作品は沒主觀に傾いてゐるが、その寫實的な傾向は彼が衣食に事缺かぬ家に生れ、且つ旅行を好み、生涯の多くを旅行に割いてゐることからして、子規・左千夫のやうに身邊雜事に陷ることはなかつたが、それでさへなほ擬古的な短歌に對して懐疑し、（註17）一時作歌を中止してゐたくらゐである。これはむろん彼が眞摯なレアリストであつたからである。

三十八年頃彼と左千夫との間に寫生について論爭を起した。私見によればこの論爭こそは子規の寫生の破綻をどう彌縫するかの問題に逢着したもので、左千夫は素材を主觀で繋ぎ合せることによつて或は連作によつて、節は「寫生といふことが進んで來ると、微細なものは更に微細になる」（註18）とて田園の風物を採ることによつて彌縫しようとした。これは各々の社會的位置から生じたものであるが、左千夫の「油畫には松葉を一本々々はつきり書いたり、人間の頭髮を一本々々刺る樣には書かぬ――浮世繪が後に美人の睫毛をかく樣になつて駄目になつた」（註19）といふに答へて、「それは我々の寫生趣味といふことを根本より打破する議論とはならない。予が製作にも毛髮や松葉を一本々々に描いたやうなものがあつたらその製作は惡かつたのである。然し松葉でも一小部分の寫生には若楓に散松葉の掛つてゐる油繪のあることを記憶して貰ひたい」（註20）と云つてゐる。事實此時代の節は「堅くるしい詞や飾り詞などは必要を感ずることが薄い」（「竹の里人選歌につき」）と云つてゐるやうに、萬葉調を止揚して、微細な事物へ〳〵と關心を深め

て寫生を守らうとしたものゝやうで、彼は子規の選歌中の品物を分類するといふやうな尅明な仕事をして「我々の腦髓は古人のやうに雜駁な單純なのではないから、詠ずるものも隨て緻密になるべきである。」と云つてをり、「彼の歌を十首もよめば、そこには必ず、あまり聞いたことのない植物の名が十や十二三は出て來る」（註21）といふことはその實踐化に外ならないが、これさへ誰も彼もが試みれば陳腐になることは、彼の短歌を碧梧桐が評した言葉に示されてゐる。（註22）同時にこの事は短歌形式を彼らが捨守する上に當然經驗しなければならないことであつた。即ち左千夫の形式第一主義は固より、碧梧桐も同じ調子のものゝ多いことを云つてゐるし、彼自らも「歌譚抄を讀みて」なる文で「自他の製作に飽きが來た」と云つてゐることによつて、定型から來る一種の調子が彼らの間にさへ認められるまでになつてゐたらしい。

西ふくや風寒ければ網ほせる汀の葦に氷むすびぬ　（三十四年）

夕されば むらさき匂ふ筑波嶺のしづくの田居に雁鳴きわたる（三十五年）

積みあげし眞木に着せたる萱菰に撓みてとゞく棕梠の木の花（三十九年）

おほどかに春はあれども搖り動く榛が花にも滿ち足らひたり（四十年）

貧しき人々の住む家なれば棟にあまた草生ひたれども、かつてとることもなきぞと見る

に

窓の外はいらかばかりの佗びしきに苦菜ほうけて春逝かんとす（大正三年）

彼は短歌と共に寫生文をも作つてゐた。『佐渡が島』とか『炭燒の娘』とかゞそれであるが、後にそれが大成されて長篇『土』になつたもので、『土』は人も知るやうに四十三年の朝日新聞に載つたものであるが、この作品には自然讃美の牧歌的なものと、此の時代の農民の悲慘な生活をリアルに描かうとする意圖と、外からの自然主義の影響とが相尅を演じながら努力によつて辛うじて調和を保つてゐるところが見られ、彼がこれを書いたのは都市文化に壓迫さるゝ農民生活の悲慘さを描いて世人に愬へようとしたものと私は考へたいのだが、さういふ穿鑿はともかくとして、この作は材料を實在の人物からとり、貧農の生活を展開した點で、單なる小說としてのみでなく農民史上からも重要視さるべきもので、むろんそれには多くの雜糅物を含んでゐるが、碧梧桐の新傾向・自由律と共に子規の寫實の進步性を正當に發展せしめたものといふべきであらう。歌人としての彼の活動は、この一篇の『土』に如かなかつたのであるし、子規のもつ進步性とは斯る意味のものであつたこともこれで分ると思ふ。

註1　赤木格堂氏「先師の晩年」（『日本及日本人』昭和三年九月號）

2　同上
3　中村憲吉氏「追憶斷片」(『アラ、ギ』八年十月號)
4　『悲しき玩具』を讀む(左千夫歌論集第二卷)
5　中村氏「追憶斷片」(『アラ、ギ』前掲號)
6　「二葉亭氏の平凡」左千夫歌論集第三卷)
7　三十九年五月五日森田氏宛書簡(普及版漱石全集十八卷)
8　「萬葉論」
9　『日本及日本人』四十一年九月十五日號「その折り〳〵」これは新傾向が何に影響されたかの貴重な資料である。
10　伊澤信平氏「伊藤左千夫論」(『短歌研究』昭和八年十二月號)
11　中村憲吉氏前掲書
12　平瀨泣崖氏「先生の一面」(『アラ、ギ』大正八年十月號)
13　島木赤彦氏「左千夫の歌」(『アラ、ギ』大正十年七月號)
14　寺田憲氏宛書簡、三十三年十月頃カ
15　同上
16　大正二年十一月五日附松山貫道氏宛書簡
17　彼の此時代の短歌に關しての懐疑は『新小說』大正十四年十二月號所掲、佐久間政雄の「丘上の森のやうに」なる文に、彼自らの言葉として萬葉の歌は萬葉時代の言葉で綴られてゐるが、言葉の全く違つた現代人が萬葉時代の言葉を模倣して歌を作ることに疑念を抱いてゐる。これに反し文案は現代語を以てするのであるから何の不自然も感じない。そこで懐疑のやむまで作歌を中止して文を作ると云つてゐる。それを彼は如何に解決したか、其後彼は「鉞の如く」なる一聯の短歌を作つた。
18　「桔桑漫筆」(長塚節全集第四卷)
19　「歌譚抄」(左千夫歌論集第二卷)
20　「桔桑漫筆」
21　橋田東聲氏『長塚節歌集』紅玉堂版三八頁參照
22　秋冬雜咏に就いて碧梧桐氏よりの來狀(長塚節全集第四卷)

三、寫生文

先に述べたやうに寫生文は子規在世中よりもその歿後に花咲いたもので、それには子規を初めとし碧梧桐・虚子・四方太・鼠骨・左千夫・節・四迷(四明)・樂天・鬼城・秀眞・由人・翠濤・瓠瓜・雉子郎・

虚栗・破笛・化羊・香墨・烏人・竹舟郎・拈華・小洒・八重櫻・波靜・耕村・墨水・烏犍・愛櫻・日渚・蝶哉・磧童その他がある。然し子規生前から歿後へかけてその人々の事蹟を見ると、全く無方針に作つてゐた者もあるし、虚子・漱石の如く小説への關心をもちつゝ作つてゐたものもある。その中で寫生文として觀、他からの批判に應酬してゐた者は阪本四方太である。そのためこゝでは彼を中心に寫生文の子規歿後の展開を見ようとするのだ。

彼の初作は三十三年の「下宿屋」や「時雨午」であらうが、同年九月第一回の山會が開かるゝや彼は他の人々と共に列席、爾後毎回出席して研鑽してゐた。然し寫生文は一般にはアマチュアの的なものとして文壇的な注意をうけるに至らなかつたが、それが多少注意されるやうになつたのは三十八年頃漱石が參加してからである。當時の日本は日露戰爭に勝つて國民的昂奮の裡に在り、島崎藤村の『破戒』などもあらはれ、自然主義的な零圍氣の中に在つた。

子規歿後大衆を指導すべき碧・虚兩氏は漸く行き方の相違が現はれ、大衆はその歸趨に惑ふに至つて寫生文はどつちつかずの席を彼らに與へ、多くの參加者を見たが、漱石が三十八年頃から「吾輩は猫である」「幻の盾」「坊ちやん」等を發表するや、漱石門下のインテリゲントたちも多くホトトギスを舞臺とするに至り、鈴木三重吉・野上八重子(彌生子)・寺田寅彦らの作品が次々にあらはれ、寫生文家もその氣運に動かされて氣勢を添へた。然し漱石門下のインテリゲントたちは、明らかに小説への踏臺として臨んでをり、左千夫・節・虚子もその情勢に左右されてゐた。碧梧桐は俳句に專心し、鼠骨も先に「新囚人」「放免」「就役」「監房」以後あまり振はず、自然四方太のみがそれに專心するやうになつたのである。

彼の寫生文の大作は四十年二月・五月のホトトギスに載つた「夢の如し」である。これは回想風のものであるが、子規が極端に文學に理智性を排し内部生命を考慮に入れなかつたのを忠實に傳へた彼及び寫生文家たちは、一樣に文を面白く趣味的に綴れば足ると考へてゐたのである。三十九年六月のホトトギスに彼は「寫生文に就て」を發表してゐるが、彼は寫生文を美術的記事文の一種であるとなし、寫生文といふ以上徹頭徹尾事實でなければならぬやうに考へる者もあるが、空想でもよいのであつて、想像と寫生とをどう繫ぐかゞ問題であるといひ、寫眞や博物圖の科學的なものと區別し、また俳文とも區別し、俳人中に俳句を重んじて寫生文を輕んずるものがあるが、兩者は兄弟の關係であり、律語としては俳句で滿足できるが、散文では別なものを求める。この要求によつて寫生文は生れたものであると云つてゐる。(同年七月號ホトトギス「文章談」)即ち誰にでもわかるやうに彼のこゝでいふところは皆文章の技術の末で、思想的内容には少しも觸

れようとはしてゐないので、子規の文學觀を忠實にうけ繼ぐ以外に何もなかつたのである。

四十年三月の『文章世界』は寫生文に就ての諸家の論を集めて發表した。その中で自然主義の側からの批判は頗る興味あるものである。即ち島村抱月は「今の寫生文」なる題下に、寫生文は未完成（アンフィニッシュト）のもので他日完成したものを作る手習にいゝが、それだけで滿足してゐたならば何の役にも立たぬ。未完成のものでも一種の興味はあるが、然し完成したものならなほ一層いゝ筈である。渾然たる藝術品たるには中心點がなければならぬといひ、二葉亭も「寫生文に就いての工夫」なる題で、寫生文家は天然ばかり寫してゐるが、なぜ人間を寫さないのだらう。また文體も眼がさめる、時計がチン〳〵鳴るといふ書き方でなく、もつと工夫があるだらうと云つてゐるが、どう間違へたか同年六月のホトトギスで四方太は「寫生文に對する迫害」なる題下に、人生に觸れないものがなぜ惡いか、人生に觸れるといふことが詩の根本條件ならいざ知らず、少し了簡を廣くして考へたならそんな文學論は通用せぬと云つてゐるが、左千夫も同年七月の『趣味』で「寫生文論」を發表してゐる。そこでも左千夫は寫生文の効能を並べてゐるが、四方太の寫生文が俳句趣味の散文だと云ふことゝ、子規は寫生文を發明せぬといふことに反對し、寫生文は子規の發明に係るとはつきり云つてゐる。これは寫生文家の不統一さを示してゐるもので、漱石も文學と逃避的俳諧的境地とを區別してかの俳句連虚子でも四方太でも丸で此點は別世界の人間である。あんなの許りが文學者ではつまらない」（註1）と云つてゐるし、藤村の『破戒』が出た時も彼はそれを「事柄が眞面目で、人生と云ふものに觸れてゐていたづらな脂粉の氣がない」（註2）と述べてゐる。寫生文なるものの性質はこれでわかるが、四方太は四十一年九月のホトトギスで「子規子と新文藝」なる題を以て自然主義運動に言及し、子規が十年以前それの基を開いたと論じ、世人は自然派と寫生文が對立してゐるやうにいふが、兩者は反目すべきでなく提携して舊文藝に對抗すべきだと述べてゐる。彼の文學に對する理解の程が明らかになるが、これより前の同年一月のホトトギスに出た片上天弦の「文壇最近の趨勢」には、寫生文・俳句を籠めての俳趣味に鋭い批判が加へられてをり、翌四十二年六月發行の『小說作法』でも田山花袋はそれを批判してゐる。しかしこの年一月發表の虚子の「三疊と四疊半」には、封建的な生活と近代的なインテリゲントの生活を對照的に描寫し、封建的なものゝ沒落を示してゐるし、碧梧桐も此の時代から自然主義的影響の下に封建的な俳句に矛を向けるに至つてゐる。

要するに寫生文なるものは俳句の精神と趣味を俳句で出來ない自由の表現に求めたもので、初期のものは可なり戯作的な要素をもつてゐたが、然し此の時代の硯友社を初めとする一般職業小

說家が空想で揑ち上げる事相を、實在から得ようとした點はよかつた。けれども大體事件を面白く讀ませようとする程度のものであつたから、人生に觸れないとの批判も當然でなければならなかつた。その材料の新を求めるのはいゝが、彼らの生活形式も都市的に固定するにつれてさういつまで珍らしい材料もなくなる。鼠骨の入獄といふ材料がもてはやされたのも、珍らしい經驗を利用したからであるが、これも事件を面白く報道することにのみ力を注いで、官吏誹毀罪での入獄といふ本質には少しも觸れてゐない點に彼らの態度が窺はれる。そこに近代文學との性質の差異がはつきりする。それが自然主義に近づきつゝも、却つてそれと反對な漱石等に交渉するところが多くなつてゐるもので、これは恰も虛子の花鳥風月が人生主義と反對の歩行をしたのと同じである。「寫生文といふものは、矢張外國の文章の模倣には相違なかつたが、それは形だけで、存外日本趣味、東洋趣味に捉へられてゐる」（註3）といふ田山花袋の批判は適評であるが、形のみを模倣して得たりとなしてゐる子規一派の文學の位置はこれで明らかになると思ふ。

註1　三十九年十月二十六日鈴木三重吉氏宛書簡（普及版漱石全集十八卷）

2　同年四月一日附森田草平氏宛書簡（同）

3　「『土』の作者」（『新小說』大正十四年十二月號）

結　語

以上で子規の生涯とその文學の概略及び歿後における俳句・短歌・寫生文等の發展を觀た。これによつて見れば子規の文學は、當初は革新者として出發し、それは國學の保守的な精神を明治文學一般の現實主義の衣で包んだものではあつたが、眞實性を失つた月並に對し眞に就かうとした點で進歩的なものをもつてゐた。しかし後にはヨリ强い傳統文學への傾情を露はにし、舊いものの綜合者としての面を强く浮出さしめるに至つてゐることが明らかになつた。俳句における蕪村の浪漫調への異常な仰慕や短歌における萬葉調の熱心な唱道は、さういふ復古精神を時代の國粹主義的な影響の下に露骨にしてゐるものである。しかもそれらの文學が都市民的な彼の生活と感情を全面的に表現し能はぬことが漸く明らかにされるに至つて、寫生文に赴かなければならなかつたものであるが、寫生文はものをリアルに見ようとしてゐる點で舊來の文學に比し進歩性をもつてゐるが、その精神は傳統的な俳諧趣味によつてゐるので、節の『土』の如きものをも出したが、大部分は漱石・虛子の低徊的なものに赴かざるを得なかつた。これは子規の理論のうちの進歩性と保守性の相尅が、ヨリ進歩性に傾けば碧梧桐の俳句や『土』の如きものとなり、唯美的に傾

けば虚子・漱石等の作品となることが明らかになる。

また私は子規の全活動のうちに、都市中心の文化を否定せんとする觀念の萠芽のあるのを認めないわけには行かない。「ホトトギス第四卷一號のはじめに」なる文章は、それが最も端的に語られてゐる點で見逃すべからざる文獻であるが、それは一應硯友社などの遊戯的なものを否定排擊せんとする形をとつてあらはれてはゐるが、しかしその言葉には農村の立場に立つての反都會主義的なものが見られ、それは實に反資本主義的にまで高められてゐるのである。これは子規のもつ封建的な殘滓として批判の對象たりうると共に、彼の晩年の形式第一主義、萬葉尊重への基礎的なものとなつてゐることを理解せねばならぬ。それが後の乙字の諸論では自然が絶對唯一のものに高められ、反都會觀念もそれが一層熾烈なものとなり、やゝ熱病的に都會文化の弊竇を衝かうとする意圖をもつに至つてゐる。だが、それらを單なる子規・乙字の偏癖性と見てはならず、維新以來加速度的な資本主義の進行が、官僚とブルジョアジーの結托となり物價暴騰・金融資本の跋扈となつて勤勞者を苦しめたことに基づくものである。もちろんこゝで彼らがヨリ高次的な立場での都市文化否定に向はなかつたことは、それの無力化を身をもつて表明する以外の何でもないのであるが、後の農本主義文學に途を開いてゐる點で注目すべきものがある。

子規が當初の寫生を徹底せしめることが出來なかつたのは結局古典主義を止揚することが出來なかつたによるものであるが、蕪村調・萬葉調なる過去の偶像を、その流動の形で捉へず靜止の形で受取つたゝめである。當時子規のタクトに隨つて一擧一動してゐた彼の門下が、俳句に短歌に又寫生文に、一樣に固定したものを信じ、それ以後虚子の花鳥風月、アラヽギの萬葉調になつてゐるのである。子規にはものを辨證法的に思索することが出來なかつたのである。私は遙かに二十二年の漱石が子規に與へた書簡で「御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 Idea を養ふ餘地なからん」と云つたことに想到せざるを得ない。彼が現實と文學を別のものと考へ、現實の苦しさの息のつきどころを文學に求めたことは、彼の全文學を高いものにはしなかつたのである。彼はどこまでも「俳句の革新者」である。

殊に彼のギルド的結社主義の再編成は後のホトトギス・アラヽギの俤をなしてゐる。その間によつて彼は偶像化されるに至つたものであるが、その偶像的空氣に支配されて子規研究もどの位眞實性が歪められてゐるかわからない。もちろん我々も子規當初の進歩性を十分認めるものであるが、それと同時に後年の反動性も十分批判されねばならないと思ふ。今や俳壇は彼らの殘した「花鳥風月」に對して反抗する新興俳句の嵐の中に在り、歌壇においてもアラヽギイズムが新興

集團に批判されつゝある。子規が當初の進歩性を拋棄せねばならなかつた此の國の社會情勢は、子規にとつてまことに同情に堪へないものがあるが、今後新時代の批判は恐らく子規の正しき評價を誤りはしないであらう。

書中多くの先人の業を引合にし、且つ無遠慮な批判を敢てした非禮をお詫してをく。

「正岡子規の新研究」終

子規略年譜

凡例

この略年譜は子規と其社會關係及文學的情勢を一目に見るために編したもので、即ち上段と第二段は子規の動靜を、第三段は社會情勢を、下段は出版物によつて、社會的經濟的な諸關係が如何に文化に反映したかを見ようとしたものである。大體の骨子を改造社版子規全集の年譜と齋藤昌三氏の現代日本文學大年表に據つたが、新たに補正したところもある。忽卒の業で多少の誤りなきを保し難いが、切に寛恕を乞ふ次第である。

慶應三年（一八六七年）一歳	九月十七日伊豫松山に生る。	正月九日明治天皇踐祚、德川慶喜大政を奉還、十二月正政復古の大令下る		
明治元年（一八六八年）二歳	その家同市中の川に轉居、火を失して全燒、門が殘つたので半燒といふことで藩主からお咎めはなかつた。	鳥羽伏見の戰、東征大總督出發、三月五ヶ條御誓文、四月江戸を東京と改稱、十月奥羽平定、東京へ行幸	加藤弘之の立憲政體略、福澤諭吉訓蒙窮理圖解等刊行	
明治二年（一八六九年）三歳		正月薩長土肥版籍奉還奏請二月新聞紙發行許可、五月函館平定、公卿諸侯を華族と改稱、十二月東京横濱間電信開通。	加藤弘之の交易問答、福澤諭吉世界國盡、同西洋事情刊行 ○萩原乙彦俳諧新聞誌發行	
明治三年（一八七〇年）四歳		二月樺太開拓使設置、九月平民に苗字許可	スマイルス中村正直譯西國立志篇、福澤諭吉文明論之概略、石黑忠悳化學訓蒙、小幡篤次郎生產道案內等刊行、横濱毎日新聞創刊 ○一月歌御會初めて行はる	
明治四年（一八七一年）五歳	父を喪ふ。	二月親兵を薩長土に徵す。七月廢藩置縣、七月散髮脫刀差許、十月岩倉卿を歐米諸國に差遣、十一月三府七十二縣を定む。	ミル著中村正直譯自由之理刊行	
明治五年（一八七二年）六歳		三月親兵を廢し近衞兵設置八月學制頒布、九月京濱間鐵道成る。十一月曆制改正	一月東京日々新聞、六月郵便報知新聞各創刊	
明治六年（一八七三年）七歳	法龍寺內寺小屋に通學、外祖父觀山に漢學を學び、又土屋久明に就き、叔父佐伯氏に習字を學ぶ。この頃の戸籍に其住所港町新丁とある由。髫を切らんことを觀山に乞ひしも此年である。	一月太陽曆實施、徵兵令發布。七月改正律例實施、地租改正、五月大藏大輔井上馨。同少輔澁澤榮一、歳入約四千萬、歳出約五千萬の財政危機の爲職を辭す。一揆所々に起る。	中村正直同人社を組織す。此年理學の書多く刊行さる。資本主義を進行さすためにに必要とされたものであらう。	
明治七年（一八七四年）八歳	松山市智環小學校に入り、（一說に法龍寺內寺子屋は智環學校の誤りともいふ）	一月板垣退助民選議院設立を建白。愛國公黨生る。二月佐賀の亂起る。四月板垣	西周致知啓蒙、社會の說、加藤弘之國體新論を刊行。共存同衆歐米新文明思潮を	

		後轉じて勝山小學校に通學	
明治八年（一八七五年）九歳		等立志社を起す。	移入せんとす。明六社創設明六雜誌刊行○幹雄・春湖等教導職に補せられ思想善導に努む。月の本爲山俳諧教林盟社を起し社長となる。
		四月立憲政體に關する詔書渙發。五月千島樺太交換の約成る。七月出版條例、新聞紙條例、讒謗律令發布。本邦製紙業の嚆矢王子製紙會社成る。漕運業奬勵の爲十五ヶ年十五萬圓を郵船汽船三菱に下附の事決定。此年民選議院開設の聲囂々たり。	一月新島襄同志社を起す。ミル代議政體譯出さる。明六雜誌廢刊。
明治九年（一八七六年）十歳		三月士族帶刀を禁ず。六月大阪・京都間鐵道開通。七月三井物產會社設立。十月	美術學校設立、伊人フォンタネージ洋畫を教授す。マルサス著、大島貞益譯人口

		熊本神風連の亂、前原一誠萩に亂を起す。東京米穀取引所開かる。	論要略、福澤諭吉學者安心論、モンテスキュ萬法精理の譯本刊行東京新誌創刊
明治十年（一八七七年）十一歳		二月西南の役起る（九月平定）五月博愛社設置（赤十社の起）八月內國勸業博覽會開會。	ルッソー民約論譯出、田口鼎軒日本開化小史、福澤諭吉民間經濟錄刊行。フォーセット經濟入門譯出。花月新誌・團々珍聞・顯才新誌等創刊。
明治十一年（一八七八年）十二歳	この年初めて漢詩を作る。貸本を耽讀し軍談を好み、學校を休んで聽きに行く。	七月郡區町村編制法制定。米國と關稅權に關する條約改正。八月竹橋騷動、大阪北濱に株式取引所を開く、十二月參謀本部設置	ジュール・ベルヌ著川島忠之助譯八十日間世界一周・リットン著丹羽純一郎譯花柳春話等刊行。
明治十二年（一八七九年）十三歳	勝山小學校卒業、松山中學に入學。擬似コレラにかゝる。	三月府縣會開會、十二月三備の有志民選議院開設請願	ヘネロン著宮島春松譯哲烈禍福譯、リットン著織田純一郎譯寄想春史、佐藤喜峯

明治十三年（一八八〇年）十四歳	同親吟會を起し詩歌をなし河東靜溪の添削を乞ふ。この年より翌年へかけて多くの回覽小誌を作る。	三月愛國社國會開設願望有志會と改稱、四月集會條例發布。國會期成同盟會の片岡健吉・河野廣中國會開設を太政官に請願し斥けらる。八月東京銀行集會所成る。十一月板垣退助等自由黨組織。六月參議山田顯義十二月同伊藤博文立憲政體に關する議を上る。	譯天路歷程、丹羽純一郎日本民權新論、植木枝盛民情一新論刊行 ○大阪朝日新聞發行
明治十四年（一八八一年）十五歳		五月參議大木喬任立憲政體に關する議を上る。七月北海道官有物拂下事件起る。十月明治廿三年を期して國會を開設すべしとの詔下る	戸田欽堂民權演義情海波瀾リットン著井上勤譯龍勤鬼談、ジュール・ベルヌ著井上勤譯九十七時間二十分月世界旅行、リーバー著林董譯自治論等刊行。其他國會に關する刊行物多し。 ○春秋庵幹雄俳諧明倫雜誌發行。

明治十五年（一八八二年）十六歳	東都遊學の念切にして叔父加藤恒忠に宛ての書簡あり。民權論の影響をうけ青年會にて「自由何クニカアル」などの演說をなす。多民權自由雜誌を柳原正之等と共に出さんとして止む。	三月大隈重信改進黨を、福地源一郎帝政黨を組織。四月板垣退助岐阜にて刺さる五月樽井藤吉等長崎にて東洋社會黨を組織し、直に禁止さる。十二月福島事件起る。	板垣退助の自由黨結黨式を東京に擧ぐ。
明治十六年（一八八三年）十七歳	「天將に黑塊を現はさんとす」なる演說を青年會にてなす。松山中學卒業、笈を負うて上京、須田學舍に入り、十月神田共立學校に入學。麻布鷹見方、久松家長屋、神田藤野方等に轉寓す	四月東京電燈會社設立、七月神戸に株式取引所を設立十二月淺野セメント成る。官報發行。福島事件の河野廣中有罪と決す。	行。東洋學藝雜誌創刊 ○其角堂永機みゝな草發行 魯國奇聞烈女之疑獄、佛國西革命自由黨魁餘段郎傳上編、西洋奇談富貴の種蒔、虛無黨退治奇談、哲爾自由譚前編、佛國西革命記自由乃凱歌一編、ルッソー著中江兆民譯民約譯解等譯出、加藤弘之人權新說、原田潛財產平均論刊行 ○新體詩抄發行 プーシキン花心蝶恩錄、ジュール・ベルヌ月世界一周デフォー魯敏遜漂流記、櫻田百衛阿國民造自由の錦袍矢野龍溪經國美談前編、馬場辰猪天賦人權論刊行、其他人權に關するもの及び科

明治十七年（一八八四年）十八歳	共立學校にて莊子の講義を聽く、六月藤野家と共に牛込東五軒町に轉居、七月大學豫備門の試驗に及第。本郷の進文學舍に英語を學ぶ經國美談を讀みしは此年である。	官吏恩給令定めらる。五月大阪商船會社成立。十月自由黨大阪にて解黨宣言。東京の印刷會社秀英舍職工勞働組合を組織せんとす。		學小說政治小說大に流行す
明治十八年（一八八五年）十九歳	大學豫備門に入る。夏歸省中井手眞棹に和歌を問ふ。俳句を作りはじめたのも此頃だと云はれてゐる。「八犬傳を讀む」を執筆。逍遙の書生氣質を讀む。	四月天津條約成る。九月都新聞社設立。十月大井憲太郎朝鮮に事を擧げんとして大阪に捕はる。日本郵船會社成る。		藤田鳴鶴文明東漸史、松島剛社會民權論刊行 シェークスピア著坪內逍遙譯自由太刀餘波鋭鋒、宮崎夢柳譯佛蘭西太平記鮮血の花、ジュール・ベルヌ著井上勤譯白露革命外傳自由の征矢等譯出。西村茂樹日本講道會設立
明治十九年（一八八六年）	大學豫備門（此年高等中學校と改稱）に在り。夏久松定靖に倶して日光に遊ぶ。	三月帝國大學令公布。六月東京郵便局閉局。九月大阪事件決獄	未來夢。末廣鐵腸雪中梅刊行 ○やまと新聞、反省雜誌創刊	德富猪一郎新日本之青年、西村茂樹日本道德論、福澤諭吉尊王論、小中村義象國學和歌改良論、武津八千穗國學和歌改良不可論、紅葉美妙共著新體詞選等刊行。大野直輔フォーセットの貧困救治論譯出。 ○國民の友創刊。二葉亭浮雲第一編を著す。
明治二十年（一八八七年）二十一歳	神田に居り、四月一橋高等中學校寄宿舍に移る。七月歸省勝田明庵（主計）の紹介にて三津ヶ濱に大原其戎を訪ひ俳句を聽く。十二月常磐會寄宿舍設立、入舍。	一月東京電燈初めて點燈す四月假裝會の醜體につき世論囂々たり、いはゆる鹿鳴館事件これである。五月條約改正會議を開く。十月東京音樂學校開設。十二月保安條例公布せられ、民間の政客皇城三里以外に追はる		岩田德義社會改良論、有賀長雄宗教進化論、小室屈山改造社會眞牧歸、植木枝盛國民大會議等刊行。 ○四月三宅雪嶺は日本人を
明治二十一年（一八八八年）二十二歳	高等中學校寄宿舍に在り。夏季休暇中向島長命寺境內香月樓に在り。俳句を作り野球に熱中す。八月浦賀に遊び、横須賀金澤を經て鎌	一月樞密院創設、五月加藤弘之・箕作麟祥・伊藤圭介等初めて博士の學位を授けらる。十月東京美術學校設立さる。十二月高島炭坑事件		

	倉に至る。雨に遭ひ喀血す。江の島に一泊して歸る。		硯友社我樂多文庫をそれぞれ發行、めざまし新聞東京朝日新聞と改號
明治二十二年（一八八九年）二十三歳	四月三日水戸に遊び七月歸京。十月九日肺悸衝にて喀血、子規と稱す。八月歸省（「筆まかせ」に歸省中目擊せし記事あり）十一月上野不忍境内に假寓、十一月大磯に遊ぶ。十二月二十四日發大磯・濱松・名古屋より京都・神戸を經て松山に歸省、啼血始末・水戸記行・大磯行・詩歌の起原及變遷等の著あり。紅葉の色懺悔を讀む。	二月帝國憲法發布。二月森文部大臣刺さる。六月鐵工の組合たる同盟進行組起る七月新橋・神戸間の東海道線全通す。十月大隈外務大臣傷けらる。この年秀英舍の印刷・機械・石工・木挽工の組合組織さる。	幸田露伴奇男子・露團々・風流佛、屋崎紅葉色懺悔。蓮山人妹背貝。山田美妙蝴蝶。饗庭篁村掘出物・むら竹。森鷗外譯詩於母影等發表。伊藤博文帝國憲法義解。井上圓了日本政教論。内藤恥叟國體發揮。人見市太郎平民政論刊行。○十月しがらみ草紙創刊。
明治二十三年（一八九〇年）二十四歳	六月第一高等中學校卒業。七月東京出發、美濃・大阪を經て松山に歸省、月末大津を經て歸京。九月文科大學國文科に入學。しやくられの記・つゞれの錦・をし鳥物語・新體詩月下聞虫・朝顔等の著あり。露伴の風流佛を讀んで傾倒す。	四月商法發布。七月初めて衆議院議員の選擧を施行す十月社會問題研究會生る。十一月帝國議會召集さる。	露伴葉末集・ひげ男・一口劍紅葉伽羅枕・夏痩・綠雨犬蓼鷗外譯埋れ木、うたかたの記等發表乃至刊行。山田美妙日本韻文論發行。落合直文・小中村義象・萩野由之編の日本文學全書と佐々木信綱の日本歌學全書此年から發刊。
明治二十四年（一八九一年）二十五歳	大學在學中。三月末東京を發し房總に遊び四月歸京。七月大學進級試驗半ばを終へたまゝにて木曾を經て歸省、歸省中賴まれて初めて俳句の選をなす。九月上京、大宮公園内萬松樓に假寓、十一月川越地方に遊ぶ。冬駒込追分町に寓居。試驗の殘りをうけて進級す。かけはしの記を作り、小說月の都執筆し初める。冬俳句分類に着手。	一月板垣等四十餘名自由黨を脫す。五月露國皇太子大津にて津田三藏に傷けらる。十月濃尾大地震。十一月改進黨首大隈重信、自由黨首板垣と會見、兩黨聯合の機熟す。	森木幾造民主燈。石合齊藏社會黨瑣聞。社會主義綱領。城泉太郎濟世危言等刊行。露伴いさなとり・新葉末集・五重塔。紅葉二人女房・夏小袖。透谷蓬萊曲。鷗外文つかひ。綠雨かくれんぼ等發表。落合直文新選歌典刊行。○伊藤松宇等椎の友組織。

明治二十五年（一八九二年）二十六歳	一月小説會を催す。蓋し小説への關心を示すものなるべし。二月小説月の都を携へて露伴を訪ひ、出版のことを依頼す。露伴書肆に相談せしも成らず、余は人間よりも花鳥風月がすきなりとて俳句に專心するに至る。六月日本に「獺祭書屋俳話」を連載す。大學二年級の試驗に落第。九月退學、十二月日本新聞社に入社。春駒込より根岸に移る。七月歸省、十月大磯に月を賞し箱根、修善寺を廻りて歸京。十月鳴雪と日光に杖を曳く十一月家族を迎ふるため西下、京都に紅葉を賞す。十二月鳴雪と共に高尾山に至る。此年松宇の椎の友に加盟。	二月衆議院臨時選擧政爭激烈各地にて流血の慘を見る東洋社會黨成る。	山名次郎社會教育論。光吉光次郎譯國家社會制。斯波貞吉國家的社會論。酒井雄三郎排曲學論等出づ。萬朝報創刊、探偵小説流行す。○落合直文淺香社を組織。新派和歌を鼓吹す。佐々木信綱歌のしをり刊。雜誌歌學及明治の歌創刊。北村透谷我牢獄・・・德川時代平民的理想・德川時代平民的虚無思想、内部生命論等發表。人生に相渉るとは何の謂ぞを以て山路愛山を駁す。
明治二十六年（一八九三年）二十七歳	二月日本新聞に初めて俳句を載す。松宇等と共に雜誌俳諧發行（二號にして廢刊）夏虐を病む。七日十九日東京を發し奥羽への旅に上り八月二十日歸京。歳且閑話・俳人の奇行・文界八つ當り・鎌倉一見記・はて知らずの記・春光秋色・菊の園生・芭蕉雜談・貧居八詠等を著す。獺祭書屋俳話出版	一月全國新聞記者團新聞條例改正運動を起す。二月文官俸給の十分の一を製艦費に塡充の詔下る。群司大尉千島探險。福島中佐單騎シベリアを横斷す。此年井上文部大臣は時人の卑しめた實業教育を振作せんとしたなどの事があつた。	露伴さゝ舟・きくの濱松發表○文學界創刊。文學界・しがらみ草紙に俳諧に關する記事あらはる
明治二十七年（一八九四年）二十八歳	二月上根岸八十二に轉居。十一日紀元節に「小日本」發刊。その編輯主任たり。同月廿三日「小日本」に和歌一首を揭ぐ。七月「小日本」廢刊、日本に復歸す。八月鳴雪と共に王子に遊び、十	三月朝鮮志士金玉均刺さる。六月朝鮮に東學黨の亂起り清兵牙山に、我兵仁川に上陸す。日清役なり。七月豐島沖海戰。九月大本營を廣島に移す。	露伴有禍詩人。紅葉むらさき・冷熱。楊牛瀧口入道。綠雨見切物等發表さる。此年雜誌新聞に歌論の發表さるゝもの多し。二六新報に與謝野鐵幹「亡國の音」を揭載す。

	一月川崎・池上に、十二月佐倉に遊ぶ。俳句の寫生に興を覺え郊外を句作し歩く日清戰爭に友人の從軍するを見羨む。		
明治二十八年（一八九五年）二十九歳	三月三日從軍記者として東京發廣島に向ふ途次歸省、四月十日第二軍に從ひ宇品出帆、金州に上陸、旅順に向ふ。五月平和克復大連よりの歸途、船中にて喀血、神戸病院に入り七月須磨保養院に入院す。八月松山に歸省。漱石の寓居に在り、十月奈良を經て歸京す。俳諧と武事・陣中日記・養痾雜記、俳諧大要・棒三昧等執筆。	二月清國北洋艦隊降伏し提督丁汝昌自殺す。三月媾和使節李鴻章下關に來り折衝し、四月媾和成り、五月露・獨・佛三國干渉の結果遼東半島を清國に還附す。	北岡朔助社會革命論出づ。樋口一葉たけくらべ・にごりえ・十三夜其他。露伴新浦島。紅葉不言不語・青葡萄。綠雨門三味線。寒村從軍人夫等發表さる。○紅葉・竹冷等秋聲會を組織す。
明治二十九年	病氣の爲歩行自由ならず概ね床中に在り。五月松宇に宛ての書簡に「世の中にある限り一働かねば一家をいかんともし難く一二頃の田をもつて田舍に閑居致したきばかりに候」とあり。十月辛うじて目黒に遊び、中山法華經寺に詣で船橋に一泊す。蕪村の「新花摘」を讀み其句に傾倒、「俳人蕪村」の稿に着手。夏以降俳句會を毎月催す。從軍記事、三十棒・戲曲と四季・我が俳句・俳句問答・松蘿玉液等の著あり。竹の里人の名を以て新體詩鹿笛・父の墓を日本に掲載す。	三陸大海嘯、秋田・山形に震災あり。	紅葉多情多恨、綠雨あまがへる・金剛杵、一葉わかれ道・われから等發表。秋聲會機關誌秋の聲を發行。鷗外めざまし草創刊。鐵幹・東西南北、藤村若菜集等刊行。
（一八九六年）三十歳			
明治三十年（一八九七年）三十一歳	腰痛烈しく四月施術をうく五月病重篤、六月やゝ小康	一月勞働組合期成同盟會成る。三月金本位制を布く。	紅葉金色夜叉。逍遙沓手鳥孤城落月。鷗外そめちがへ

	十一月小說會を始め、門下の創作を朗讀せしめて批評す。十二月初めて蕪村忌を修す。ホトトギス柳原極堂によつて松山に生る。新體詩押韻の事、明治二十九年の俳句界・俳諧文古籠・俳句と漢詩・花枕・試問と其答の著あり。		
明治三十一年（一八九八年）三十二歳	物價騰貴して生活を苦しめしことは一月一日附大原氏宛の書簡によつて知られる一月より蕪村句集の輪講を催す。三月歌よみに與ふる書を十回に亘りて日本に連載、同時に歌をのせ初む。ホトトギス東京に遷りこれを主宰す。試問及其答・明治三十年の俳句界・寫生、寫	二月日本鐵道從業員四百名福島を中心に罷業す。三月深川印刷會社職工組合成る。六月保安條例廢止。七月清國政變。社會主義研究會起る。	足尾鑛毒事件起る。日本社會問題研究會成る。
			等發表。○鐵幹天地玄黃、末松謙澄國歌新論刊行。博文館俳諧文庫を刊行し初む。片山潛勞働世界創刊
			綠雨あられ酒發表、子規門下の寫生文の雜誌に載るもの多し。竹柏園より心の華創刊。久保猪之吉いかづち會を起す。

	實・閑人閑語・人々に答ふ・或問・小園の記・土達磨を毀つ辭・吾幼時の美感等執筆		
明治三十二年（一八九九年）三十三歳	病床にて日本新聞・ホトトギスのため執筆。小品文を作り且つ毎月歌會を其宅に催す。著す所曙覽の歌・歌話・俳人太祇・隨問隨答・俳句新派の傾向等。俳人蕪村・俳諧三佳書等上梓。	五月清國に義和團蜂起。	露伴椀久物語、蕪村虛空塵雲の峯等發表。土井晚翠天地有情、薄田泣菫暮笛集等刊行。
明治三十三年（一九〇〇年）三十四歳	病やうやく重し。寫生文の研究のために山會を開く。物價騰貴して生活を苦しめし如し。（卅三年三月二十一日附大原氏宛書簡參照）叙事文・新年雜記・ラムプの影・犬・車上の春光・水滸傳と八犬傳・竹の里歌話・短歌愚考明治三十二年の俳句界・病	六月義和團に對して列國艦隊太沽砲臺占領。七月第五師團渡清。八月聯合軍により北京陷落。	久松義典社會主義評論、島村滿都夫社會改良論其他娼妓に關する書籍の刊行を見る。蓋し救世軍の自由廢業を助けたるに刺戟されたものならん。○四月鐵幹明星を發刊す。鐵幹新詩社を組織す

	床問答等執筆。寸紅集・寒玉集上梓、蕪村輪講刊行。子規鐵幹不可併稱論起る。		
明治三十四年（一九〇一年）三十五歳	病漸く篤く病間花卉果物の寫生をしてわづかに慰む。墨汁一滴・初夢・死後・くだもの・病床六尺等の著あり。興津に居を移さんとの議ありしも止む。「春夏秋冬」春の部、俳句問答上梓	四月東京に第一無料宿泊所設立さる。職業紹介事業開始。五月山陽鐵道神戸・下關間開通。社會民主黨組織。六月星亨刺る。九月日本他十ヶ國と清國との媾和議定書調印せられ清國謝罪使入京す。十二月田中正造足尾事件に付直訴を企つ。	久松義典最近國家社會主義幸德傳次郎帝國主義、中江兆民一年有半、ブロール著松平康國譯政治罪惡論、安部磯雄社會問題解釋法等刊行。露伴二日ものがたり、與謝野晶子みだれ髪、藤村落梅集等發行 ○知十半面を創刊
明治三十五年（一九〇二年）三十六歳	病いよ〳〵重く危篤の狀態をつゞけ九月十九日午前二時歿、東京荒川區瀧野川町田端大龍寺に葬る。此年病床六尺、病床苦語、天王寺畔の蝸牛廬・仰臥漫錄等を執筆。蕪村句集輪講夏の部・獺祭書屋俳句帖抄上・俳句界四年間・子規隨筆・同續篇・春夏秋冬上梓 三允・稻青アラレ創刊	一月日英同盟成る。五聯隊の將士雪中行軍をなし多數凍死す。七月村井兄弟商會はじめてトラストを實行す。十二月教科書事件疑獄起る。	井上圓了宗教改革案、井上哲次郎倫理と宗教との關係大原祥一社會問題、煙山專太郎近世無政府主義、矢野文雄新社會、透谷全集等刊行。 ○知十俳諧風聞記、坂井久良伎文壇笑魔經出づ。尾崎紅葉歿す。

正・誤・　本文に新詩社の組織を明治三十二年とせるは三十三年の誤り

自然主義を中心とせる詩歌俳略年表

本表は子規略年譜の後を受けて日本派、根岸派の子規歿後から自然主義時代における動靜を記したもので、年譜が子規個人を中心としたものであるに對し、これは俳句における日本派（ホトトギス・日本俳句等）短歌における根岸短歌會等の事を記すものであるため、上段をそれに宛て、中段を社會事情に、下段に文壇、詩・歌・俳壇の情勢を記した。

三十六年	六月左千夫によつて『馬酔木』創刊。 碧梧桐『俳諧漫話』發行	十一月平民社組織さる。 十二月小村外相、ローゼン露西亞公使と會見、最後の考慮を求む。	平民新聞創刊。社會主義に關する書籍多く出版さる。 十一月新詩社を脱したる林外・泡鳴・御風等『白百合』發刊。ローマン主義運動を初む。 蒲原有明『獨絃哀歌』鷗外叙事詩『長曾我部信親』兒玉花外『社會主義詩集』（發禁）等刊行。 十二月落合直文歿。歌壇に口語歌運動あり。
三十七年	左千夫明星の歌をチョボクレ・ホーカイ節と罵る。 左千夫日露開戰に際し異常なる昂奮を以て「起て日本男兒」なる歌を作る。 中川四明『懸葵』創刊。	日露開戰、二月旅順及仁川の戰、五月南山の戰。六月得利寺、八月黄海・蔚山沖の戰、九月遼陽占領、十月沙河會戰、十一月二〇三高地占領。株式會社三越呉服店設立、デパートメントス	日比野寛日本臣道論、樋口勘次郎國家社會主義・國家社會主義教育論、西川光二郎土地國有論等出づ。藤村水彩畫家、木下尚江火の柱等發表さる。江見水蔭らの戰爭文學多くあらはる。

三十八年	ホトトギスに漱石の猫・幻影の盾あらはれ、續いて漱石門下の寫生文同誌に續々載る。九月より翌年十月へかけて二六紙上に中村樂天の「俳汝南」あらはる。青々妻木發行。左千夫と節の間に寫生是非論起る。	トアの嚆矢也。八月片山潛日本社會主義者を代表して國際社會黨大會にてプレハーノフと會見。一月旅順陥落、三月奉天占領、五月日本海々戦、九月ポーツマス條約成り、日比谷燒打事件起る。十月平民社解散。	直文萩の家遺稿、藤村藤村詩集、鐵幹・晶子毒草等發行。啄木の名この頃より現はる。
三十九年	虚子俳句に熱を失ひ小説に力を注ぐ。ホトトギスに漱石の坊ちやん現はる。左千夫野菊の墓を發表。八月碧梧桐第一次全國行脚に上る。碧梧桐續春夏秋冬（秋・冬）出づ。寫生文集帆立貝・子規小説集・子規小品文集・碧梧桐蚊帳つり草・虚子俳諧馬の糞・四明俳諧美學發行。左千夫明星における晶子の歌を批判す。	二月社會黨と平民黨の第一回大會を東京に開く。十一月滿鐵設立。	漱柳政太郎時代と教育、樋口勘次郎國家社會主義教育本論等發行。獨歩獨歩集、啄木あこがれ、有明春潮集、上田敏譯海潮音、泣菫二十五絃、泡鳴悲歌戀歌等出づ。詩壇に象徴詩運動盛ん。
四十年	虚子風流懺法、大内旅宿を漱石野分をホトトギスに發表。日本新聞より雪嶺以下退社「日本人」を「日本及日本人」として發行、碧梧桐其俳句の選者となる。續春夏秋冬（春・夏）出づ。子規書簡集。鳴雪の老梅居雜著等刊行さる。	一月第二次「平民新聞」創刊。二月足尾銅山に同盟罷業起り、五月別子銅山に暴動起る。	片山潛萬國社會黨・幸德傳次郎平民主義等出づ。自然主義運動漸く盛んにしてゾラ・モウパスサンの譯書刊行。二葉亭の平凡、花袋の蒲團等あらはれ、自然主義者たちは大に論陣を張つたが、詩壇もその影響をうけ天弦は詩歌の根本疑、川路柳虹は口語の自由詩塵溜を發表し、服部世志香の言文一致の詩、抱月の口語詩問題等も出た。
四十一年	乙字俳句界の新傾向を發表	四月中央本線開通。六月赤	芳賀矢一國民性十論、木山

		碧梧桐これを肯定して新傾向を唱へ、新傾向の名漸く注目さる。片上天弦ホトトギスに俳趣味を批判す。九月碧梧桐・片上天弦の俳趣味と左千夫の子規觀を駁す。左千夫應戰す。三井甲之アカネ創刊。虚子俳諧師を國民新聞に發表す。東洋城新春夏秋冬(春)を選す。	族事件起る。十月戊申詔書下る。
四十二年	四月碧梧桐第二次行脚に上る。五月日本俳句第一集刊行。東洋城春夏秋冬(夏秋)を、乙字故人春夏秋冬(秋・冬)を選す。		四月日糖事件起る。十月伊藤博文ハルピンに殺さる。小山内薫の自由劇場起る。
四十三年	乙字、碧梧桐を難ず。新傾	熊太郎社會主義運動史、石川三四郎日本社會主義史、田添鐵二近世社會主義史等刊行。獨歩二老人・竹の木戸、歎かざるの記、眞山青果南小泉村等刊行。白秋・勇等新詩社を脱退。口語自由詩、御風の痩犬、露風の喧い扉等出づ。白星・林外・臥城等都會詩社を結ぶ。明星廢刊。	第六潜水艇沈没。日韓合併
		タロポトキンのパンの略取河上肇人類原始の生活等刊行。白秋邪宗門、露風廢園刊行スバル・屋上庭園創刊さる。啄木食ふべき詩を發表。	山田孝雄日本國體概論、菊

		向に無中心論起る。自然主義の影響なるべし。節朝日紙上に土を發表し、左千夫日々紙上に分家を發表す。故人春夏秋冬(春・夏)刊行	成る。大逆事件起る。白瀧中尉南極探險の途に上る。
四十四年	井泉水層雲を創刊。俳壇最近の傾向を論ずを執筆。一碧樓試作を出して口語自由律句を發表す。四明觸背美學を著す。		幸德秋水等死刑執行。工場法公布。電車市有となり從業員の大同盟罷業あり。
四十五年 大正元年	乙字層雲の選を辭し自由律俳句を難ず。七月虚子俳句に復活すべくホトトギスの雜詠を再興す。井泉水句趣味とは何ぞや執筆しはじむ。碧梧桐新傾向の變遷發表。		米價大に騰貴す。日本勞働總同盟友愛會成立

		池大麓新日本、金子馬治時代思想の研究等刊行。啄木一握の砂を著し、牧水創作を發行。三田文學創刊。柴舟短歌滅亡論を發表す。	板垣退助一代華族論、井上哲次郎國民道德概論等刊行自然主義衰へ、新理想主義新浪漫主義、人道主義等起る。啄木悲しき玩具を著し此年逝く。牧水自然を創刊死か藝術かを著す。
		南北朝正潤論の書大に出づ夕暮白日社を起し詩歌を發行。白秋、朱欒を創刊啄木呼子と口笛を著す。	